63
66

俳諧寺可秋編

一茶一代全集

63-60

假衍寺一秋編

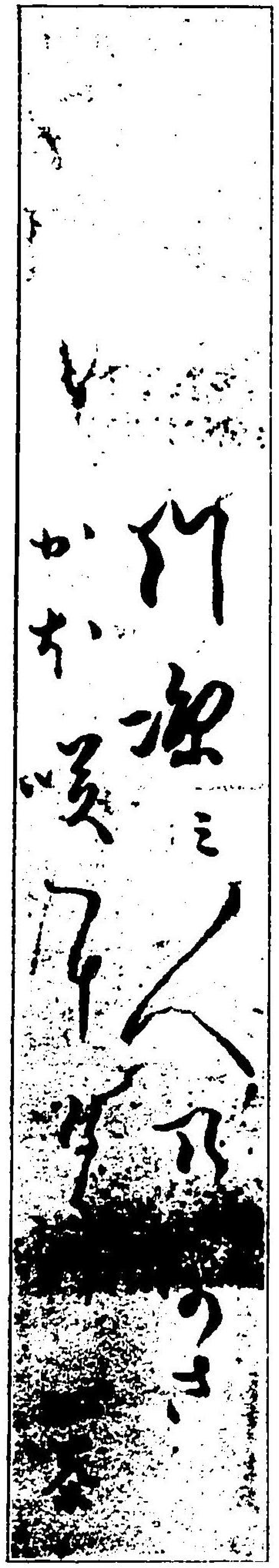
□条一代全集 お編

又玄書屋版

41 3 23

ひいき目に
みて
さへ
寒き
そぶりかな
一茶

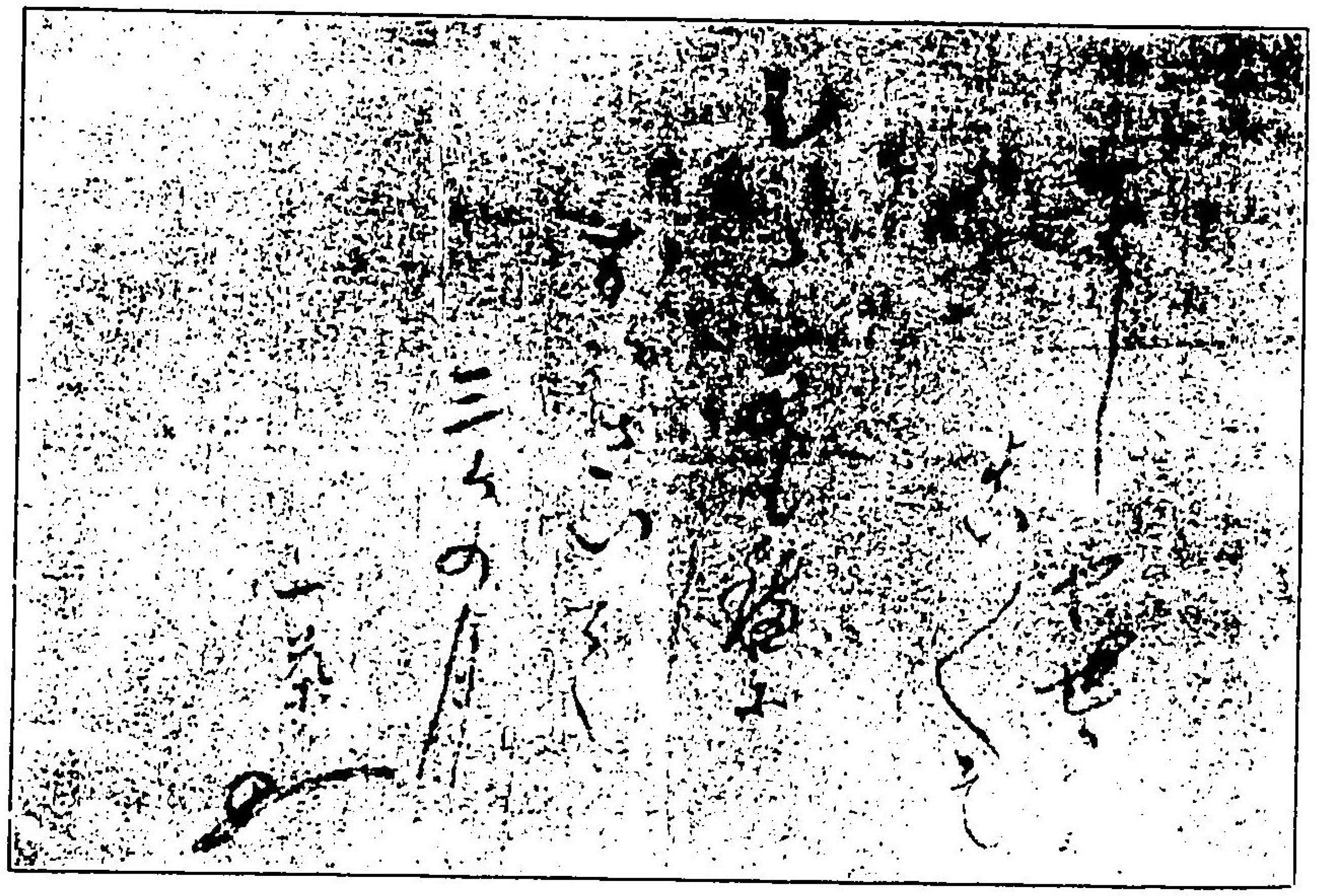
春甫處信寫



俳諧寺可秋蔵

俳諧寺可秋蔵

中村瑞靈藏



俳諧寺可秋藏

辛亥

信濃の中部陽鷹あるゝ竹友を伴ひて家居
を倣みる同國諏訪がの隠せられし竹林居士の
息古梅子なりし子孫これありし数冊の稿本を出し
示さる此稿ハ先考竹林の年若頃筆本を
つゞりて封せし其後隠居ありし序を乞て世に
公にせむことを幸なりと云ければ嗚咽
此を深くす予校訂るに一条一代全集お論

こ題きり桃青翁の俳諧におゐる文化文政のあり
さびの風雅にて杖履のとゞまる所なく其上吟哉
まうぬく又嘲るにつけて拙なき情をこめ
うら懐に之を誦さんと思ふ頃を翁さ思ふ勝を
頭つ数弥をぬき一時譜寄起こしおより蕉下
するなし此篇我が私の贅る今録歌仙三
る巻俳諧の文章をとて蕉翁一代の風雅を補

拝く録する序しとし一回ことに隣けく其人懼
然おとうきにはる祖形一哭み涙を去るの拙なき倣り
今此俳書に解さんとて今かのうすすて後環の
冥科出世に廣きもとを子ら巳てゝますく翁の俳
諧のまゝるに蕉歌あり あこの体なきや其思
山河に備えて翁の風雅をなびき無を淑き
て風月の情を排辞し門人諸君の手くめて任を

て俳諧の称を辞さす根岸のため此編を集た
るのすることもありし志の病ひにもとられ其後
簗にあそとやすなるに自ら再ひ起つへきを悟り
て遺稿と称家に托してをやめ月經悟るの來衣の
一句を止めて淫毛に留まり道にとなき人なりけや
おりて付集の成れるよしと生涯して世に紹介する
ものなり

桐陰鳳羽

凡例

一此書多年の困苦にして漸く完全せり

一發句は陰暦によつて季節を分つ之を輯るに當つて所々に散逸せる短册片紙やうのものより拾ひ或は古來の所藏家につき或は古集より逐次擧たれは年考の順序は錯亂する所あり又句意解しかたきものあれとも眞蹟によつて其儘に出したれは後證を俟つ

一俳諧歟は多くは手帳やうのもののより拔抄したれは誤謬なきにしもあらす覽客之を諒せよ

一文章は有題と無題とあれとも私に題を設けす古集に擧たるものは順次之を記せり

一尺牘はいたつて少しありといへとも風雅に關係なきは之を除く茶話等も又稱なり

一 連句も年號を正さず春夏秋冬雑とわかちたるのみ

一 此編成の後一の遺稿中より發句若干を得たり因て此編を前編とし尋て後編として印行せんとす茶翁年表も亦其時を竢て掲載すべし

一 此書編集につき最も力を盡されしは柏原の人中村瑞鷹(六左衛門)中村蘇月(六郎)幷に山崎素卿村山蒼(三一)の諸氏なり

明治三十九年四月　編者識

一茶一代全集前編

目次

發句……一頁
春の部……一頁
夏の部……三五頁
秋の部……六八頁
冬の部……九九頁
雜の部……一二二頁
俳諧歌……一二四頁
春の部……一二四頁
夏の部……一二八頁

秋の部……一二九頁
冬の部……一三三頁
雜の部……一三四頁
文章……一三九頁
尺牘……二〇四頁
茶話……二一三頁
連句……二一六頁
春の部……二一六頁
夏の部……二三二頁
秋の部……二四五頁
冬の部……二八一頁
雜の部……三一四頁

一茶一代全集

前編

俳諧寺可秋編

發句

春の部

元日　元日や上々吉の淺黄そら

元日も立のまんまの屑屋哉

年立　あら玉の年立歸るしらみ哉

明の春　あはら家の其身其まゝ明の春

享和元元旦

今朝の春　花しやもの我も今朝から三十九

旅元日

影法師もまめ息才そけさの春

正月　北國や家に雪なきお正月

四十年振りにて古郷に入る

ふしぎ／＼生れた家で今朝の春

初暦　古壁や釘で書たる初こよみ

餘所ののて搉を明けり初暦

深川

御慶　深川や川向ひにて御慶哉

かつしかや川むかふから御慶いふ

赤い花うゝつ／＼と今頃は

坊主天窓をふり立て御慶哉

初見空　初見空蝦夷の果まで御代の鐘

八丁堀貧乏小路に住みける頃

正月屋と呼りて餅賣り來りけ

る今夜も亦

雜煮　窓先や元日に來る雜煮賣

去年の五月生れたる娘に一人

前の雑煑膳を据へ
道へ笑へふたつになるそけさからは

初空　西方のはつ空拜む法師かな
はつ空を今こしらへる煙かな
はつそらへさし出す獅子の天窓哉

初日　心から大きく見ゆるはつ日かな
土蔵から筋違にさすはつ日かな
我々か顔もはつ日や御代の松
ぬかるみへ筇つゝはつてはつ日哉
神と思ふ方より三輪の日の出かな

初鴉　門の木の阿房鴉もはつ聲そ
大武家の飯すみきつて初鴉

我春
我春も上々吉そ梅の花
めてたさも中位なりおらが春

はつ春　はつ春も月夜となりぬ人の皺

花の春　朝笑ひいくらに買ふそ花の春
おのれやれ今や五十の花の春
身しろきのならぬ家にも花の春
座の身のふはり〳〵と花の春

初鶏　はつ鶏に神代の臼と申すべし

年玉　年玉てあらまし知るゝ家業哉
我庵やけさの年玉とりに来る
かくれ家や猫にもひとつ御年玉

新家賀
年立や雨おちの石凹むまて

若水　目さまして若水見るや隅田川
若水も隣の桶て仕舞けり
石川や若水といふもひとさかり

三崎の井は遊女柏木のかたみなりとかや
若水のよしなき人に汲れけり

年男つとむべき僕といふものあらざれば
名代に若水浴るからすかな
若水やさうとつきこむ梅の花

庵の井もけさ若水といはれけり
三文の若水あまる庵かな

寄下女戀

初夢　はつ夢の御座へ出されぬ咄し哉
はつ夢に猫もふし見る寝様かな

門松　門松や本町筋の夜の雨
折てさすそれも門松にて候
かま獅子が聰て拂ひぬ門の松

吉書　小坊主が棒を引ても吉書哉
わんぱくが先手のひらに筆はじめ
書賃の蜜柑みい〳〵吉書哉

飾　御地蔵のお首にかけるかざり哉

注連　又ことし七五三くるゝなり顔の皺
二ッ三ッ藪にかけるやあまり注連

齒固　歯がためにかんといはする小粒哉

御降　御降りや草の庵のもりはじめ
御降の祝儀に雪もちらりかな

餅花　餅花や鼠の眼には吉野山
餅花の木蔭にてうちあはゝ哉
かまけるな柳の枝に餅がなる

蓬莱　蓬莱やたゞ三文の御代の松
蓬莱になんむ〳〵といふ子哉
蓬莱や米の山なるひとつ松

福藁　福わらや十ばかりなる供やつこ

浪花に春を迎へて
能因が腹こやしたる雑煑哉

萬歳　萬歳のもひとつはやせ春の雪
萬歳や馬のしりへもひと祝ひ
大聲や廿日過ての御萬歳

謡始　翁のあとをつけたりうたひぞめ

弓始　一ぱいにはれきる山や弓はじめ

水祝　逃しなや水祝はるゝ五十聟

齋日
正月　けふこそは地蔵の衆も御正月

閏正月
正月が二日あつても雑手哉

正月のふたつありとよ浮寢どり
二ッあれば又三ッほしや御正月
正月や貸下駄ならふ日陰坂
正月も二日たつたとなまけけり
正月は青菜の粥も祝ひ哉
ござつたぞ正月早々春の雨
君が代の正月もせぬしだら哉
道ばたの土めづらしや御正月

古郷

正月や梅のかはりの大吹雪
北國や家に雪なき御正月

今朝春　春立て礒菜も千代のためし哉
今春が來た様子なり煙草盆
先もつて別條はなしけさの春
小便もうかとはならずけさの春
昭の春はや〱に借着哉
春めくや京も雀の啼邊り
うす壁やどちの穴から春が來る

春立　春立と申もいかゞ上野山
春立といふ許りにや吉野椀(わん)
春立や庵の鬼門の一里塚

還暦

春立や愚の上に又愚にかへる

不二の畫に

はつ春や千代のためしに立玉ふ
庵の春寢そへる程はかすみけり
春立や彌九郎改め一茶坊
春たつや二軒つなぎの片住居

子日　袴着て芝にころりと子の日哉

小松曳　人の引く小松に千代やさみすらん
小松ひく人とて人をおがむなり

手鞠　啼猫に赤ん目をして手鞠かな

長崎小善寺村にて

若菜　傾城も世帯ごゝろの若菜哉
若菜つむこじりの先の朝日哉
釜蓋を洗ふて待つや野は若菜

脇差の柄にふら〱わか菜哉
若菜つむ袂の下や隅田川
三足ほど旅めきにけり野は若菜
竹籠に少しあるこそ若菜哉
細腕の日の大きさよ朝若菜
若菜つみ若菜つみ〱誰やとふ
茜うら帯にはさんで若菜摘
手拭て引かついだる若菜哉
四五軒で一把をわける若菜哉

薺　その薺ありたけ買はん娘の子
垢爪やなづなの前もはづかしき

七種　七種や辨慶喜三太おしへだて

事始　事始めゝてたく雪のふりはるゝ

藪入　藪入やきのふ過たる山祭り
やぶ入のわざと暮るゝや草の月
養父入の供して行くや大男
藪入や墓の松風うしろ吹く

出代　梅の木に何か申て出代りぬ
出代やいづくも同じ梅の花
出代や江戸を見おろす碓氷山
出代やねらひすましてぬけ參り
鋲打の駕籠て出代る都哉
出代のまめなばかりを手柄哉
出代やふりさけみれば三笠山

一年を賣て親を養ふは孝行云
はん方なし

出代や汁の實までも蒔ておく
出代や山越て見る京のそら

二日灸　隱れ家や猫にもすゑる二日灸

初午　はつ午や門へつん出す庭切手
はつ午や火の焚く森の夜の雨
花の世を無官の狐鳴にけり
淡雪や小藪も稻荷大明神
はつ午や火を焚く畑の夜の雨
𤢖狐鳴き玉ふぞよ朧月

雛　菱餅やひなき宿のなつかしき

古ひなやがらくた店の日向ぼこ
ひゝな達そこて見やしやれ吉野山
へな土でつくねた雛もまつり哉
吉日の御顔なりけりひゝなつれ
土ひなも祭の花はありにけり
土のひな花の木陰に隠居哉
片隅にすゝけ雛も夫婦かな
花の世や寺もきへらのひな祭
ひな棚にちよいと直りし小猫哉
今ひとつひなの目をせよよい娘

童戯

べろ〳〵の神やひゝなについと向く
うら風においろのくろいひゝなかな
手のひらにかざつて見るや市の雛
すゝけひなしかも上座をなされけり
居並んて達摩もひなの仲間かな
花さかぬ片山影もひなまつり
ひな棚に糞をして行く雀哉
持すればひゝなをなむる子供哉

曲水

筆そへておもふ杯流しけり
川下や果は鬮とりの小さかつき
曲水やどたり寝ころぶ其角組

草餅

草餅を鍋でこねても祝ひ哉

月をめて花にかなしむは雲の
上人の世にして

おらが世やそこらの草も餅になる
子ありてや蓬の門の蓬餅

涅槃會

御ねはんやとりわけ花の十五日
花のところへ雪の降る涅槃哉
小うるさい花が咲くとて寝釈迦哉
相伴にわれ等もころり涅槃哉
花ちりて死も上手な佛かな
子鴉や佛の日とて口をあく
死花をぱつとさかせる佛かな
眼の毒の花が咲くとて寝釈迦哉
涅槃會や鳥と法華經〳〵と

珠數かけて山鳩ならぶ涅槃哉
其脇にころり小僧の寝釈迦哉
遊ぶ日や在家の壁も涅槃像
この通り寝てくらせとねはん哉
寝ておはしても佛ぞよ花と錢
ねはん會や錢見ておはす貌もある

彼岸

彼岸とて袖に遁するしらみ哉
中日としつてのさはるしらみ哉
小莚にのさ〳〵彼岸しらみ哉

冴

三日月がそると寒さが冴返る

長閑

長閑さや土まきちらす雪の上
長閑さや垣間を覗く山の僧
長閑さや淺間の畑ひるの月
蛤の鳥にとらるゝ長閑さよ
長閑さやちよ〳〵になつたるくらま山

小金原

呼合ふて長閑さ暮す野馬哉
龜の甲並んで東風に吹かれけり

橋場の渡にて

長閑しや舟が何やら風の吹く

春日

春の日や暮ても見ゆる東山
當なしにぶらついて來る春日哉

日永

大道へころ〳〵犬の日永かな
あたら世や日が永いのに花がさく
もだいるや花の日永を身にこまる
ぶら〳〵と歩行てのある日脚哉
白犬の眉かゝれたる日永かな
日が永い〳〵とのらりくらり哉
能なしの身を棚へ上げて日永哉
大口をあいて鴉の日永かな
細けぶりいかさま永き日なりけり
念佛の申貸とる日永かな
永き日や沈香も焚ず屁もひらず
べらぼうに日が長い哉長い哉
永き日や羽織ながらの坂普請
永き日や野良の仕事の目に見ゆる

くらがりの牛をひき出す日永哉
隣から竹そしらるゝ日永かな
永き日や遊び仕事に風も吹く
ひよろ〳〵と痩菜花咲く日永哉
永き日や牛の涎も一里ほど
永き日や烟草法度の小金原
歩行よき程に風ふく日永かな
老ぬれば日の永いにもなみだ哉
まち〳〵し日永となれど田舎哉
ひた〳〵と日永の汐の草葉哉

不忍の池龜どもの菓子をねだるありさまを見るに此節娑婆に萬年の逗留もならん

永き日を喰ふや喰はずや池の龜
やゑ〳〵の妹もとつぐ春邊かな
田と畑のめぐりくらする春邊哉

紙鳶

紙鳶あげてゆるりとしたる小村哉
日の暮に紙鳶の揃ふや町の空

うつくしき凧上りけり乞食小屋
大男おのが遊びか凧
大名の霞がせきやいかのぼり
山寺や翌日剃る兒の紙鳶
いかのぼり今木母寺は夜に入るぞ

爐塞

爐のふたをはや雀等がふしにけり
爐ふさぎやまだ定まらぬより柱

草摘

むさし野の草をつむとて晴着哉

茶摘

母の分つめば用なき茶山哉
しからぎや大僧正も茶摘うた
茶もつみぬ杉も作りぬ丘の家
婆々どのゝ眼鏡をかけて茶摘哉
摘むほどは手前遣ひの藪茶哉

扱茶

夕暮の笠も小袴も扱茶哉
塗笠へばら〳〵と扱茶哉

種蒔

梅の木やつれに蒔たる菜種哉
我蒔た種をやれ〳〵けさの露

朝顔蒔

はや淋し朝顔蒔といふ畑

蠶

末の子も別にねだりて蠶哉
物〳〵にきげんとらるゝかひこ哉
様づけに育てられたる蠶哉

行春

ゆさ〳〵と春が行くぞよ野邊の草
山ざくらそなたの空も三十日哉
春永となまけしもけふ限り哉
行春や我を見たをす古着買
舞舞ふや翌日なき春を笑貌
やよ虱這へ〳〵春の行く方へ

龍田にて

ゆく春にひと足おそき矢橋哉

春風

春風や地藏の膝の赤の飯
灸濟て馬もたつなり春の風
宿引に女も出たり春の風
春風や順禮共かねり供養
春風に女見に出るをんな哉
春風や蘆の丸屋の一ッ口
春の風草深くても故郷なり

春風や三人乘の一人馬
狗が鼠とるなり春の風
春風や武士も吹かるゝ女坂

淺草寺

馬の脊の幣を吹くなり春の風
春風や女も越へる箱根山
山々やあたら春かぜ夜さり吹く

愛宕山

細長い春風吹くや女坂

二月二十五日より開帳

春風や牛にひかれて善光寺

高い山から谷底見れば

春の風おまんが布のなりにふく

山田猿湯

春風に猿も親子の湯治哉

碓氷峠にて

信濃路やそこいち寒し春の風

初雷

手初めは小雷にてすますなり

春雨

三助が初瀬詣や春の雨
萩芒出代雨の降にけり
かた〱は雪のふるなり春の雨
餅の出る槌のほしさよ春の雨
傘さして箱根越すなり春の雨
朝市に大肌ぬいではるの雨
山里も銭湯わきてはるの雨
掃溜の赤元結や春の雨
餅買に箱提灯やはるの雨
起〱の眼につけるなり春の雨
貝殻に明ろき道や春の雨
月の夜を降りあかすなり春の雨
貝殻の不二がちよんぼり春の雨
馬までもはたご泊りや春の雨
春雨や提灯持の小傾城
春雨や喰はれ殘りの鴨が鳴
春雨に大欠伸する美人哉
春雨に花殻拾ろふゑほし哉

春雨や窓から直切る芝肴
春雨や翌日は何喰ふ浦の家
春雨や御殿女中の買喰ひ
春雨や何に餅つく丘の家
不性神そこのき玉へ春の雨
この杭は烏のうなり春の雨
春雨や無駄に渡りし二文橋
　福をよぶといふ事はやりければ
春雨や盃見せて狐よぶ
線香や平内堂の春の雨
春雨や鯲ののぼる程の瀧
ほうろくをかざして行くや春の雨
春雨や猫にをどりををしへる子
福狐出玉ふぞよ春の雨
人の世や直にはふらぬ春の雨
棧を唄て渡るや春の雨
日歸りの湯治もすなり春の雨
ほんがりと麹の花や春の雨

芝居へと人はいふなり春の雨
春雨やさらりと抜し正月氣
奥山も博奕の世なり春の雨
軒だれもまだ春めかぬ雨日哉
春雨の額にあたる木の間哉
春雨や草菌けぶる竹そよく
古利根や羽口も出來て春の雨
　宿山寺
春雨や窓も一人にひとつづゝ
酒ありと壁に書たり春の雨
餅欠は石となりけり春の雨
膳先に雀啼くなりはるの雨
穴藏の中てもの云ふ春の雨
北嵯峨や春の雨夜の昔杵
きのふ寢し嵯峨山見ゆる春の雨
旅待のうどん打つなり春の雨
わら苞や豆ふも見えて春の雨
負弓の數にかゝりて春のあめ

古郷や草の春雨鍬祭
　八巣題火坊
門の木や念彼觀音の春の雨
　婚禮
春雨や相に相生の松の聲
　鳩いけんして曰く
梟よつらくせ直せ春の雨
　春甫新宅の賀
安堵して鼠も寢るよ春の雨
　二軒家
二軒家は二軒餅つく春の雨

春の月

氣の儘に脇指さして春の月
つひそこの二文渡しや春の月
土橋の神酒德利や春の月
大道はふみかけんなり春の月
　水江春色
すつぽんも時やつくらん春の月
淀舟の下りごゝろや春の月

新潟にて
髪剃て遊びに出る春の月
布袋月見る書
まんぢうも袋にはなしおぼろ月

朧
門〳〵のいぢくれ松もおぼろ哉

春の雪
むらさきの袖にちりけり春の雪
草山のこやしになるや春の雪
萬歳よもひとつはやせ春の雪
これぎりと見えてどつさり春の雪
大原は人だらけなり春の雪
古郷や餅につきこむ春の雪
雷の光る中より春の雪
春もまた雪神鳴や信濃山

殘雪
淺間しや一寸のがれに殘る雪
彌陀堂にすがりて雪の殘りけり

淡雪
淡雪とあなどるまいぞ三四尺

雪解
藪の雪いつかな解ぬ覺悟哉
雪解や門は雀の十五日
小屁の薪と猫と雪解かな
人のするなりに行なり雪解川
子守唄雀が雪も解けにけり
鍋の尻干ならべたる雪解哉
雪解や鷲が三匹立臼に
世にあれば無理に解す也門の雪
庵の雪下手な消し樣したりけり
門先や杖て作りし雪解川
素鏡の母八十八歳の賀
門畑や米の字形りの雪解川
とけ際になつて見る也比良の雪

陽炎
江戸橋本町聖人
陽炎や歩行ながらの御法談
陽炎や椽からころりねぼけ猫
陽炎や新吉原の螢の體
陽炎や子をかくされし親の顏
陽炎や鍬て追やるむら烏
かけろふの膝にもゆるや關の前

陽炎やいかにも富士は奇麗なり
陽炎や臼の中からまつ一筋
陽炎や貝むく奴かうしろから
陽炎や蕎麥屋が門の箸の山
陽炎や草の上行くぬれ鼠
陽炎にはつかり口を鰯かな
陽炎や土の娣様土僧都
陽炎の内からもたつ淺茅哉
みどり子の二七日
陽炎の眼につきまとふ笑ひ顏

霞
はつ虹に草も閏のはたけかな
京見えて腸をもむなりはる霞
彼の桃も流れ來るかよ春霞
けふも〳〵一人屋根ふく春霞
ほく〳〵と霞んで來るはどなた哉
迹供は霞引けり加賀守
首途
迹の家見るや霞めは霞むとて
かすむならかすめて捨てし庵哉
上野にて
拍子木や供のかけする霞から
玉川
さらし布霞のたしに聳えけり
いたふりし今の乞食よつく霞む
霞む日に古くもならぬ卒土婆哉
安針町は衆鳥を床の下に
活畳てひさく處なり
かすむ日や目を縫れつゝ雁の鳴く
西山やおのれが乘るはとの霞
けふも〳〵かすんでくらす山家哉
玉琴も乞食の笛も霞みけり
かすむ日や夕山影の飴の笛
霞む日やしんかんとして大座敷
馬上から默禮するや海霞
窓先や常來る人の海霞
茶鳴子のやたらになるや春霞

かすむ日の咄しするやら野邊の馬
わが里はどう霞んでもいひつなり
古鐘やかすめる聲もむつかしや
°牡丹餅をつかんて霞む鳥かな
麥の葉も刺きけんそよ春霞
盗人のかすんてけゝら笑ひ哉
傘の雫なからにかすむかな
霞より引つゝくなり諸大名
坂口や丸にのゝ字が先かすむ
誰それとしれて霞むや門の原

京見坂曉
すりこぎの音にはしまる霞哉

戸隠山
霞む日も雪の上なる住居哉

輕井澤
笠てするさらは〳〵やうす霞

菜翁と遊ぶ
この門の霞むたそくや隅田の鶴

栗之六十賀
古松やまたあらためていく霞

上野遠望
白壁のそしられながら霞みけり
かすむとて人むす虫も出たりけり
かすむそよ金のなる木の植所

解凍
凍とけや山の在家も雪談議
いてとけのさかりにはてし談議哉

佐保姫
佐保姫の染損ひや斑山

春の山
春の山ひとり〳〵に暮かゝる
ねころぶや手鞠ほとても春の山
雪國や雪ちりながら春の山

店開賀

山笑
福の來る門や野山の朝笑ひ
山々は袂にすれて青むそよ

山火
くつ付いた人も詠る山火哉

山燒
鶴龜の遊ぶ程つゝ燒野哉
山燒の明りに下る夜舟哉

ねてからや咄しがてらや山を燒

野の宮にかゝれたる歸芝法師を訪ふ

春田
柴の門や春田の風にやしなはれ

汐干狩
青天のとつはづれなり汐干狩
深川や御庭の中の汐干かな
深川や庭に幾むれ汐干狩
麥の葉は汐干なくれのからす哉
人并に鳩も雀も汐干かり

猫の戀
ねて起て大欠伸して猫の戀
門番か明てくれけりねこの戀
猫の戀めつきり棒に別れけり
しはられて鼾かくなり猫の戀
關守が叱りかえすや猫の戀
うかれ猫戀氣遂と見られけり
通ふにも四方山なり寺の猫
門の山猫の通路つきにけり
汚れ猫それさへ妻は持にけり
面の皮とう剝れても浮れ猫
鶯も訛を直せ猫の戀
馬鹿猫や身代きりの浮れ聲
おとされて引返すなりうかれ猫
嗅て見る也よしにする也猫の戀
雨の夜や勘當されしねこの戀
うかれ猫とのつらさけて又來たそ
猫鳴くや中を流るゝ隅田川
うかれ猫奇妙に焦てもとりけり
蒲公英の天窓はりつゝ猫の戀
むさし野や只ひとつ家のうかれ猫
さし足やぬき足ねこもしのふ戀
松原や何をか稼く子もちねこ
戀猫のぬからぬ顔てもとりけり
山猫もつくり聲してしのひけり
戀ねこや堅横村をなき歩行
戀猫や縄目の耻をうけなから
有明や家なし猫も戀を鳴く

南都

落角

垣にてもせよとて落す鹿の角
小男鹿よ手拭かさん角のあと
角落て耻しけなり山の鹿
法を世や悪たれ鹿も角落る
今落た角を枕に寝しか哉
小男鹿の落した角をまくら哉

呼子鳥

好き〱やこの年寄を呼子鳥

鶯

うぐひすを招くやうなる笑ひ哉
鶯や啼仕度する影法師
鶯や殿より先へ朝めしを
鶯にならして行や土の鈴
三か月やふはりと梅にうくひすか
鍬の柄に鶯なくや小梅村
鶯ののむそ溜るそわり下水
うくひすはとんぼ返りも上手哉
鶯にあてかつて啻く垣根哉
うくひすのまてにまはるや組屋敷
うくひすのぬからぬ顔や東山
鶯のはねかへさるゝつるべ哉
鶯やくらま育ちのこゑもせす
鶯のけとつて行や不性垣
鶯や軒さらぬこと小一日
鶯にねをつけられし虱哉
うくひすの法ほけ経を信濃哉
これほとの上鶯を田舎かな
なつかしや下手鶯も遠啼は
鶯かちよいと隣のついてかな
袖下はみな鶯や小關越
黄鳥や泥足ぬくふ梅の花
うくひすや松にとまれは松の聲
鶯やこのこゑにしてこの山家
鶯や南は鴻の背たゝく
うくひすやひと勿體をつけてから
鶯のむた足したる垣根哉
やよかにも御鶯そ寛永寺

鶯かきよつとするそよ咳はらひ
うくひすよ江戸の氷室は何か咲く
うくひすの野にして鳴や留守御殿
赤い身とならんた處からくひすそ
鶯やよくあきらめた籠の聲
うくひすのはかをやりけり仕舞際
うくひすにほうりつけたりうかひ水
鶯や男法度の奥の院
鶯や棒にふつたる竹山に
鶯のやけをおこすや仕舞きは
うくひすの上きけんなり上戸村
鶯の兄弟つれや同し聲
来るも〱下手鶯そおれか垣

天王寺

鶯や彌陀の淨土の東門

駿府にて

鶯の笠ぬふ竹の都かな
鶯もひとかととれし山家哉

松室に遊ふ

鶯の馳走にはかぬ垣根哉

湖水

雲雀

吹れ行舟や雲雀とすれ遊ひ
大井川見えてそれから雲雀哉
野大根も花となりけりなく雲雀
ひと舍りおくれし笠よ啼く雲雀
ひる飯をたへにおりたる雲雀哉
さゝ浪や雲雀の際のつり小舟
松島の小隅かくれて啼くひはり
夕雲雀との松島か寝るところ

輕井澤にて

三味線に通うしなふや落雲雀
横のりの馬のつゝくや夕雲雀

碓氷峠

坂本は袂の下や夕雲雀
うつくしや雲雀が啼し跡の空
念佛にはやされて昇る雲雀哉

子をかくす藪の通りや鳴く雲雀

雉子

夕雉子や坂本見えて一里鐘
きし鳴やこれより西は庵の領
野佛の袖につかれて雉子の啼く
かけぬけてこゝまて來よと雉子鳴
雉子と臼寺の小壷は過にけり
草原をあらはれてなく雉子哉
小男鹿の脊中をかりて雉子の啼

東叡山

駕籠先や下に〳〵と雉子の聲
夕雉子の走りどまりや鳰の海
きしうろ〳〵庵を覗くそよ
雉子啼くや先今日は是きりと
淺山のいよ〳〵淺き雉子哉
黒門や下に〳〵と雉子の聲
きし啼くや見かけた山のあるやうに
雉子啼くや藪の小側のけんとんや

乙鳥

乙鳥もおれか門をは開ふけな
乙鳥や人の物いふ上になく
飯前に京へ往て來る乙鳥哉
夕乙鳥われには翌日のあてもなし

南都

朝起の古風は捨てぬ乙鳥哉
つはくらめ來る吉日の味噌賣哉
乙鳥や里のはくちをへちやくちやと
面〳〵にゐのか乙鳥のひゐき哉
大佛の鼻から出る乙鳥哉
とふ乙鳥庵のけふりのあらめてた
神國のふりや乙鳥の紅粉付る
乙鳥を待てもそつく藏哉

歸雁

草の雨松の月夜や歸る雁
雨たれの有明月やかへる雁
行かけの駄賃に啼くや歸る雁
やれ啼くなそれ程無事で歸る雁
つれのない雁もさつさと歸りけり
寐た跡の尻も結はす歸る雁

有明の雁になりたや行く雁に
行雁やものゝいひたき三日の月
雁行くや跡はほんまの隅田川
歸る雁北陸道にかゝるなり
江戸の水飲た聲して歸る雁
歸る雁何を咄して行くやらん
去たいと雁の啼くらん夜の雪
かしましや江戸見た雁の歸り樣
去はくる鳫よあちこち見しめ見る
善光寺も直通りして歸る雁
門口の行燈かすみて歸る雁

墨坂新十郎といふものゝユミなる雁鴨の牢屋にて

歸りたく雁は思ふや思はすや
わやくやは若い同士か歸る雁
親と子と三人連や歸る雁
夫婦雁咄して行くそあれ行ぞ
足もとのあかるいうちやかへる雁
いざゝらは〳〵と雁のきけん哉
雁行くや人のかれこれいふうちに
辛崎を三遍まはつてかへる雁
雁行やむさしきたなし〳〵と
雁行くやためつすかめつ隅田川
早立は千住とまりかかへる雁
すつぽんも羽根ほしけなり歸る雁

新橋の渡りを過るに鴻雁處々に屯すそか中に貴く見ゆるもあり賤しきもありそれ〳〵列をみたさす彼等か境界に禮儀三百威儀三千はありぬべし

鳥ともや一組つゝに去支度
去鳥は去して雁のねぶり哉

庵前

けふまてはよくしんほして歸る雁
殘る雁一羽となりて春いく日

外ヶ濱

雁啼くやいま日本をはなるゝぞ
一度見たき更級山や歸る雁
あしのない雁か啼く〳〵歸りけり
どこてとう正月をして歸る雁
玉川や臼の下より歸る雁
歸る日も一番先や寡雁
行な雁どつこも茨の浮世ぞや
行燈て飯くふ人や歸る雁
行く雁や子とおぼしきを先に立て

雀子

雀子や女の中の豆いり子
踏初は千代の竹なり雀の子
雀子や川の中にて親を呼ふ
杵さきや頭あふない雀の子
赤馬の鼻て吹けり雀の子
大勢の子をつれ歩行く雀哉
雀子よそこのけ〳〵御馬が通る
飯粒や人も口あく雀の子
雀子や御竹如來のなかし元
見るうちにひとりかせきや雀の子
竹にいさ棒にいさとや親雀
雀の子庵の垪りかうまいやら
やつれたぞ子にやつれたぞ門雀
慈悲すれは糞をするなり雀の子
晴天に產聲上る雀かな

善光寺

開帳に逢ふや雀も親子連

鳥巢

うき世とてあんな小鳥も巢を作る
鳥の巢に明わたしたる庵哉
鳥の巢にぬき窓されし庵哉
切る木ともしらてや鳥の巢を作る

巢立鳥

塊もこゝろおくかよ巢立鳥
右菜畑もともあり
我宿は何にもないぞ巢立鳥
糞殘る巢を喰ひ行鶏哉
又むだに口あく鳥のまゝ子哉

蝶

むつましや生れ替らば野邊の蝶
はつ蝶の舞ひこぼしけり鳩の豆
草庵の棚さかしする胡蝶哉
叢中も佛おはして蝶か舞ふ
咎人を打つ手にすかる胡蝶哉
蝶と共に吾も七野を巡る哉
蝶とんてかはゆき竹の出たりけり
蝶寢るや草引むしる尻の先
はつかしや三十日が來ても草の蝶
蝶來るや何のしやくりもない庵
御座敷の隅から隅へ胡蝶哉
氣の毒やおれをしたふて來る胡蝶
草の蝶七ッ下りと見ゆるなり
鳥さしの竿の邪魔する胡蝶哉
籠の鳥蝶をうらやむめつき哉
蝶ともにうろ〳〵慾の浮世哉
引かける大盃に胡蝶かな
菓子盆の足らぬ所へ胡蝶哉
白黄いろ蝶もいろどりしたりけり
淺黄たけ少しじみなり飛胡蝶
淺黄蝶淺黄頭巾の世なりけり
枕する腕に蝶々寢たりけり
菅莚それ〳〵蝶よ汚るゝな
大旅にふせられはくる胡蝶哉
大井川蝶の羽風もあまるなり
來る蝶に鼻をあかする垣根哉
蝶にてふ小てふの中の山家哉
我迹につき損してや歸る蝶
黃組白組來る蝶の出立哉
蓑蟲(みの)は蝶にもならぬ覺悟哉
大猫の尻尾てなふる胡蝶哉
ひと大名蝶にまふれて仕廻けり
蝶とふやこの世に望みないやうに
莽からあんな胡蝶の生れけり
猪ねらふ肱(ヒヂ)にすかる胡蝶哉
田に烟にてん〴〵舞の胡蝶哉

蝶と鹿のかれぬ中と見ゆる也
門の蝶子が遁へは飛び遁へは飛ぶ
舞ふ蝶にふりも直さぬ野猫哉
小男鹿や蝶をふるつて又眠る
貧都留の御凸を撫る胡蝶哉

　奉納

おんひら〳〵蝶も金ひら參り哉

　湯田中

湯の中や人から人へ蝶の飛ぶ

　てふと云ふ娘山路の案内しけるに俄に雨はら〳〵とふりければ

木の陰や蝶と含るも他生の縁

　茂林寺

蝶〳〵のふはりと飛んだ茶釜哉

蜂

屎蟲や蜂となつてもきらはるゝ
熊蜂も軒を知つてもかへりけり

　下市に泊りて

みよし野へ稼に行くや庵の蜂

虹

神風や虹かをしへる山の道
それ虹に世話をやかすな明り窓
虹ひとつひる寢起して廻りけり
飛ぶ虹にまかせて行けば野茶や哉

蛙

悠然として山を見るかはづ哉
草かげにつんとして居る蛙哉
梅の木になき直したる蛙哉
親分と見えて上座に鳴く蛙
おれとして白眼くらする蛙哉
榎まで春めかしたす鳴かはづ
一とつ星見つけたやうに鳴く蛙
むら雨や歩行ながらに鳴く蛙
小高みに音頭取のかはつ哉
古草のはら〳〵雨やなくかはつ
江戸川に蛙もきくやさし出しに
うあうなき[illegible]かゝへてなく蛙
本堂寺の花を着て寢る蛙哉

五百崎や龜の子笊に鳴く蛙
叱つてもしあ〳〵として蛙哉
夕暮に蛙は何を思案はし
蛙鳴く〳〵や狐の嫁が出た〳〵と
小蛙もなくなり口をもつた逆
其聲てひとつをとれよ鳴蛙
向〳〵に蛙のいとこはとこ哉
鳴出して五分てもひかぬ蛙哉
我庵や蛙初手から老を鳴く
めてたさの烽𩑶えて鳴蛙
假初の嫁入月夜や鳴かはづ
我を見て苦い顏する蛙哉
鳴蛙花の世の中よかるべし
けふ明し窓の月夜やなく蛙
鳴なから蛙飛ぶなり草の雨
飛ぶ所急度見すます蛙哉
花の咲くうちにしまへよ鳴蛙
象潟や櫻をたへて啼くかはづ
ちる花をはつたとにらむ蛙哉
蕗の葉に飛んでひつくり蛙哉
つるべにも一夜過けり啼蛙
玉川や先御さきへととふ蛙

　角田堤

川縁て江戸を眺る蛙哉
かゝる代に何をほたへて啼蛙
五百崎や庇の上に鳴くかはつ
薄縁にばりして遁る蛙哉

　蛙たゝかひといふを見て

瘦蛙まけるな一茶これにあり

蛇穴出

あな愛世と知らてや蛇の穴を出る

鶉

とふ鶉鼠のむかしむするゝな
念佛せよ田鼠鶉になりたくば
田鼠鶉人は白髮に化にけり

鮎

　鮎　汲

あつちこち鮎迯て已に入日哉

梅

あつらへし春や是梅是椿

●門の梅ひと箕こほれてひと箕咲く
樂々と梅も伸たる田舍哉
あなかしこ鳥にしらすな梅の花
梅か香にかふり馴たる莚哉

山田温泉

梅か香よ温泉の香よさては三かの月
米つきや臼に腰かけて梅の花
紅梅やうつとしかれは二本まて
藪村やまぐれあたりも梅の花
梅折るや盗みますると大聲に
梅の木や慾にや願はぬ三日の月
人聲に鶴もおりけり梅屋敷
もゝんじの出さうな藪を梅の花
正月や夜はよるとて梅の花
丘の梅けさ見し枝もなかりけり
炭賣の日數わつかに梅の花
手を掛けて人の顔見る梅の花
人のするほうほけきやうも梅の花
嫁貰ふ時分となるや梅の花
梅咲くや唐土の鳥か來ぬ先に
梟か先かけしたり梅の花
月の梅の酢のこんにやくと今日も過ぬ
雪守か山を下りけり梅の花
小坊主や筆を咥へて梅の花
梅の香のわりにはやき山家哉
梅か香や神酒を備ふる御制札
下戸村やしんかんとして梅の花
梅の花こゝを盗めとさす月か
そら錠と人にはつけよ梅の花
梅か香をすゝり込たる茶汁哉
梅の月花の表は下なかれ
片枝の待遠しさよ梅の花
松間にひとりすまして梅の花
しら梅の俗をはなれし木振り哉
梅の木のある顔もせぬ山家哉
餅組もひと座敷なり梅の花

鳥の音に咲うともせぬ藪の梅
梅に月いやみからみはなかりけり
疵はけははや赤〳〵と梅の花
庵の梅よんところなく咲にけり
梅咲くや鍵をくはへし御狐
梅折るや天窓の丸い影法師
あなかちに丸うなうても梅に月
梅咲けと鶯啼けとひとり哉
御不運の佛の野梅咲にけり
鍵はら〳〵敬て白す梅の花
馬貝を我もはかうそ里の梅

長谷の山中に籠りて

我もけさ僧都の部なり梅の花
貫之の梅よ附たり三かの月

天神參

ちさい子の麻上下や梅の花

二月七日首途

笠きるや梅の咲く日を吉日と

御殿山

鶯も親子つとめや梅の花
翌日降ると梟啼くか梅の花
火種なき家を守るや梅の花
梅咲くや門をならへし昔好

山鷲よりも珍らしき新金を歯にあてけるを

二歩判もはつ音出しけり梅の花
婆々か餅爺か梅も咲にけり
梅守に舌きらるゝなむら雀
村はしや梅に婆々か梅の花
あなかちに留守とも見えす梅の花
隅の梅よん所なく咲くやうや
佐保姫も虱見玉へ梅の花
藪尻の賽錢箱や梅の花
梅の花夜は尿桶も見えさりし
欠茶碗開帳したり梅の花
梅咲くや泥草鞋にて小盃

梅の花人は何程油斷なる
臭水の井戸の際より梅の花
梅か香やそも目出度は夜の事
梅咲くや老のつむりにしみる程
梅咲くや鎌倉五寺の外の院
朝聲や子のたまはく梅の花
梅咲くや江戸見て來たる子供客
娲捨や子捨る藪も梅の花
大淀や大曙のうめの花
風呂敷をかむつて見たり梅の花
一入の新善光寺そ梅の花
此壁にむた書無用梅の花
蓑虫や梅に下るはかれか役

庚申

ちりめんの猿かいさむや梅の花

龜井戸天滿宮二句

梅咲くや信濃の奥も草履道
烏帽子着た馬士とのや梅の

御櫻御梅の花松の月

梅に竹箒畵賛

梅咲りいさ掃除せん烏の留守
草分けの貧乏家や梅の花
大空もせましと梅の立枝哉

信濃言葉

赤いそよあのもの折れか梅の花

葛西言葉

せなみせへ作兵衛店の梅だんべへ

相馬覽古

梅か香や平親王の御月夜

古之爲關也將以禦暴
今之爲關也將以爲暴

關守の灸點はやるうめの花

二月二十四日通夜

梅しんとしておのつから頭か下る
花咲くや京の美人の頰かふり
一里佛二里佛花のさかり哉

花

椽の木のそれても花のつもり哉
おく蝦夷や佛法渡る花も咲く

吉野山

百尋の雨たれあひるさくら哉
みよし野や寢起も花の雲の上
みよし野に幾な櫻もなかりけり
こちとらは花か咲うか咲くまいが
花の蔭あかの他人はなかりけり
遠近の花に明るしうしろ窓
花の陰南無さん火打わすれたり
斯う活て居るも不思議そ花の陰
古垣も花の三月十日哉
人撰みしてひとりなり花の陰
花陰へ誰か隙くれし薄草履
花咲くや極にはりし火用心
花咲くや下手念佛も銭かふる
花の世や親を養ふからすとも
今のめる迄も花咲く老木哉
おとろへや花を折るにも口まける
人々や笠着て花の雲に入る
花の木に鶏寢るや淺草寺
堪忍をいたしに行や花の蔭
年寄は追從笑ひや花の蔭
花は雲人は烟となりにけり
又けふも逢そこなひぬ花の山
山の月花盜人を照し玉ふ
花の雲あれか大和の小口哉
夕暮や鳥捕る鳥か花に來る
花の世に西の望みはなかりけり
花の木を持て生れた果報哉
客の沓かくるゝほとの花も哉
花の世や出家侍諸商人
小むしろや花草臥のとたく寢
提灯は花の雲間へ入にけり
髪髭も白い仲間や花の蔭
うつるとも櫻の風そ花の陰

草庵に來てはくつろく花見哉

さく花をあてに持出す佛哉

花咲くや目につかはれて大和遠

ちる花や月入方か往生寺

花咲くや日傘の蔭の野酒盛

花ちるや末代無智の凡夫衆

念佛踊

花さくや三味線にのる御念佛

若い衆に先越されしよ花の蔭

先ぐりに花咲く山や一日つゝ

遠山の花に明るし東窓

隅田堤

くつろいて花も咲くかよ御成過き

四時大黒春櫻を折る圖

頭巾にも志賀のむかしを花の雲

草の戸や花に荒れ行古疊

花疊浮世の外のかはらふき

指月上人位階に昇りしを祝して

いたれりや佛の方から花友

題青樓

宵〱や花にこゝろの廿山

はつ花に女鐘つく御寺哉

鎮花祭

尻餅も休らひ花よやすらひよ

十人の目利はつれて花の雨

散る花は鬼の目にさへなみた哉

加病得齋

花を折る拍子にとれししやくり哉

三月十七日保科詣

花ちるやとある木蔭も小開帳

苅萱堂

花の世は地藏ぼさつも親子哉

大和めぐりする人に旅の寡言といふをきつけて

かならすよ跡見よそはか花の雲

新吉原

行燈てはやしたてるや花の雲

大津繪鬼の酒のみ三味ひく圖に

あたら身を佛になすな花に酒

淺草の寺院を過る

打水や花を異向の朝神樂

今の世や猫も杓子も花見笠

おの〱と花見被成し梢哉

有やうは我は花より團子哉

苦の娑婆や花かひらけは開くとて

穀つふし花の蔭にて暮しけり

赤い花ぅぅつ〱と今頃は

上野

喧嘩買花蹴散して通りけり

咲く花に匹へさせるの御免哉

老ぬれば櫻も寒いばかり哉

山さくら皮をはがれて咲にけり

櫻木や同じ盛りも御膝元

一日は人とめのあるさくら哉

大汗に拭ひ込まるゝさくら哉

三尺に足らぬも花のさくら哉

人聲にほつとしたやら夕櫻

茶屋むらの一夜にわきし櫻哉

米搗も唄をば止めよ櫻ちる

夕さくら家ある人はとく歸る

櫻へと見えてぢん〱端折哉

安元の頃のさくらか夕鐘

氣に入た櫻の蔭もなかりけり

つか〱とちり耻かゝぬ櫻哉

ひと足もふませぬ山の櫻哉

吹けはとぶ住居も春はさくら哉

壹本は櫻持ちけり娑婆の役

鳥の巣に造りこまれし櫻哉

高藏寺

このやうね末世をさくらたらけ哉

たゞたのめ櫻ほた〳〵あの通り
からかさにべたりと付し櫻哉

花頂山

ちる事のさたしおかれし櫻哉
見かぎりし古鄕の山のさくら哉
山さくらさのふ散りけり江戸の客
君が代の大飯くふてさくら哉
櫻花見るも義理なり京住居
神風や魔處もやはらく山櫻
睽國の麥も見えけり山さくら
櫻〳〵とうたはれし老木哉
下々に生れて夜もさくら哉
天からても降たやうなる櫻哉
ひと夜さに櫻はさゝらほさち哉
袖たけのはつ花さくら咲にけり
小趁や餞と胡蝶と散さくら
中々に持たぬがましよ散る櫻
翌日〳〵とまたるゝ巾がさくら哉

鮫汁やさくらかもとのあけごゝろ
にくいほど櫻咲たる小家哉

豫州道後十六日櫻

又たくひ世は梅ざかり此櫻

吉原

目の毒とまたしらねこそ櫻花
死下手を又も見られんさくら花
山櫻咲くや附たり佛の事
死下手のこの身にかゝる櫻哉
慾垢のぼんのくぼへもさくら哉
慾面へ浴せかけたるさくら哉
石佛風よけにしてさくら哉
鬼の住む沙汰もなくなる櫻哉
霙餞にあをりおさるゝ櫻哉
善の綱惡のさくらの咲にけり
夜ざくらや美人天から下るとも
江戸櫻花も餞だけ光るなり

新吉原

うへ櫻花も苦界はのがれさる
こちとらも目の正月ぞさくら花
開帳の目當に立しさくら哉
天邪鬼（あまのじやく）が踏れながらも櫻哉
吹けばとぶ家も櫻のさかり哉

淺草奥山豆藏

餞がふれと拜む拳へ櫻哉

後醍醐帝御廟前

どれ〳〵か御目にとまりし櫻かよ

室にて

さくら花晋子か落書まがひなし

御所にて

棒突が腮でをしへる櫻哉

北國へ旅立せんとて

櫻咲く世を踏切て小管笠

鞦韆戯

ふらこゝや櫻の花を持ながら

櫻草といふ題をとりて

櫻草 我國は草も櫻を咲にけり

上野の花いまだなるに

出直して來んも旅なり山櫻

椿 鎌倉や昔どなたの千代椿
後架神の白玉椿咲にけり
片浦の波より椿咲にけり

躑躅 百兩の石につり合ふつゝじ哉

東御門跡稀の下向にて

木芽 木々も芽をひらくやみたの本願寺
二番芽も淋しからざる茶の木哉
山里は猫も木の芽もほけ出ぬ

柳 ちりこむや柳が絮もねまる程
犬の子のふまひて眠る柳哉
けろりくはんとしてからすと柳哉
野は柳に頭巾やよけん笠よけん
旅めくや柳の陰の小菱餅
青柳に十づゝ十の穴一に
そよ〳〵と江戸氣に染ぬ柳哉

皮剝が腰かけ柳青みけり
通りぬけせよと垣から柳哉
門柳天窓てわけて這入けり
柳からもゝんくはあゝと出る子哉
人聲にもまれて青む柳かな
乞食の佛壇見ゆる柳哉
野雪隠のうしろをかこふ柳哉
我門はしたれ嫌ひの柳哉
一吹にほんの柳となりにけり
青柳に金平娘立にけり
たつた今つつさしたれと柳哉
江戸も江戸江戸眞中の柳哉
馬の子か柳くゝりをしたりけり
何島の跡そ柳の爪はちき
油火に宵雨かゝる柳哉
青柳の先見ゆるそよ隅田川
青柳とたしかに見ゆる夜頃哉
看板の團子淋しき柳かな

京島原
入口のあいそになひく柳哉

善光寺の堂前
灰猫のやうな柳も御花哉
螢とふ夕をあてのさし柳
山鴉おれかさし木を笑ふらん

桃
若桃の花のほちや／＼咲にけり
不相應の娘持けり桃の花
桃咲くや犬にまたかる惡太郎
半蔀におつかふさるや桃の花
椽の白つく桃の日暮哉

接穂
石上に蠟燭たてゝ接穂哉
歯も持たぬ口に啣へて接穂哉
夜に入れ姿直したくなる接穂哉
たのみなきおれかさしても接木哉
餅腹をこなしおてらの接穂哉
三と世見す接穂は花になりにけり

若草
石壘つき目／＼や草青む

若草や北野參りの子供講
かくれ家や草は日に／＼若くなる
門先や猫の寢るほと草青む
門の草はへはしめからうとまるゝ
芽出しから人さす草はなかりけり
一はなに惡まれ草の青むなり
二葉から水むけ草は紛れぬぞ

蕗薹
草の戸の春は來にけり蕗の薹

菫
今少したしなくもかなすみれ草

道灌塚
凡に三百年のすみれかな

菜の花
菜の花の横に寢て咲く庵哉
なむあみたおれかほまちの菜か咲た
大菜小菜喰ふそはから花咲きぬ
菜の花や霞の裾に少しつゝ
針ほとの菜の花咲きぬやれさきぬ
菜の花に四ッの鳴る迄朝茶哉
かるた程門の菜の花咲にけり
菜の花のとつはつれなりふしの山
からし菜のこゝろしつかに咲にけり
梨棚や小菜も目出たく花の咲く

山吹
山吹や蝶むく人にたをさるゝ
山吹や草にかくれて又そよく

根岸にて
山吹をさし出しさうな垣根哉
川は又山吹さきぬよしの山

藤花
東岸寺藤勸進
藤棚やうしろ明りの夕の花
夕暮に待入いくら藤の花
揚て持てそれ引するな藤の花
春の日の入ところなり藤の花

千貫戸樋にて
高戸樋や雫して行藤の花

蕨
片陰に棒のやうなるわらび哉
鶯をまねくやうなるわらび哉

田打
門の田もうつそいさ／＼厂遊べ

姨捨の雲かきわけて田打哉
からさきや田も打あけて夜の雨
ふた渡し越て田を打つひとり哉
二代目に田とはなれとも澤邊哉
雁とも〱もつと遊へや打門田

和歌の浦

畑打

はた打や田鶴啼渡る邊りまて
捧きれてつゝいて置くや庵の畑
艸草の咲て畑に打たれけり
はた打や兒か逍歩行つゝし原
はた打や通してくれる寺參り

苗代

苗代に雨を見て居る戸口哉
苗代のむら直りけり夜の雨
苗代や松も加へて夜の雨
苗代は庵のかさりに青みけり
松苗や果はいつくの餅の臼

河中島懐古

麥畑やきつゝはつゝの跡はまあ

人間

さく花の中にうごめく衆生哉

餓鬼

花ちるや飲たき水を遠霞

畜生

ちる花に佛とも法とも知らぬ哉

地獄

夕月や鍋の中にて啼田にし
世の中は地獄の上の花見哉

修羅

穴一のあなかしましや花の陰
聲々に花の木陰のはくち哉
鷄に修羅もやさせて遊ひけり

天上

かすむ日やさそ天人の御退屈

三人上戸笑

とゝ喰ふた花と指さす佛哉

泣

呑々太郎泣ならやらん梅の花

怒

鶯か來てもはら立つ上戸哉

團十郎

咲たりな江戸生ぬきの梅の花

芥子之助

錢ふれと拜む手元へ櫻哉

濱藻

乙鳥よ紅粉か足らすは梅の花

八巣にて題火坊

觀音の雨か間にあふ梅の花

夏の部

更衣

親といふ字を拜むらん衣更へ
壯過の出來心なり更衣
下谷一番の顔して衣更へ
蒲公英も天窓そりつゝ衣更へ
更衣世にはあきたと云なから
更衣松風聞に出たりけり
おもしろき夜はむかしなり更衣
其門に天窓用心ころもかへ
年とへは片手出す子や更衣
衣かへよしなき蚤をたゝくなり
上見なといふ人か先ころも更へ
人らしく更も更たり苔ころも
杉てふく小便桶や更衣
けふの日や替てもやはり苔衣
小短き旅して見はや更衣
衣かへて坐つて見てもひとり哉
杉の香に鶯きえぬ衣かへ
若衆は浴衣そいさや更衣

袷

ふたらくや赤い袷の小順禮
春日野や鹿にうたはるゝ袷哉
飴ン棒横に喰へてはつ袷
行く先にさもなき人の袷哉
朝湯から直に着ならふ袷哉

よき袷はしか前とは見ゆるなり

小兒

はつ袷袖口見せに裏家迄

文虎か妻身まかりけるに

織かけの縞目にかゝるはつ袷

死しなの縞目やいかに薄袷

大山詣

四五間の木太刀をかつく袷哉

長きにも巻れぬ人や古袷

常體の笠は似合はぬ袷哉

金太郎か膝ふしきりの袷哉

小兒の行末を祝して

頼母しやてんつるてんのはつ袷

古着を買ふて

どこの誰か死からならんはつ袷

鶯に聲かけらるゝ袷かな

南無阿彌陀どてらの綿に隙やるぞ

綿抜

立なから綿ふみぬいて出たりけり

青簾

あなかちに青くなくとも簾かな

町下り誰かこゝろも青すだれ

むら雨のかゝれとてしも青簾

青すたれさしたる人も居さりけり

さら／＼ときのふは青き簾哉

かくれ家や死なは簾の青いうち

灌佛

水ざふり佛なりやこそ天窓から

灌佛や蝶も摑ん御そぶり

佛生會

永き日を乾く間もなし誕生佛

花御堂

二三文錢もけしきや花御堂

雀子もおなしく浴る甘茶哉

鶯のほゝと覗くや花御堂

灌佛

けさ程や子供かしても花御堂

菖蒲

湯上りの尻へぺつたり菖蒲哉

遠懐

あやめゝせ武門かやうに靜なり

飾兜

旅せよと親はかさちし太刀兜

幟

洛陽の入口らしきのほり哉

うら店や青葉壹鉢紙のほり

穢多町に見おとされたる幟哉

朝雨のめてたくかゝる幟哉

一際に田も引立ちぬ初幟

乞食町とは見えざりし幟哉

三尺に足らぬ幟の御客哉

江戸住や二階窓からはつ幟

とつときに金太郎するや幟客

小幟の愛嬌に咲くつゝし哉

染幟横から見ても都哉

我門を山へ出て見る幟哉

山風はがつくり落や門のほり

小幟のこつそり葬るゝ座敷哉

藪村はこゝにと立る幟哉

粽

御袋か手本に投る粽哉

笹粽手本通りに出來ぬなり

かさ／＼と粽をかちる美人哉

粽とく二階も見ゆる隅田川

淺茅生に又戰くなり粽殻

わたくしか引結んでも粽哉

折釘にかけた處か粽哉

虎が雨

まことなき里はふらぬか虎か雨

我庵は虎の泪もぬれにけり

年寄の袖としらてや虎か雨

虎か雨よしなき我もぬれにけり

女郎花つんと立たりとらか雨

水無月

戶口から青水無月の月夜哉

夜は尙青水無月の流れ哉

六月

六月にろくな雨なく仕廻けり

六月や月夜見かけて煤はらひ

短夜

みしか夜に竹の風くせ直りけり

みしか夜や赤い花咲く藍の先

短夜に木錢かはりのねふり哉

露散て急に短くなる夜哉

みしか夜をよろこふ年となりにけり

涼

涼しさは黒節丈の小川かな
涼しさや藍よりも濃き門の空
涼しさに一番木戸を通りけり
涼しさにふら〳〵地獄巡り哉
涼しさや里生ぬきの夫婦松
涼しさや夜水のかゝる井戸の音
涼しさの下駄いたゝくやすいかん寺

本願寺

涼しさや彌陀成佛のこのかたは
火宅ても持ては涼しき寢起哉
人の香の更けて涼しや都鳥
涼風のふく木へしはる我子哉
涼風やちから一はいきり〳〵す
涼風も隣の竹のあまりかな
草雫今こしらへし涼風そ
古垣も夜は涼風の出處かな

新家賀

涼しさや糊のかはかぬ小行灯

暑

庵に入る

大の字にふんぞりかへる凉み哉
涼しさに妹か蚊を追ふ扨子哉
涼しさや笠を帆にして養寶舟

春甫京へ行くを送る

涼しからん這入口から加茂の水

裏長屋のつき當りに住居して

涼風のまかりくねつて來たりけり

おく信濃に浴して

下々も下々下々の下國の凉しさよ
隱れ家や夏は日に〳〵暑くなる

芝居見物

馬になる人や餘處目も暑くるし
暑き野に何やら堀む烏哉
暑き夜をとう〳〵善光寺詣哉
暑き日のめてたや臼に腰かけて
白山の雲きら〳〵と暑哉
暑いとてつらて手習し[illegible]た子哉

草葉から暑い風ふく座敷哉

江戸住居

暑き日や青草見るも錢次第
暑き日や火の見櫓の人の顏
米國の上々吉の暑哉
米直段くつと下るは暑さ哉
暑き夜や蝙蝠かける川はたに
蕗の葉にぽんと穴あく暑哉
あゝ暑し何に口あく馬鹿鳥
梨柹のむた實こほるゝ暑哉

乙松

野休のかた袖暑き木陰哉
身ひとつのひたと苦になる暑さ哉
滿月にあつさのさめぬかゝみ哉
暑き夜をはやしに行くや小鹽山

或人其職に苦しむをあはれむ

よすからは百人前の暑哉
暑き夜の資とや申す小藪哉

田中河原如意湯に[illegible]して

猶暑し今來た山を寢て見れは

田家

草の葉に願ひ通りの暑哉
門の月暑さか減れは人も減る
あら暑し〳〵と寐るを仕事哉

本堂

土用
暑き日やこゝにもころりころ〳〵寢
木末から土用に入りし月夜哉
白菊のつんと立たる土用哉
寢こゝろや臍の上なる土用雲
何日まて土用やすみそ夜の雨
この雨は天から土用見舞哉

蓼喰虫
炎天に蓼喰ふ虫のきけん哉

田植
妹か子や笠をほしさに田を植る
蕗の葉に鰯を配る田植哉
そら留守も御尤なり麥田植
馬までも田休すなり門の[illegible]

今の世や見え半分の田植唄
かくれ家の畑に植る早苗哉
信濃路の田植過けり紙𡡉
道はたや馬も喰はれぬ捨早苗
　身ひとつすこすとて女孀の哀
　れさは
おのか里仕舞ふてとこへ田植笠
たつた今旅から來しを田植馬
目出度さやとさり〳〵と捨早苗
明神のからすも祝へ田植飯
信濃路や上の上ても田植哉
　住よし
唐人も見よや田植の笛太鼓
　金比羅堂にて題を探る
田植うたいかな恨みも晴れぬべし
　粒々皆辛苦
もたいなや晝寢して聞く田植唄
　姥捨山

早乙女
植のこせせめては月の田
早乙めが尻につかへる筑波哉
早乙めや箸にからまる草の花

蚊屋釣草
野にふさは蚊屋つり草も頼むべし

蚊屋
翌日も〳〵同し夕邊やひとり蚊屋
　江戸屋敷
馬までも萌黄の蚊屋に寐たりけり
新らしき蚊屋に寢る也江戸の馬
風吹くや穴だらけても我蚊帳
蚊屋つりて喰ひに出る也夕茶漬
裏住やそりの合たる一人蚊屋
小にくしや蚊屋の内なる小杯
田の人よ御免候へ晝の蚊屋
けふも暮れ〳〵けりひとり[illegible]
今見れはつきたらけ也おれか蚊屋
蚊屋釣て夕買物に出たりけり

紙帳
ひとり寢の大平樂の紙帳哉
　六月十五日扇波死去

一ッ蚊屋の月も名殘や十五日
はしめから釣はなしたる紙帳哉
塵の身と共にふは〳〵紙帳哉
京人はあかりさしらし紙の蚊屋
留守中も釣はなしなる紙帳哉
ころり寐や紙帳の窓の三日の月

蚊遣火
蚊火濟んてむら雨濟てふしの山
餅音の西に東にかやりかな
ふしおろし又ふけ〳〵と蚊遣哉
木一本ありての蚊やり〳〵哉
蚊いふしも持て引越す木蔭哉
蚊いふしもなくさみになるひとり哉
茶咄しのあいそに一寸蚊遣哉
藪並に生て居るなり細蚊遣
風下の関に月さす蚊遣哉

蚊
蚊のゆふへ坊主にされし一木哉
長生の蠅よ蚤蚊よ貧乏むら
蚊もいまた大あはれなり江戸の隅

帷子
帷子にいよ〳〵四角な爺哉
京の夜や白い帷子白い笠
かたひらや我世となつて二十年
帷子や節木のやうな大をとこ
糊こはき帷子なからひる寐哉
青空のやうな帷子着たりけり
おもしろう汗の染たる浴衣かな

薄羽織
夕かけや片側町の薄羽織

冷汁
冷汁の筵引する木蔭かな
冷汁や庭の松かけさくら蔭
冷汁やさつと折こむ竃り
河縁の冷汁すきて月夜哉
冷汁や木の下又は石のうへ

鮓
鮓うりのいそかぬ聲の暮凉し
鮓になる間間と配るまくら哉
中々に精進鮓のかるみかな
はつたいにあれむせ玉ふ使僧哉

一夜酒
甘露ふる世もそつちのけ一夜酒

神代にもあらし一夜にこんな酒
神風の吹くや一夜に酒となる

心太

杉桶や有明月と心太
旅人や山に腰かけて心太
心太すゝきと共に戰くそよ
あさら江や小魚と遊ふ心太
心太から流れけり吉野川
逢坂や牛の上からところてん

團扇

江戸の水呑とて左り團扇哉
大猫のどさりと寐たる團扇哉
まゝつ子か一ッ團扇の修覆哉
膝抱て團扇握つてねふりけり
春の子か盧生もときの團扇哉
老の部そいつしか後へさすうちは
喰す貧にとて左り團扇哉
臼引の臼と寐まりて團扇哉
澁うちは娑婆に退屈めされしな
給うちはをしはくしやにする童哉
仰向に寐て靑丹よし奈良うちは
團扇張て先たよりする葎哉
うちは張て先戰かする葎哉

老人

我手には同し團扇も重き哉

業平も死前ちかし澁團扇

孝

母親を寐てもあふくや大うちは
うつくしき團扇持けり未亡人
澁うちはさてもつれなき命哉

扇

乙松やことし祭の赤あふき
松かけや扇て招く千兩雨
小座頭の天窓にかふるあふき哉
靑柳に任せて出たるあふき哉
手にとれば步行たくなる扇哉
大寺や扇てしけれ小僧の名
御祭や[illegible]か子實のあかあふき
花つむや扇をちよいとぼんのくほ

西山やあふき落しに行く月夜
まてしばし扇なかすそ都鳥
鼻先に智惠ふらさけて扇哉
老けりな扇つかひも小せはしき
寂の急に見えけり赤あふき
瓢から餠か出るとてあふき哉
太郎冠者まかひに通るあふき哉
草花か咲き候とあふき哉
もろふよりはやく失ふあふき哉
膝におくばかりも凉し白扇
夕間暮腮につゝはる扇哉
松に腰かけて土民もあふき哉
あさかけに關も越たる扇哉
白扇風の音さへあたらしき
海の月扇かふつて寐たりけり
西行の眞似してかさす扇哉
扇から日は暮初める木蔭哉
あふきまて雨吹かける木蔭哉

日傘

母親にさしかけさせし日傘哉
あんよ〳〵〳〵や母を日傘もち
夜は天とひとつ色なり日傘
水呑をまつ〳〵はさむ日傘哉
木母寺か見ゆる〳〵と日傘哉
老僧や草をむしるも日傘もち
山おろし泊瀨の木の間を日傘
靑山を初めて見たる日傘哉

兩國

巾着の殼か流るゝ夕凉み

納涼

四條河原にて

凉風に月をも添へて二文哉
凉しさにかたしけなさの夜露哉
凉しさや雨を横きる稻光り
凉しさや沈香も焚かす屁もひらす
鷺に水を浴せて夕凉み
凉風も一升入のふくへ哉
島原へゆかぬふりして夕すゞみ

夜に入れは下水の上にすゝみ哉
麻迴す池小さゝよ涼しさよ
涼しさや土橋の上のたはこ盆
烟草の火手に打ぬいて夕涼み
なくさみに鍔口ならすすゝみ哉
まゝつ子や涼み仕事に蕎たゝく
この月に涼み人のない夜也けり
水に溫泉にとの流れても夕涼み
いざ往なん江戸は涼みもむつかしき
長の日を涼んてくらす浮巣哉
門涼み夜は煠くさくなかりけり
門涼み人の朝顔咲にけり
寐ぼけ來か二番涼みや門の月
一尺の瀧も音して夕涼み
大涼み無疵な夜もなかりけり
愛々とめん鷄呼ふや夕涼み
こしらへた露も涼しや門の月
涼しさに大福帳をまくら哉

妻なしか草花咲きぬ夕涼み
ひと吹の風も身になる我家哉
義理のある親子むつまし夕涼み
嗜すれは鴫の立ちけり夕すゝみ
門の夜や涼しい空も今少し
藪村の貧乏なれて夕涼み
今に入草葉の陰の夕すゝみ
行灯を持つてかたつく涼み哉
さすとても都の蚊なり夕涼み
有明に涼み直すやおのか家
夜涼みの約束ありし門の月
罪あらし座頭の涼み耳なくは
身の上の鐘ともしらて夕涼み
一尺の竹に毎晩すゝみかな
穴はたに片足下けて夕すゝみ
行過て茨の中よ夕すゝみ
夜涼みや大僧正のおとけ口
近よれは祟る榎そ夕涼み

故ありてさはらぬ木也夕涼み
親母や涼みかてらの針仕事
木一本畑壹枚夕涼み
涼しさやこゝ極樂淨土の道入口
行月や花の都もひと涼み
涼風の出口もいくつ松柏
馬は鈴虫はたおる夕すゝみ
有明や二番尿から門涼み
芭蕉楳の臑をかぢつて夕涼み
棧をしらすに來たり涼しさに

正見寺正人迁化ありしに

涼風もはりあひなきや軒の松

兩國橋上

下見ても法圖かないそ涼み船

兩國橋下

はゝ親ははるかの艖にゆふ涼み

將門舊跡

朝涼や瘞のおつる山の松

死跡の松をも植て夕すゝみ
松苗ややかて他人の夕涼み

越後新潟にて

下駄からり〳〵渠奴等の夕涼

江戸住居

青草も錢たけ戰く門涼み

俳諧宗雲水に送る

鬼茨もそひて見よ〳〵一涼み
おれか田を誰やらそしる夕涼み
麻植て直な人待つ夕すゝみ

銚子にて

朝涼や汁の實を釣る脊戸の海

伏見舟

二人前涼んて下る夜舟哉
夜々や同し面ても門すゝみ

耕さすして喰ひ織らすしてきる證たらく今迄罸のあたらさるもふしきなり

○

寢て涼む月や未來がおそろしい
「花の蔭寐まし未來がおそろしき」ともあり

本堂

涼しさに釋迦同體のあぐら哉
線香てたはこふき〳〵すゝみ哉

きのふは鮮魚に宴してけふは
松字佛

夜涼かわらひ納めてありしよな

人形町

人形に茶をはこはせて門涼み
錢なしは青草も見す門涼み
こゝ〳〵と妻ゞ鷄よふや門涼み

日々十里

草臥や涼しい木蔭見て通る

鵜匠

手まくらや親子三人鵜の稼き
つく〳〵と鵜ににらまるゝ鵜匠哉
ひあき鵜は又もからみて浮みけり
わや〳〵と土産をねたる鵜の子哉
はなれ鵜か子の泣舟に戻りけり
はなれ鵜の綱のありともしらさるや
松風に今始めたる鵜舟哉
鵜の眞似は鵜より上手の子供哉
夜に入れは只下るさへ鵜舟哉
にきはしう鐘の鳴り込む鵜舟哉
鵜の觜へ先へいれたる鮎哉
鵜の觜はもれても同し鵜川哉
鵜遣ひや見よ〳〵芥子はあの通り
妻に竿指せて或夜鵜飼舟
手馴鵜の塚に埋める髭哉
淋しさを鵜に言ひ付て放す也
鵜も親子鵜飼も親[illegible]
見る人に夜露のかゝる鵜舟[illegible]
叱られて又這入る鵜のいちらしや
夢の世を鵜に語りつゝ〳〵
子持鵜か大聲あけて戻りけり

露の世や露の小脇に鵜飼村
下闇の外の闇なり鵜飼村
人の子や鵜を遊ばする草の花

夏座敷

田の人の見るも耻かし夏座敷
旅瘦をめてたかるなり夏座敷
松かけや寢蓙ひとつに夏座敷
よい猫か爪かくすなり夏座敷
殘物のとそ酒もりやなつ座敷

無限慾有限命

この風に不足いふなり夏座敷

祇園會

鉾

鉾の見群集に醉もせさりけり
月鉾にもつと登へよ朝烟

筑摩鍋

今一度淡々も冠らは筑摩鍋
月さすや洗ひぬいたる井戸の底

打水

打水や提燈しらむ朝參
木に打てば竹には足らぬ古井哉
打水や道つくばいし天窓まで

川狩

川かりや地藏の膝の小脇さし
川狩のうしろ明りやむら木立
むら雨の北と東に夜川哉
こゝろあてに柳の下を夜川哉

夏籠

夏籠と人には見せて朝寐坊

夏書

菊畑の木札もちよいと夏書哉
朝貌にはげまされたる夏書哉
あさら井の今めかぬ也夏花摘

晝寐

今迄は罰もあたらずひる寐蚊屋
親方に見ぬふりされし晝寐哉
山水に米を搗せて晝寐かな
人を見て又々無理に晝寐哉
算盤に肱をもたせて晝寐かな
蓮の葉に片足のせてひるね哉
田のくろや菰一枚のひるね哉
一枝の榎かざしてひるねかな
笠を着た形でころりと晝寐哉
山の木の枝おし曲げて晝寐哉

今までは罰もあたらぬ晝寐哉
田の人をこゝろておがむ晝寐哉

御祓
蛸どのゝ還出たまふ御祓かな
萩もはやいろなる浪や夕はらひ
ちとの間名所なりけり夕祓
鳥とも〳〵御祓にあへり角田川
水さく〳〵雨拵へて御祓かな
廝の薬に借錢書て流しけり
昔からこんな風かよ夕はらひ

形代
形代をとく吹きかへす萩すゝき

茅の輪
母の分もひとつ潜る茅の輪哉

汗
汗くさき兜にかゝる月夜かな
青き海見えて汗入る木陰かな
汗の玉草葉におかばどのくらひ
御馬の汗さまさせる木陰哉

夏痩
我庵の草も夏痩したりけり

五月雨
湯の濃も同じ音なり五月雨
一日にはやふりつのる皐月雨
夕立のそれから直に五月雨
五月雨の竹にはさまる住所哉
草の葉や馬鹿丁寧の五月雨
ざぶ〳〵と馬鹿念入て五月雨
さみだれや二階住居の草の花
一冊はみな草花ぞさ月雨
正直に入梅雷のひとつ哉

しなのゝ國に歸らんとして板橋といふ處にかゝる

五月雨や胸につかへる秩父山
かい回り柱によるやさ月雨
さみだれも中休みかよ今日は
十軒はみなはしかなり五月雨
さみだれも仕舞のちらり〳〵哉
五月雨や借傘五千五百ばん
ぼつ〳〵と二階仕事や五月雨
蓑蟲の運の強さよさ月雨
家ひとつ蔦となりけりさ月雨

針の穴二人て直すさ月雨
五月雨や穴のあく程見るはしら
のつきつてさみだるゝ也二番原

入梅
入梅晴や二階ならんてすゝ拂
入梅晴の引殘しけり竹生島

妙義

さみだれや夜もかくれぬ山の穴

夏の雨
からさきや晝も一しほ夏の雨

夕立
今ふるは木曾夕立か淺間山
迹からも又ござるぞよ小夕立
夕立や十づゝ十の實なし花
寐並んで遠夕立の評議かな
今の間にふた夕立やあちら村
夕立やはせをかぶせる戸なし窓
夕立の取[illegible]したる小村かな
夕立や樹下石上の小役人
兎角してはした夕立許りなり
夕立にひる寐の尻をうたれけり
夕立を天王様が御好けな
夕立や灯のうつくして藪の家
夕立や乞食どのゝ庭の松
夕立やばらりと酒の肴ほど
小莚やはした夕立これも又
夕立のはじまる海のはづれ哉
夕立や嚙み付やうな鬼瓦
夕立やすこしたゆみて草の露
夕立のとつてかへすやひゑき村
向ふから分かれて來るや小夕立
夕立に鶺鴒松竹のそぶりかな
竹原や餘處の夕立に風さわぐ
夕立の天窓にさわるすゝき哉
夕立の裏を見せたる峠かな
夕立やけろりと立し女郎花
夕立や兩國橋の夜のてい
三粒てもそりや夕立といふ夜哉
言譯に一ト夕立の通りけり

見るうちにふた夕立や向ふ村
門畑やあつらい通り小夕立

雲の峰

相應の山作りけり根なし雲
湖水から出現したり雲の峰
先操におつ崩しけり雲の峰
雲の峰の下から出たる小舟哉
まつりせよ小雲か山をこしらへる
風あるをもつて尊し雲の峰
川縁ははや月夜なり雲の峰
蟻の道雲の峰よりつゞきけん
雲の峰草にかくれて仕舞けり
投出した足の先なり雲の峰
むさし野や蚤の行衛も雲の峰
雲の峰外山は雨に黒みける
雲の峰いさゝか松か退くか
田の人の日よけになるや雲の峯
あの中に鬼や籠らん雲の峯
しはらくは枕の上や雲の峯
早稻の香や夜さりも見ゆる雲の峯
五月富士田植の笠の休む時

夏の月

夏の月と申も一夜二夜かな
痩松も奢りかましや夏の月
わつけし子の洗濯や夏の月
さむしろや茶釜の中の夏の月
さむしろや尻を枕に夏の月
打水にやとり玉ふそ夏の月
なり年の隣の梨やなつの月
なくさみに腹を打なり夏の月
夏の月中洲ありしもこの頃や
佐保姫の御子も出給ひ夏の月
戸口から難波潟なりなつの月
夏の月二階住居は二階にて
乞食せは都の外そ夏の月

夏山

夏山やひとりきけんの女郎花
夏山やひと足つゝに海見ゆる
たま〳〵に晴るれは閑よ夏の山

暮ぬ間に飯を濟して夏の山
夏山の霽きつたる月夜かな
夏山や何處を目當に呼子鳥

夏夜

夏の夜や二軒して見る草の花
　篶の東張庵に入る
夏の夜や枕にしたる筑波山

青田

露の世にさつさと青む田面哉
我こゝろ露かと走る青田哉
起〳〵に慾目引はる青田哉
　野の宮に隠れたる歸芝法師を
　訪ふ
柴門や青田の風にやしなはれ
そん所そこゝと青田のひえき哉
稽古笛田はこと〳〵く青みけり
夕風や病氣もなく田の青む
青い田の露を肴や一人酒
寢ならひておのか青田をそしる也
箸持つてじつと見て居る青田哉

清水

清水見てから大門の長さ哉
淺茅生や清水の月の座敷まて
此入りは西行庵か苔清水
この奥はどなたの庵そ苔清水
笹つとふ音はかりても清水哉
南無大悲大悲〳〵の清水かな
常留守の門にどんどゝ清水哉
くわら〳〵と穢多の家尻の清水哉
山里は清水て廻す水車
蓬原の清水に立し鳥居哉
人の世の錢にされけり苔清水
山里は馬にかけるも清水哉
夜に入れは精出して涌く清水哉
苔清水さあ鳩も來よ雀來よ
鶯も鳴さむらひぬ山清水
山清水人の往來に濁りけり
山番の爺か祈りし清水哉
わる赤い花かこて〳〵苔清水

・我か庵や左は清水右は月

小金原

母馬か番して飲ます清水哉

戸隠山

居風呂へ流し込たる清水哉
手のひらの虱とならふ氷哉

鹿の子

鹿の子の人に擂たる芝生哉
追へは追う鹿の子の兄よ弟よ

南部

鹿の子やきやつと言ふから人擂る
鹿の親笹吹風に戻りけり
膝の上に上りさうなる鹿の子哉
子を見せに鹿もわせるや寺の山
上人の聲を聞しる鹿の子哉
親鹿か隠れて見せる木の間哉
には鳥にまふれて育つ鹿の子哉
狩人の矢先としらぬ鹿の子哉
小男鹿よ我に得させよ跡なる子

鹿の子の跡から奈良の鳥哉
君か代の木蔭を鹿の親子哉

猫の子

道ふふりも親そつくりの子猫哉
猫の子や秤にかゝりつゝじやれる
[illegible]を猫も子故の盗哉

時鳥

卯の花も馳走に咲くかほとゝきす
これてこそお時鳥松に月
御神やどの御耳てほとゝきす
時鳥田のない國の見事なり
歩行から傘ほせは時鳥
も一聲まけろこれ〳〵時鳥
ほとゝきす啼そら持しお寺哉
子規善事も千里走るべし
時鳥常となつたる月夜哉
ほとゝきす俗な庵とさけすむな
時鳥手のとゞく程に通りけり
改めて又ふむ山やほとゝきす
この雨にのつひきならし時鳥

平忠盛これにあり

やあれまて聲か高いそ時鳥
時鳥聞ての後の外山かな
せはしなを我にうつすな郭公
時鳥はおろか卯の花さへも持ぬ也
これはさて寢耳に水の時鳥

西國順禮の時

時鳥泊り定めす須磨明石
時鳥迯る山の端追つめよ
お江戸まて只一聲か時鳥
時鳥大内山を夜迯して
異夜中におしかけ啼くや子規
時鳥花のお江戸をひと呑に
寢よ次郎ばか時鳥啼廻る
夏山や鶯雛子ほとゝきす
時鳥聞ふりするかはつかしき
石山へ雨を迯すな子規
唐崎は雨よ扨又ほとゝきす

今頃や大内山のほとゝぎす
朝々や花の卯月の郭公
かゝる時早く鳴け〳〵時鳥
折角な雨を無にすな子規
時鳥つゝしまふれの野よ山よ

老翁岩に腰かけて一軸を授る圖に

我汝に待こそ久しほとゝぎす

藤橋

這渡る橋の下よりほとゝぎす

鎗持の畫に

やるまいぞどつこいそこの時鳥

俄に聾となりぬる折から九頭龍大権現を祈りて

耳一ツ御貸給へほとゝぎす

題羽州大沼

閑古鳥

浮鳥に添て來よかし閑古鳥
閑古鳥泣坊主相違なく候

先住のつけわたりなり閑古鳥
誰々か影法師うすき閑古鳥
閑古鳥つゝしは人に喰れけり
我が前世見ても知れりや閑古鳥
櫻からも二ッ啼けり閑古鳥
切株に摺鉢きせて閑古鳥
下枝に子と口眞似や閑古鳥
桑の木は坊主にされて閑古鳥
大酒の諫言らしや閑古鳥
雛など優に見えても閑古鳥
我友に相應したる閑古鳥
前の世はおれがいとこか閑古鳥
我家に恰好鳥の啼にけり

閑窓

吉日の卯月八日も閑古鳥

越後

姉崎やしぶ／＼啼の閑古鳥

越の立山にて

俳諧の地獄はそこか閑古鳥

高野山

地獄へは斯う參れとか閑古鳥

水鷄

水鷄さへ叩かずならぬ老の家
[illegible]町の事て來ぬなり鳴水鷄
水鷄鳴く拍子に雲が急ぐぞよ
我庵を夜とおもふか啼水鷄
木母寺の鉦の眞似して啼水鷄

羽拔鳥

惡まるゝからすは羽もぬけぬ也
なか／＼に安堵顔なり羽拔鳥
ばか鳥よ羽ぬけてから何思案

行々子

雨乞か鳥鹿／＼しとや行々子
よい風を鼻にかけてや行々子
はげ天窓擢をかけろと行々子
馬の子の寐入ばななり行々子
行々子莠る牛は吼もせず
行々子一本蘆ぞてゝろせよ
十日ほど雨うけあふか行々子

今の間にひと行々子すぎにけり
へら鷺は無言の行や行々子
よしきりや一本竹のてつぺんに

蝙蝠

かはほりや仁王の腕にぶらさがる
烟りしてかはほりの世もかはりけり
かはほりやさらば汝と兩國へ
待て居る妻子もないか通し鳴
かはほりや鳥なき里の飯時分

百日他行

かはほりが中て喋くぞ米ふくべ

六月戸隠に入る梅盛也

老鶯

鶯の我世顔なり奥信濃
鶯が四月啼ても古郷哉

松魚

一切も松魚さはぎや隠者町
江戸者になりすましけり松魚賣
江戸末や一切れもらうはつ松魚
大家や犬もありつくはつ松魚
大將の前やどつさりはつ松魚
芝浦やはつ松魚から夜が明る
水道の水いろ浴しはつ松魚
我が宿のおくれ松魚も月夜哉

蟇

蟇はたりはつたりと日は暮にけり
雲を吐く口つきしたり蟇
霧に乗る目つきして居る蟇哉
蟾とのゝ妻や待らん子なくらん
罷り出たるは此藪の蟇にて候
雷て天窓なてけりひきかへる
蟇我をつく／＼ねめつける

蚊

闇の蚊のはつ出の聲を燒れけり
たのもしき夜の藪蚊ゝ初音哉
[illegible]聲に馴れてすや／＼寐る子哉
[illegible]に蚊も初聲をあけにけり
目出度さはことしの蚊にも食れけり
かあいらし蚊も初聲そ／＼
闇の蚊のふんと計りに燒れける
壁に生る一本草や蚊のこもる

宵越の豆腐明りに藪蚊哉
壹の蚊の來るや手をかへ品をかへ
蚊ひとつが一日さはくまくら哉
あはれ蚊よあはれよ錠をおろすぞよ
南無阿彌陀佛の方より鳴蚊哉
御佛にかぢり付たる鳴蚊かな
蚊の聲や行灯つゝむ飯けふり
蚊をころす紙燭にうつる白髮哉
手をすりて蚊屋の小隅を借に鳧
我か宿は口て吹ても蚊の出る
きらはれて長生したる藪蚊哉
櫻までわるく言はるゝ藪蚊哉
隙人や蚊か出た〳〵と觸歩行
雨晴や蚊屋のうちなる朝煙草
釣鐘の中からわんと出る蚊哉
蚊もいまた大あばれなり江戸の隅
ひるの蚊の隱るゝ程の藪も哉
壹の蚊のたまりこくつて後ろから

御迎の鐘を聞き〳〵燒蚊哉
蚊柱の外に能なき榎哉
蚊の聲に子のふとらさる門もなし
蚊柱の穴から見ゆる都哉
蚊ふしをはやして行くや夕烏
蚊柱のたつた儘にて出船哉
うつくしや蚊遣はつれの角田川
年寄と見るやなく蚊も耳のそは
蚊遣してみなおぢ甥の在所哉
ひるの蚊をうしろに隱す佛哉
あはれ蚊のからもとりする夜明哉
蚊かちらりほらりこれから老か世そ
夕暮や蚊か鳴出してうつくしき
蚊の出て蚊を燒く草も生にけり
蚊柱をにらみ崩すや角大師
閻の蚊の殘り〳〵て燒れけり
蚊いふしの相伴にあふ胡蝶哉
戸隱山

蚤

一ッ蚊のたまつてしくり〳〵哉
くせ物隱れて覗ふ
あはれ蚊のついと古井に忍ひけり
竹といふ里僧の久しく布川邊
をさまよふ
追はれ〳〵蚊の湧く草を寐所哉
とふな蚤それ〳〵そこは角田川
とへよ蚤同し事なら蓮の上
蚤かんで寐せて行なり猫の親
猫の蚤こすり落すや草原へ
親猫か蚤をもかんてくれにけり
蚤燒て日和うらなふ山家哉
疫病神蚤も負せて流しけり
寐莚や鼠の蚤のふり處
草の蚤はら〳〵もとる火かけ哉
木の猿や蚤を飛はせる犬の上
まゝつ子や蚤寢仕事に蚤拾ふ
蚤の跡それも若きはうつくしき

螢

風も吹き月もさしけり蚤の宿
蚤とへや野らは苅萱女郎花
蚤ともに松島見せて放ちけり
よい日づら蚤かはねるそとるそよ
歸庵
蚤とも〻まめ息才そ草の庵
はつ螢ついとそれたる手風哉
蚊いふしの草ともしらぬ螢哉
初螢都の空はきたないそ
筏士の箸にからまる螢哉
はつ螢その手はくはぬとひふりや
とぶ螢泪の露かなりつらん
[illegible]たりな門の螢にいたる迄
[illegible]よ身を賣られつゝ行く螢
人聲の方へやれ〳〵とふ螢
我か袖を親とたのむや迯螢
迯て來て溜息つくかはつ螢
片息になつて迯行く螢哉

螢籠惟光これへと召れけり

桐壺源氏三ツのとし我も三ツ
のとし母に棄られたれと

孤の我は光らぬほたるかな

はつ螢なせ引返すおれたぞよ

鍋尻にちらり〳〵と螢哉

煩悩の都出よ〳〵はつほたる

寝たふりをすれは天窓に螢の子

寐むしろや野原同然にとふ螢

椀籠を上手に潜むほたる哉

蕗の葉に引つゝんたる螢哉

はつ螢われを曲つて通りけり

入相の鐘につき出す螢哉

今釣た草にあれ〳〵はつ螢

呼聲のはり合にとふ螢哉

声の家や孫るさまからとふ螢

京を出てひと息つかはつ螢

兎角して螢に荒るゝ草の花

和睦せよ石山ほたる瀬田ほたる

勝螢石山さして引きにけり

螢來よ螢來よ〳〵ひとり酒

植こみにきのふのまゝの螢哉

螢壹本草も夜の露

[illegible]や螢〳〵にあらさるゝ

螢火も餘せはいやはやこれははや

大家を上手に越しほたる哉

一握り草も賣る也ほたる籠

出よ螢錠をおろすそ來よ螢

酒は酢に草は螢となりにけり

行け螢とく〳〵入の呼ふうちに

最うひとつ川を越せとや飛ふ螢

市中や大骨折てとふ螢

大螢ゆら〳〵と通りけり

わんはくや縛られなから呼ぶ螢

手枕やぼんのくぼよりとふ螢

飯櫃の螢追出す夜舟かな

かくれ家に何れの來てもよい螢

切れ草鞋螢とならは隅田川

蚊いぶしにやかて螢も行に鬼

二三遍人をきよくつて行く螢

合點して螢も寐るか夏花桶

梟や螢〳〵をよふやうに

不忍池

螢火や呼らぬ舩は膳先へ

長生の蠅よ蚤蚊よ貧乏村

草の葉や世の中よいと蠅さはく

笠の蠅もうけふからは江戸ものそ

隱れ家は蠅も小勢て暮しけり

蠅うては蝶もこそ〳〵立にけり

豐年の聲をあけけり門の蠅

から紙のもやう付けり蠅の糞

客人の畳みやけなり門の蠅

福耳に蠅か三疋とまりけり

蠅一ツ打ては南無阿彌陀佛哉

侍に蠅を追はせる御馬哉

ぬり盆にころりと蠅のすべりたり

世かよくはも一ツとまれ飯の蠅

親しらす蠅もしつかりおふさりぬ

留守の内静に遊へ縁の蠅

人一人蠅もひとつや大座敷

なくさみに蠅なと取るや庵の猫

御首に蠅か三匹とうまつた

蠅除の羽織かふつて泣く子哉

やれ打つな蠅か手をすり足をする

椽の蠅手をする處を打れけり

騒くなら外かましそよ庵の蠅

歸庵

蠅我より先へかけ入りぬ

獨樂坊を訪ふに錠のかゝりけ
れは三界無安といふことを

蠅除の草をつるして俗何處へ
こゝろに思ふことを

古郷は蠅まで人をさしにけり

蜘ノ子

蜘の子はみなちり〳〵の身すぎ哉
蜘の子の散り止りより三日の月

毛虫

それそこの蟻の地獄そ運ふ毛虫
手弱女の側へすり寄る毛虫哉
涼まんとふら〳〵下る毛虫哉
斧の刃や尺とり虫のとり戻る
我門は虫さへ白髪太夫かな

幽栖

虫にまて尺をとらるゝ柱哉

羽蟻

羽蟻出るまてにめてたき柱かな
昨日には一倍ましの羽蟻哉

蛇衣脱ぐ

しほらしや蛇[illegible]浮世を捨衣
法の山や蛇も浮世を捨衣
古婆々や肩にかけたる蛇の衣

火取虫

どれほとに面白いのか火取虫
木かくれや灯のない庵へ火取虫
庵の灯は虫さへ取り[illegible]來たりけり
消してよい時分は來る也火取虫
如此決定してや火取虫
逃された草にうち〳〵火取虫
ぶち猫に追れ序や火取虫
[illegible]咄し虫に行燈消されけり
[illegible]二度うろ〳〵下手な火取虫
此雨の晴間をまたて火取虫
火取虫咄しの腰をそられけり
入相のかね〳〵かねて火取虫

蟬

鰐口のくちの奥なり蟬の聲
松の蟬とこまて啼て晝になる
しと〳〵と夕の蟬そ哀れなる
蟬なくや我家も石になるやうに
蟬啼くやつく〳〵赤い風車
蟬啼くや袖に壹粒雨蕭て
はつ蟬のうきをみん〳〵見みん哉
桶あてるちよろ〳〵瀧や蟬の聲
蟬なくや北かけ喑き籠まくら

蟬なくや天にひつゝく筑摩川
はつかしやゆかしや蟬の捨衣
浮島やうこきなからに蟬の啼く
山人や袂の中の蟬のこゑ
願はくは念佛を啼け夏の蟬
はつ蟬といへは小便したりけり
狗のこゝへ來よとや蟬のこゑ
湖に尻を吹かせて蟬の啼く
むく犬や蟬啼く空へ口を明く
家なしも蟬の羽衣着る折りそ
山蟬や啼〳〵拔る大座敷
露の世の露に啼なり夏の蟬
山蟬の袂の下を通りけり
蟬啼くや神木の釘ぬける程
朝明や草をはなれて蟬の鳴
もろ蟬の啼こほれけり笠の上
蟬なくや山から見ゆる大座敷

蝸牛

朝やけかよろこはしいかかたつふり
この雨のふるにどつちへていろ哉
夕立や大肌ぬいてかたつふり
並んだぞ豆粒ほどのかたつふり
柴の戸や錠のかはりに蝸牛
雨一見のかたつふりにて候か
かたつふりそろ〳〵登れふしの山
蝸牛我かなす事は目に見えぬ

犬いけんして曰く

蝸牛見よ〳〵おのか影法師

孑孑

孑孑や夜は結構な堀の月
孑孑もひとり遊ひやぬり盥
孑孑よ精出してふれ翌日は盆
孑孑のつれに巡るや櫻の葉
[illegible]の天上したり三日の月

日日懈怠不惜寸陰

けふの日も棒振虫よ翌日もまた

寺の庭にて

孑孑も御法の拍子とりにけり

水馬
山水の澄むか上にも水馬

若葉
駒つなく門の榎も若葉哉
茂木の流れなからの若葉哉
若葉してまたもにくまれ榎哉
若葉して中ふらりんの縣哉
桐の木の悠々然と若葉かな
乾くまて縄はる庭や若葉吹く
古垣の仕やう事なき若葉哉
竹の葉につれて稀も若葉哉
のり掛のひよこり出たる若葉哉
釣瓶竿きよんとしてなる若葉哉

宇津の山
十團子の若葉につゝむへし

茂
雨灰汁に月のちら〳〵茂り哉
一本は晝寢のたしの茂り哉
茂り葉や庇の上の湯治道

我孫子より北へ入野田を過て
流山に入る道にて壹丈斗りな
る蛇わたかまる
大蛇の二日目につく茂り哉
住の江の隅の餅屋の茂り哉

夏木立
ふりかけていく日の雲や夏木立
[illegible]見やことしさしても夏木立
大寺は留守のやうなり夏木立
利根川は寢ても見ゆるそ夏木立
村中やちさいおのれか夏木立
二番火の酒のさはきや夏木立
芝てした休み處や夏木立
夜駄賃の越後肴や夏木立
家ありて又家ありて夏木立
一昨日の雨のおちけり夏木立
堂守か茶菓子賣るなり夏木立
赤い葉の桑畑に散るや夏木立
涼しさは直に神代の木立哉

木下闇
門脇や菓つく程の木下闇
界隈のなまけところや木下闇
隅々も掃除とゞくや木下闇
白笠をすこしさますや木下闇
夜駄賃の越後肴や木下闇

卯の花
卯の花や神と乞食の中に咲く
うの花や臼の目切と鶯と
卯の花の吉日持し後架哉
うの花の垣に名代の草鞋哉
卯の花に一人きりの社哉
道よけて人を待なり花卯の木
卯の花の宿や鬼王新左衛門
卯の花に一人きりの鳥居哉
樒ありひめ糊もあり花卯の木
卯の花も佛の八日つとめけり
卯の花に爐上の泥も盛り哉
卯の花の花のなきさへ賣られ兒

獨樂坊

合歡
寢處見るほどは卯の花明り哉
寢くらしやねふちよ佛合歡の花
合歡咲くや申刻下りの茶菓子賣

柿の花
柿の花落ちてぞ人の目に留る
澁柿のしふ〳〵花の咲にけり
役馬の立眠りする柿の花

青梅
疲梅のなり年さへもなかりけり
青梅は氣の減る斗り落るなり
餘處並に實を結んだる野梅哉
梅漬の指をつく〳〵なかめけり
疲梅も實となりやうのいさましや
青梅に蟻の思ひも通しけん
標る梅朶の蛙のおしけなり
菜かくれの赤い李に鳴く小犬

牡丹
蓮は水難のこゝろつかひとあ
れ婆
ぬく〳〵と乗ら婆牡丹のうてな哉
御牡丹や力あつかる假番屋
福の神降らせ給へ牡丹咲く
扇にて尺をとらせる牡丹哉

てもさてもても福相の牡丹哉
これほどの牡丹と仕方する子哉

花嬢佛三回忌
目さましの牡丹芍藥てありしよな

筍
竹の子や暗いところの行あたり
竹の子を見つめてこさる佛哉
竹の子や女のほしる犬のまね
君か代は山笹も子をそだてけり
娑婆の風はや竹の子の疲にけり
竹の子の千代もぼつきり折れにけり
竹の子と品よく遊へすゞめの子
竹の子に病のなきはなかりけり
竹の子も名乘か惟我獨尊と

今年竹
君か代や代やと騒くも今年竹
それてあれうすむらさきの今年竹
若竹を賴みに思ふ小家哉
雀等も何か讀むそよ今年竹
若竹やさもうれしけに嬉し氣に

若竹
若竹といはるゝ一夜二夜哉
赤注連や疱瘡神の今年竹
嬉しいか門の小竹も若盛
なよ竹や今の若さを庵の垣
邪魔にされ〳〵けり今年竹
若竹といはるゝうちもすこし哉
あつはれの大若竹そ見ぬ内に
精出して戰け若竹今の内
若竹の子さへのかれぬ憂世哉
藪竹も若いうちとて戰くなり

茨の花
茨の花こゝをまたけと咲にけり
茨垣いぬの上手にもくりけり

杜若
馬の子か口さん出すや杜若
通ひ路に梯子渡すやかきつはた
大江戸やおめすおくせす杜若
鶺鴒は神のたよりかかきつはた
今朝ほとは芥子に一本杜若

罌粟の花
兵の足の跡ありけしの花

桃苗の二葉うれしやけし畑
けし提て群集の中を通りけり
門番のほまちのけしの咲にけり
結句して松の日まけやけしの花
僧になる兒の美くしやけしの花
大原や先の小町かけしの花
陽炎のおひたゝしさよけしの花
何そいふはり合もなしけしの花
桑の木は坊主にされてけしの花

二十四年榮花只一夜夢
善つくし美をつくしてもけしの花

高清水の山中心地惡しくてやや杖を曳くに山賊につけられて
さはつた[illegible]身なからもけしの花
咲く日より雨に逢けりけしの花

百合花
山松に吹つけられし百合の花
松まては日の届きけり百合の花
我見ても久しき蜷や百合の花
いくはくの草にほこるや百合の花
長降の節のあくらん百合の花
うつとしや雨はやみても百合の花

撫子
撫子に二文の水を浴せけり
撫子や人か作れは猶ほそる
撫子やそなたは親の奢椒
俤のかはら撫子あの通り
江戸ありて花撫子も賣られけり
御地藏よ河原撫子只賴む
撫子に日の目も見せぬ小笹哉
撫子や片陰作る夕藥師
撫子や地藏菩薩のあとさきに
なてし子はなて折れたそよ〳〵
撫子のもまれて咲くや汐風に
撫子の蒔損ひも月夜哉

苔の花
世を捨てぬ家に咲く也苔の花
古郷や古い柱の苔も咲く

白眼唯看世上人
苔花や自慢をきゝに來たる花
野の苔も花咲く世話は持にけり
青苔の今一入そ花なくは
我上へ今に咲くらん苔の花
苔はあれ花の咲きげり埋れ家
庵の苔花咲くすべも知らぬなり
花さはきすともかまはぬ深山苔

葵

白髪にもかけれは戰く葵哉
祭にも逢はてつゝ立あふひ哉
明星に影立すくむあふひ哉
傘持は葵かけつゝくすね哉
脊戸先や芥にかくれて立葵
加茂川に今日は流るゝ葵哉

蓼

肴屋のうらと知れけり蓼畑
新らしい流灌頂や蓼の花
蓼の葉とにきつて行くや酒の錢
まゝな世や蓼喰ふ虫と燈とり虫

萍

萍や遊ひかてらに花か咲く
浮草やいつやとり木の薄紅葉
浮草や浮世の風のいぶなりに
うき草の花からのらんあの雲へ
浮草の鍋の中にも咲にけり
萍の花のうてなの沼太郎
萍にもやとらせ給ふ佛哉
萍の花を詠めて添乳かな
萍の株にして咲く門田哉
萍やはたか蟲か首すちに

蓮の花

直き世や小錢ほとても蓮の花
蓮の香も夕になりぬ燒茄子
せゝなけの樋の口まて蓮の花
白蓮に二筋三筋柳かな
まし〳〵と稻葉かくれの蓮哉
咲く花もこの世の花は曲りけり
蓮の葉に乘せたやうなる庵哉
鬼蓮もはら〳〵同し夕哉

曉に人氣も見えぬ蓮哉
夕月や盃おくも蓮の花
貢なき澤邊と見たり蒲蓮
花盛り蓮の虻蚊に喰れけり
したゝかにさして往にけり蓮の虻
二日ふり夜は明にけり蓮の花
蓮の花少しく回る浮世哉
讃宿そ蓮に吹かれて夕茶漬
蓮の香をうしろにしたり丘の家
門々は殘らす蓮の月夜かな
今日も〳〵茶をたをされつ蓮の花
人喰うた虻か乘るなり蓮の花
大きさよ見ても在家の蓮の花

晝顔

ひる顔やぽつぽと燃る石ころへ
豆腐屋は來る晝顔は咲にけり

夕顔

夕かほや草の上にも一ッ咲く
夕顔の花にぬれたる杓子哉
夕顔に久しふりなる月夜哉
咲は夕顔長者になれよ一ッ星
夕顔に尻を揃へて寢たりけり
夕かほや柳は月になりにけり
夕顔の花て鼻かむお婆々かな
源氏の繪に
夕顔や男結ひの垣にさく

穗麥

篠竹のひよろ〳〵暮るゝ穗麥哉
首たけの水にも戰く穗麥哉

麥秋

麥秋やほんの秋より寒い秋
里の女や麥にやつれしうしろ帶
陽炎の眞盛りなり麥の秋、
可愛想な花の咲きけり麥の秋
揚土に何を種とて麥ひと穗
麥秋にあてこともなき夜寒哉
麥秋の小隅に咲くは何の花
麥秋やうらの苫やは魚の秋
麥秋や子を負なから鰯賣
麥ぬかの流れの末の小鍋哉

隠れ家の柱て麥をうたれけり

夏草　夏草や立よる水は鐵氣水

麥刈　麥刈の不二見處の榎哉

山水の溝に餘るや田麥刈

麥の穂や秋の方は竹の出來

桑摘　細腕に桑の葉しごく雨夜哉

桑つむや負れし姉も手を出して

荵　水かけて夜にしたりけり釣荵(しのぶ)

茄子　も一日葉陰に見たき茄子哉

鉢植や見るはかりなる初茄子

苗賣の通る跡よりはつ茄子

初茄子さて大兵の使かな

我庵の巾着なすひにくゝし

柴の戸や賣たる日のはつ茄子

かくれはせにあのか畑も茄子哉

四月廿四日眞助坊往生

一二本毌みやけかよはつ茄子

瓜　御座敷や瓜をむくさへむつかしく

冷し瓜　隠れ家や瓜を冷すも鴉の海

草の戸や半月はかり冷し瓜

人來たら蛙になれと冷し瓜

三日月とひとつならふや冷し瓜

はつ瓜を引とらまへて寐たる哉

葉かくれの瓜をまくらに子猫哉

さと女笑顔して夢に見えける

まゝに

眞瓜　顏べたにあてなとしたる眞瓜哉

古きこそ庇はよけれからす瓜

六月　六月の空さへ廿九日かな

卯の花の目先に寒し朝こゝろ

秋の部

立秋　けさ秋といふ許りても老にけり

秋たつといふ許りても寒さかな

秋たつや隅の小隅の小松島

秋たつや町の中なる一里塚

寐こゝろや秋立雨の竹の「不明」

阿房草うかくゝ伸る秋が立つ

たつ秋は風のとがても無りけり

風冷りくゝからたのしまりか那

それなしにけふはなれしよ日傘

殘暑　わる赤い花に殘れる暑か那

狗子有佛生

秋來ぬと知らぬ狗か佛かな

三越路や秋たつ日よりむら時雨

秋たつやこのひと里は水清し

今朝秋　雲起る洞見つけたり今朝の秋

けさ秋や瘡の落たるやうな空

今朝の秋起して見たき草もあり

鐘撞て鐘撫て見んけさの秋

野の秋や人にとりつく草の種

六尺の顔に秋立ッあしたか那

古松や我身の秋か目に見ゆる

六月十九日より八月六日まて

てりつゝく

小山田や日われなからに秋のたつ

七夕　七夕に我峯る蚊やりか那

七夕や野らも願ひの糸すゝき

七日の夜只の星さへ見られけり

七夕や大和は男三分一

星迎　襷に笛つきさして星迎ひ

誰との〻若松樣や星迎ひ

川狩の烟りもとゝけ星今宵

七夕や流れの方を枕して

風きよく赤てうちんや星迎ひ

新潟や翌日まつそ今宵の星迎

星さまのさゝやき玉ふけしき哉

寝聳えてふんそりかへる星迎

凉しさは七夕竹の夜露か那

星に手向し衣は人に見せるみは

鳴な蟲別るゝ戀は星にさへ

御馳走に凉風ふくや星の闇

星まちや茶殻をほかす千曲川
梶の葉に借銭書て流しけり
聟星にいて披露せん稲の花
七夕の相伴に出る川邊か那
嫁星の御顔をかくす榎か那
七夕の牛にまゐらせん初尾花
養星まつ人にけられけり
もとりにはとの橋越ん星月夜
若々し星はことしもつま迎
七夕や地にもめてたき稲の花
七夕や親ありけなる人の船

梶葉
歌かくや梶のかはりに糸瓜の葉
子寳の蜒蚰のたるぞ梶の葉に
誰か願ひ星にひと葉の吹き散るは

天ノ川
冷水にすゝり込けり天の川
雲形に寢て見たりけり天の川
木曾山へ流れこみけり天の川
古郷に流れこみけり天の川

ぼんのくぼから冷しけり天の川
汁なべもながめられけり天の川
山影も歌て祭るや天の川
わが星はひとりかもねん天の川
わが星はどこて旅寢や天の川
深さうな處もありけり天の川

病中

美くしや障子の穴の天の川

魂祭

魂迎
わか佛けふはいつくの草枕

小兒新盆

赤紐の草履も見ゆる秋の暮
あの月は太郎かのたそ迎鐘
連立ておん盆〳〵や赤蜻蛉
迎火は草のはつれのはつれ哉

盆の月
蝙蝠飄ひ蚊が餅をつく盆の月
浴してわが身となりぬ盆の月
うら盆の月願ひしはむかしなり

魂祭
玉祭る夜に餘の夢はなかりけり
玉棚や上座して啼くきり〳〵す
すね茄子馬役を相つとめけり
山里やあゝのかうのと日延盆

鼠尾花
鼠尾花や水につけれは風か吹く

亡妻新盆

盆
かたみ子やはゝか來るとて手をたゝく
おれか場もとく頼むそよ佛達

聖靈
精靈にとられて仕舞寢處かな
精靈の御立を咄す河原かな
精靈の立振舞の月夜かな
さし汐や茄子の馬の流れ來る

墓參
古犬か先に立つなり墓參り
末の子や御墓參りの箒持ち
月影にうかれ序や墓參り

燈籠
なくさみの燈籠も間たく〳〵かな
片顔の雨たれ嬉し盆燈籠
なま中に消きりもせぬ燈籠哉
大日枝の燈籠かくせ跡の雲
秋風や山のはつれの燈籠より
燈籠やきのふの死けふ葬
かき立てはきもの見せる燈籠哉
引あけて見れば風吹く燈籠哉
同し年の顏の皺見る燈籠かな
草原にそよ〳〵赤ひ燈籠かな
來て見れは在家なりけり高燈籠
燈籠や親の馳走に引歩行
盆燈籠三ッ四ッ見て止にけり

生身魂
夕酒や我身をおれか生身魂
這ひ出てる主頼もし生身魂

接待
接待や自慢じやないと夕木陰
接待や評判頼む庭の松
接待や猫か受取茶釜番
おやなしかあれをとるそよ唄ふそよ
たゝくれる茶にさへ小屋の掃除哉

踊
太鼓たけすこし下卑たり盆をどり

世かよいそはした踊も月かさす
穂芒にあをり出さるゝをとり哉

佛都

御佛の留守事に大踊かな
たのもしやまた薄暑さ三日の月

うそ寒

秋寒や行く先き〳〵は人の家
うそ寒をはや合點のとん摂哉
うそ寒や蚯蚓の唄も一夜つゝ
うそ寒も誠寒そよ年よれは
うそ寒や親といふ字を知てから

朝寒

闘の灯のとれかねるなり朝寒み
朝寒や垣の茶筅の影法師

うそ寒やともあり

朝寒にとんちやくもなき稲葉哉
朝寒のうちに參るや善光寺
やゝ寒きほと猶遠し筑波山
川西の古江も見えて朝寒み
念入て竹を見る人朝寒み

夜寒

今見ても右の枕の夜寒かな
殻佛たゝいて見たる夜寒哉
燈ちら〳〵どのつら見ても夜寒哉
肌寒き國にふみこむ寒かな
見るほとの木さへ山さへ夜寒かな
借襷を又ふつて見る夜寒かな
寐恭しに丁度よいほと夜寒哉
若い衆のつき合に寐る夜寒哉
藪村に豆腐屋出來る夜寒かな
老か身は鼠もひかぬ夜寒かな
盆の灰いろは書子の夜寒かな
のらくらの遊ひ加減の夜寒哉
青空のきれい過たる夜寒かな
寝鷄や亂わすれてやゝ寒き
山鳥の尾のしだり尾の夜寒哉
寒いのはまだ夜のみぞ裏の山
庵の夜の遊びかげんの夜寒哉
窓際や蟲も夜寒の小寄合

おぢ甥の家のごち〳〵夜寒哉
木兎の株にちよんぼり夜寒哉
膝がしら木曾の夜寒に古びけり

老樂

子供等をこゝろておがむ夜寒哉

戸迷ひせし折柄に

小便所こゝと馬呼ぶ夜寒哉

茶屋の萬燈日ましに減りぬ

兩國の兩方ともに夜寒かな

若法師の扇面に

影法師に耻よ夜寒のむだ歩行

旅

一人と帳面につく夜寒かな
うつる日やあはれこの世は秋寒き

秋の夜

秋の夜の獨身長屋むつまじき

板敷山の麓に伏して

秋の夜や祖師も個様な石まくら
秋の夜や障子の穴の笛をふく

夜永

耳際に松風の吹く夜永かな
永き夜の化くらべせん老狸
庵の夜や寐餘る罪は何貫目
茶湯釜を二人し聞けば夜永哉

晝よりも夜はたれをか灯火の

咲ちる花もひとりながめてと
契沖あさりの病中此通りの淋
し
永いぞよ夜が永いぞよ南無阿彌陀
馬鹿永き夜と申たる夜永かな

小僧達綿勸進

秋日和

なぐさみのはつち〳〵や秋日和
佛さへ御留守なりけり秋日和
秋日和とも思はない凡夫かな

八朔

八さくや秤にかける粟一穂
八さくや犬の椀にも赤の飯

秋の日

秋の日に力を添ふる若葉かな

秋の空

飛鳥を越て行なり秋の雲

秋立て十日あまりや秋の空
行く秋を吹いて送るや新酒屋
秋の原しつたら何を唄ふべき

秋の暮

秋の夕何とおぼすぞ雛遊
ひとつ鵜の水見て居るや秋の暮

佐渡が島

それがしも宿なしに候秋の暮
膝抱て羅漢顔して秋の暮
中々に人と生れて秋のくれ
松の木も老の仲間や秋のくれ
我植し松も老けり秋のくれ
我松も腰がかゞみぬ秋のくれ
立な雁住めばどつこも秋の暮
あれのみが舟を出すなり秋の暮
親なしや身に添ふ願も秋のくれ
かくれ家か飲人を雇ふ秋の暮
活て又見るそよ〳〵秋の暮
くらがりにこそり立ても秋の暮
手招きは人の父なり秋の暮
蘆の穂を蟹がはさんで秋の暮
一つ啼くは親なし鳥よ秋の暮
梟の一人きげんや秋のくれ
鳥さへ親を養ふ秋のくれ
うか〳〵と人に生れて秋の暮
たのみなき大木の下や秋の暮
苦の娑婆と草さへ伏すか秋の暮
柴ちよぼ〳〵遠山作る秋の暮
宿引に寄りのけられつ秋の暮
墨染の蝶の出立や秋のくれ
秋の暮何處とまりの旅烏
錢金をしらぬ烏さへ秋のくれ
姨に似た石の寝やうや秋の暮
ひふみよと數よむ聲や秋の暮
暑いのかまたたのみなり秋の暮

連にはぐれて

一人通ると壁にかく秋の暮

はかなき子の遊び習ふに

をさな子やわらふにつけて秋の暮

大阪を出帆して

秋のそら吹かれ次第や秋の暮

病後

えいやつと活たところか秋の暮

花火

世につれて花火の玉の大きさよ
椽ばなや二文花火も夜の體

駒曳

駒曳や駒に威をかる咳はらひ

角力

角力場やけさはいつもの常念佛
角力とりや手引てくれる門の橋
へつたりと人のなる木や宮角力
わさと寝た樣と口ては角力哉
草花を腮てなふるや勝角力
宮角力木から蛙も聲上る
けふきりの入日さしけり勝角力
まけ角力あの子の親も見て居るか
板行にして賣られけり負相撲
正面は親の顔なりまけ角力
勝角力蟲の音よけて通りけり

旅の通りにふと立とまりて

見すしらす辻角力さへひゐき哉
わき向いて不二を見るなり勝角力
秋風の吹くとはしらぬ角力かな
年寄をよけて通すや角力とり
まけ仲間寄てたんきる角力哉
角力とりに手をとらせたる女哉
勝角力蟲もふますにもとりけり

案山子

笛吹てかゝしの御禮參りかな
かゝしにも後ろむかれし栖かな
姨捨はあれに候とかゝし哉
ひる顔のもやうにからむかゝし哉
照る月をかこち顔なるかゝし哉
人はいさ直なかゝしも無りけり
橋守の火を力なり山田寺
人ありと見せる草履や田番小屋

鳴子

相生の松と世をふるかゝし哉
川音や鳴子の音や明ちかき
寐はなしの足て折〱鳴子哉
鳴子なと引て寐さん窓の雨
追従に鳴子引なりものもらひ
古ひ行窓の鳴子や命綱

落し水

夕月や萩のうへ行く落し水
水落て田はこと〱く夕日哉
ほまち田の水も落して夕木魚

鰡

鰡や明るい方の落し水
鰡の聲と添けり落し水

新酒

家並とて捨配りする新酒哉
入兵衛か破顔微笑や今年酒
杉の葉を釣して見るや濁酒

砧

日中にどたりばたりときぬた哉
口と手も人並てなし小夜砧
砧打雨氣つきたる榎かな
松風も昔のさまよ小夜きぬた
更級やくらき方には小夜砧
梟か柏子とるなり小夜きぬた
唐の吉野もかくや小夜きぬた
壹中の須摩の秋なり遠砧
松竹はむかし〱のきぬた哉
雨の夜やいつ隣なる小夜きぬた
行燈を畑に置てきぬたか那
妹山やきぬたなくともなつかしき
草藪も君が代を吹く小夜きぬた
赤兀の山のひゑきや遠きぬた
行燈を松につるして小夜砧
にくき人のあうつ夜もありぬべし
ひる行し藪の邉りや遠砧

行秋

兵庫築島

行秋や入道とのゝにらみ汐
行秋を唄て送るや新酒屋
秋もはや西へ行くなり隅田川
行秋や妹か尾花のそら招き

行秋や尾花かさらは〱哉

九月盡

けふまではまめて暮たよきり〱す

秋風

秋風に歩行て逃る螢かな
蝸牛の捨家いくつ秋の風
さほてんの皺はた見れば秋の風
秋風や蓮生坊か馬の尻
ひとりつゝみな去りにけり秋の風
乳はなれの馬の顔より秋の風
夕月のけは〱しさよ秋の風
開帳のふりつぶされて秋の風
莽る哉人の顔より秋の風
わらて結ぶ髪もめてたし秋の風
秋風の吹夜〱やあばら骨
秋の風親なき我を吹そふる
秋風の吹ぬく四條通りかな
吹あらしとこか萩の間桔梗の間
秋風や壁のへマムシヨ入道
なけなしの歯をゆるがしぬ秋の風
牛の子の旅へ行なり秋の風
秋風のふくともなしやからす瓜
草の葉も人をさすなり秋の風
秋風や剃損ひじ五十髪
秋風や角力のはての道心場
秋風の吹くともしらぬ角力鳳
唐紙の引手のあなを秋の風
秋風の吹けとは植ぬ小松か那
墨染の蝶かとふなり秋の風
秋風や佛に近き年の程

京都本願寺様御出になり越後信濃は芋畑隨機の露がころ〱

秋風や坊主天窓の耻かしき
イケナシの歯を秋風の吹にけり

讃州善通寺西行の古跡

ふけあらし其世の秋を人の松

神前

秋風や草も角力とる男山

病後

鐵釘のやうな手足を秋の風

高井野の高みに登りて

秋風や磁石にあてる古郷山

さと女三十五日

秋風やむしり殘りの赤い花

正見寺上人十ばかりになる後住を殘して迁化ありしあはれさに

秋風やちいさい聲のあなかして

小兒をすかして

泣くものをつれていぬとや秋の風

稲妻

いなつまにならふやどれも五十顔
稲妻や門へ寝ならぶ目出た顔
稲妻やうつかりひよんとした顔へ
汁鍋は稲妻落る所かな
稲妻や狗はかり無慾顔
稲妻やひと切つゝに世か直る
いなつまにへなへな橋を渡りけり
石川はぐわらり稲妻さらりかな
稲妻や畠の中の風呂の人
稲妻や遠山松にかゝりけり
豊年の大稲妻よ稲妻よ

露

若衆か無理に受たる夜露哉
活過し壓をたゝくや竹の露
甘いからはさそおらか露人の露
いさ拾へ露の曲玉長い玉
味あらは喧嘩の種そ露の玉
露けしや草一本の秋の體
姥捨た奴はどこの草の露
田かせきや人の上にも露の量
捨へた露もたるなり馳走垣
大名の笠にもかゝる夜露かな
露の玉遊ひところや茶の烟

露の玉袖の上にもころげけり
逆さまの精進するや草の露
露ちるやわか精進は誰かする
露おくやいつもの處に火の見ゆる
花實のかきりにちるやけさの露
しら露としらぬ子供か佛かな
露の世の露のならふや博奕小屋
露ちるや地獄の種もけふも蒔
蓮の露佛の身には甘からん
玉となる慾は露さへありにける
露秋に獨りものいふあした哉
上出來の淺黄空なり秋の露
しら露に淨土參りの稽古哉
朝露の袖からけふり初にけり
しら露やあらゆる罪のきへ所
露の身の一人通るとかく杜
燈ともして生面白や草の露
朝露と一處に仕舞ふ花屋かな
露下りて四條はもとの河原哉
露の身の置ところなき草の露
世話しなの世や上る露下る露
露ちるや翌日はおのおの御用心
福の神ゑめため露の玉となる
露ちるやむさいこの世に用なしと
露ちりて急に短くなる世かな
何のその百万石も笹の露
愡へ露のころける夜舟哉
日の光る山面白し松の露
露の玉つまんて見たるわらへ哉
白露や後世大事に鳴雀
おめてたく存候けさの露
露の玉小兒つまんた時も佛哉
凉しさは露の大玉小玉かな
露ちるやかき集めたる米の砂
したり尾の長き凉みの夜露哉
露ちるや五十以上の旅人衆

末の露本の雫やにきはしき
朝露や晴天十日つゝくとて
草の露面ら洗ふにはありあまる
わか者か無理に濟たる夜露かな

太子堂懐舊

つり鐘は草に咲かせて石の露
大藪の下からはるゝ夜露哉
はら〳〵と汗の玉ちる稲葉哉

草鞋なから墓参りして

息才て御目にかゝるぞ草の露

五十過て

露はら〳〵大事の浮世哉

男女私にちきりて夜ひそかに
逃行くを教訓して

人問はば露と答へよ合點か

愛子を失ひて

露の世は露の世なから去なから
露の世の露の中にて喧嘩哉

霧

御堂前蓮池をかみて

露の玉ころ〳〵分にし玉へけり
有明や露にまふれし千曲川
柘垣や四角にくれて露時雨

清水横市

夕暮や今賣横に霧の立つ
霧雨や夜霧臺霧我庵は
秋霧や河原撫子見ゆるまて
晴て能く霧のはし〳〵鳰の海
さむしろや一文橋に霧のたつ
有明や淺間の霧か膳を這ふ
夕霧や馬の覺えし橋の穴
とちらからの霧ものかさぬ榎哉
霧晴て足の際なる佛かな
筏木にま一度かゝれ深山霧
霧に眠る目付して居る墓哉
霧雨や日々に梢の薄明り
蕣すくる人や夕霧吹かゝる

秋から草から露の立にけり
山寺や霧にまきれし鉋屑
しら霧やたれ待宵の女郎花

待宵

待宵やすゝき苅萱寢草臥
待宵やまたぬ雨ふる信濃山
入月や雨待宵の信濃山
江戸川や月待宵のすゝき船

野分

寢莚や野分に吹かす足の裏

名月

名月やそも〳〵寒き信濃山
名月や膳へ這よる子かあらは
名月やまつはあなたも御安全
名月や五十七年旅の秋
明月の御覽の通り屑家哉
名月に乘してかつく鐵砲かな
名月や女たてらのほうかふり
山里は小鍋の中も名月そ
名月はそなたの空そ毛唐人
名月や目につかはれて夜もすから

月

名月や寢なから拜む證たらく
名月や下戸か植たる松の木に
名月や下戸はしん〳〵しんの座に
名月もいつさと急き玉ふかな
名月や横に寢る人起る人
名月やあてにもせさる壁の穴
名月やおれか外にも立地藏
名月をとつてくれろと泣子哉
名月や八重山吹のかへり花
名月や高觀音の御膝元
十五夜の造酒へも菊をちよいとさす
十五夜や月のかはりに雨かふる
是程の月や我家に寢て見たら
戸をさして月にもそむく住居哉
御祝儀に月見て〆る庵かな
雨年や十五夜とてもたゝの山
山里は汁の中まて名月そ〳〵
西向て小便もせぬ月夜かな

月も月そもそも大の月夜哉
赤い月これは誰かのじや子供達
庵の鉄松におつけて月見かな
酒つけてしんの座につく月見哉
桟敷の露の小家も月見かな

病　中

名月やどはかり立居むつかしき

姨捨山

あらしみ露や月のおもはくはつかしき
けふといふけふ名月の御側哉
姨捨た舞も亡ひんけふの月
更級にあい峯る月夜かな
名月や江戸のやつらか何知て
信濃では月と佛とおらか蕎麦

赤間関

名月や蟹も平家を名乗出て

筑摩川船留

名月やつい指先の名所山

姥捨の山のそら見る今宵哉
としよりやさらしな山の月の邪魔
小言いふ相手もあらはけふの月

姨捨山なとヽは老足むつかし

有合の山ですますやけふの月

十五夜は高井郡梨本氏にあり

古郷の留守居も一人月見哉

みのか味噌の味噌嗅きを知ら

す

蕎麦花のなんを切つヽ月見哉

朝坐所思

その山は草はかりなり三日の月
三日月や江戸の苦やも秋のくれ
むた草も穂に穂か咲て三日の月

三日月を足みつめたり蝉の殻
後の月半は十三そこらかな
婆めヽとの庇の餅や十三夜
むしたての栗名月の座敷哉
十六夜や吹草伏し萩すヽき
十五夜や難疵の月はいつのまヽ
名月や深草焼の赫夜姫
さら級をはなれし其夜月夜哉
あく口へ月かさすなり隅田川
翌日の夜の月を請合ふおやち哉
次の間へ行燈とれし月夜かな
深川や蜆殻山の秋の月
許多の鼎も消えし秋の月
きむすめの門歩行する月夜哉

春耕孫祝

門の月ことに男松のいさみ聲

月　蝕

欠やうの立派もさすか名月そ
金下戸や蝕名月の目利役
けふあすの盃さへ欠る月夜哉
生涯に二度見ぬ山やかけた月
人数は月より先へ欠にけり
名月の御名代かよ白兎
人の世は月もなやませ給ひけり
人の聲闇てもさすが十五夜そ
名月も出直し給ふ浮世かな

ことしは酒の相手の老婆なく

身の秋や月は無理の月なから

良夜雨

十五夜や雨見の芒女郎花

おなしく夜半清光

御の字の月夜なりけり草の雨
人並に畳の上の月見かな
十五夜やまたある年の闇までは
誰かある闇十五夜のまたあらは
潜上に月の欠るを目利かな

二番目の大名月そ一きはに
出直して大名月そ名月そ
この秋は精進酒の月見かな
もとの名月と成にけり明にけり

秋の雨

秋の雨つい夜に入りし寝かな
秋雨や膝ふしに燈のちらりめく
餅小屋みなも沸はす秋の雨
田の畦の古きといかに秋の雨
蝸牛何をかせもそ秋の雨
鳥の子の古巣はなるゝ秋の雨
堂守と撞木と寝たり秋の雨
平安はうしろになりぬ秋の雨
まらじなもそろ〳〵秋の雨夜哉
片袖の風冷つくや秋の雨
野あらしの縛られ木や秋の雨
秋雨や乳放れ牛の市に行く
桑の木と在所めきけり秋の雨
口開いて親まつ鳥や秋の雨
ひよろ長き草四五本や秋の雨
大根の二葉うれしや秋の雨
喰捨の瓜の若葉や秋の雨

富天を訪ひて

もとりにはとの橋越ん星月夜

秋山

秋山や霧のなびく日はあらし吹

冷

よりかゝるたびに冷づく柱哉

鹿

足枕手枕鹿のなつかしや
嶽風や山のみ山の鹿にまて
山寺や椽の上なる鹿のこゑ
小男鹿の角引かけし葎かな
しき鳥や深山の鹿も色夢む
下手笛によつく聞けとや鹿の聲
聲なくや今二三町違からは
やさしさや鹿も戀路を迷ふ山
しほらしや深山の鹿もいろ好む
老ぬれは聞とはなしに夜の鹿
小男鹿は角あらはすそ人の戀

「鹿の親笹吹風に戻りけり」
そつとして逃れは鹿も逃にけり
人聲に子を引かくす女鹿かな
小夜時雨なくは子の寒い鹿かな
飛翔とんて見せけり鹿の親
戀すてふ角きられたり奈良の鹿
有明や鹿十はかり對になく
角ありと夜は思はず鹿の聲
鹿鳴けは蟲も寝まりはせざりけり
春日野の鹿にうたはるゝ袴哉
春日野や朶菓子に交る鹿の孫
息才に紅葉見るよ夫婦鹿
不性鹿寝て居てひゝと答へけり
掉鹿や膝突たてゝ山の月
不性鹿鳴放しては寝たりけり
小男鹿も芒の蔭のいく夫婦
啼鹿の片顔かくす鳥居かな
又啼くや鹿の必定あはぬ戀
小男鹿や今年生れも秋の聲
さ男鹿も親子三人くらしかな
小男鹿のしの字に寝たる長ゝと
水いらぬ親子くらむや山の鹿
吼る鹿なれをうらえと思ふかよ
啼な鹿柳か縫にあみからに
鹿啼くや大きな里の大月夜
高椽を覗いて呼ぶや男鹿
とこを風吹かと寝たるやもめ鹿
叢並や年寄鹿の義理に啼く
神前に鳴く小男鹿も子やほしき

南都

秋の夜や本町筋の鹿の聲
春日野や神のゆるしの鹿の戀
うら窓や鹿の氣とりの犬の聲
やさしさや戀路にまよふ太山鹿

四十雀

數ゑるや小雀山雀四十雀
むつかしやとれか四十から五十雀

五十雀

友は〳〵し女組やら五十雀

小雀

朝夕や峯の小雀の門馴るゝ

渡り鳥

我前かまわくによいか渡り鳥
喧嘩すなあひ身互の渡り鳥
渡り鳥いく組我を追ぬくぞ
何用にあとへもどるぞ渡り鳥
山雀の輪移しながら渡りけり
どう追れても人里よ渡り鳥

雁

うら口や芒三本雁夫婦
夕陰や下手に下りても須磨の雁
はつ雁や芒は招く人は追ふ
木母寺の古き夕日や芦に雁
積もせぬ雁か下りし門田哉
細〳〵侮りもせて來る雁よ
はつ雁やあてにして來る庵の畑
はつ雁や幸ひ船にのりあはせ
雁なくや何なく碓氷越たりと
殺されにことしも來たよ小田の雁
門の雁片足かけて思案かな
はつ雁の三羽も筆となりにけり
見よ〳〵と片足立けよ小田の雁
はつ雁もとまるや驛の輕井澤
雁鴨や御成もしらで安堵顔
夕暮は鷺か下りても堅田かな
中足立して見せるなり抗の雁
小組を呼下しけり小田の雁
下りよ雁一もくさんに我前へ
おりる田や三遍舞ふて雁おりる
得手ものゝ片足たつや小田の雁
雁啼くな馬ても飲ぞ八兵衛は
ひとむれは今來た顔や小田の雁
あれ月か月かと雁のさはぎ哉
それほどに人用心や小田の雁
雁ともゝ夜る君について渡りけり
小からすに侮られけり小田の雁
雁啼くや崩れかゝりし利介船

落着と直に啼けり小田の雁
白川や曲り直して天津雁
天津雁おれか松には下りぬなり
雁どや〳〵おれか噂をいたす哉

外か濱

けふからは日本の雁ぞ樂に寢よ

小梅筋を通りて

かしましや將軍塚の雁じやとて

御成場

雁鴨や御用を笠に着てさわぐ

旅にありて

雁なくやあはれ今年も片月見
はつ雁に旅の寢やうをおそはらん
跡の雁やれ〳〵足かいたむやら

作らすして喰ひ織らすして着る身程の行先おそろしく

鐵の罰思ひつく夜や雁の啼
我やうや十間はかり跡の雁
田の雁や里の人數はけふも減る
湖へ下りぬは雁の趣向かな

啄木鳥

木琢の仕合いかに夕の月
木琢の稽古にたゝく柱かな

鶺鴒

土くさき畑はつれやなく鶺鴒

鵙

御用山權にかけてや鵙の鳴
鵙なくや村雨かはくうしろ道
鵙のこゑ堪忍俳されたりな
頬けたを切さけられな鵙の聲

鴫

たつ鴫の今にはしめぬ夕かな
淺澤や又歌はれて鴫の鳴
小けふりやさて又鴫の影法師
立鴫に罪なき牛の寢やう哉
つく〳〵鴫われを見る夕邊哉
淺澤やまた顋はれて鴫のなく
立鴫の片足あけてしあん哉
鴫の立つほとは殘して暮にけり
我門の餅懸鴫の啼にけり

帰乙鳥

又来たら我家忘れな行乙鳥

乙鳥は妻子揃ふて帰るなり

啄木鳥

木啄のやめてきくなり夕木魚

木啄の目きゝしてをる庵かな

鳩吹

夕けふり鳩吹人にかゝりけり

蜩

寒いぞよ軒の日くらし唐からし

ひくらしや急に明るき湖の方

ひくらしのすゝしくしたる家陰哉

日くらしや夏を瀬にせん一日峰

日くらしや霧啼へらし啼へらし

行雲やかへらぬ秋を蝉の鳴

妻にゐくれたる太節主人の淋しさを

其窓にそれ〳〵虫もはたおるな

虫

御祭に赤い出立のとんぼかな

まゐはひに拾られてけりたまり虫

鳴虫も節をつけけり世の中は

虫も鈴ふるや住吉大明神

虫啼くやわしらも口を持た迚

むた咄し虫に行燈消されけり

虫ともがなき事いふそともすれは

虫の外にも泣事や薮の家

二百十日

虫とともなき事いふなこんな秋

虫ともは身を知る秋としらさるや

小々と虫の上にも夜なべ哉

よい世とや虫は鈴ふり蝶は舞よ

世の中や鳴く虫にさへ上手下手

蜻蛉

けふも〳〵来ひきずつてとんぼ哉

遠山が目玉にうつるとんぼ哉

三日月をにらみつめたるとんぼ哉

朝霧に食傷したるとんぼかな

百尺の竿の頭にとんぼかな

蜻蛉の百度来りや愛宕山

蜻蛉のすへり落たる天窓哉

とんぼうや犬の天窓を打て飛ぶ

蜻蛉も紅葉の真似や立田川

痩足やためつすかめつ見る蜻蛉

大膽な赤蜻蛉や神路山

蜻蛉の背てなぶるや大井川

屁ひり虫

あれよりもはるか上手ぞ屁ひり虫

窓に来て啼かはりなり屁ひり虫

植た木も花を咲かせよ屁ひり虫

御佛の鼻の先にて屁ひりむし

ブン〳〵と虫も屁をひる山家哉

だんごめせ虫も屁をこく爺か家

屁をひつみしは〳〵として垣の虫

屁ひり虫爺か垣根としられけり

経堂

虫の屁を指さして笑ひ佛かな

虫啼くやかた足なかの藁草履

啼な虫たまつて居ても一期なり

蛬

きり〳〵すなせそつゝれもなき庵

拾られし夜より雨降る蛬

米櫃の中や鈴虫きり〳〵す

寝返りをするそわきよれ蛬

彌陀堂の土になる気かきり〳〵す

歯ぎしみの拍子ともなり蛬

しら露の玉ふんかくなきり〳〵す

銭箱の穴より出たりきり〳〵す

よい聲の連はどうした蛬

法華よむ天窓のうへやきり〳〵す

藪村や燈籠の中にきり〳〵す

きり〳〵す身を賣られてそ啼にける

おゝちうじや迯るが勝ぞ蛬

きり〳〵す三四よれば喧嘩哉

きり〳〵す聲か若いぞ〳〵よ

きり〳〵す案山子の腹で啼にけり

旅立

おとなしく留守をして居ろ蛬

蛬今ひく碓になきそむる

大切なほた餅ふむなきり〳〵す

蚤捜し歩行くや庵の[illegible]
[illegible]
宵々やたゝ八文のきり／＼す
寂歴を草と思ふかきり／＼す
米櫃の中やはたおりきり／＼す
秋の蚊
花の末すゝきの下に啼蚊かな
秋の蝶
舞ふ蝶のその身の秋は見えぬ哉
蟬
蟬のころ／＼鳴や若い同士
蟬めころ／＼一人わらひかな
蟬のとふや唐箕のほこり先
かうろきのうけ取て啼く庵かな
蟬の大聲あくる三十日かな
苦の娑婆をつく／＼法師／＼哉
蟬のうちふところに啼夜哉
[illegible]
蛬の霜夜の聲を自慢かな
蟷螂
其分にならぬ／＼と蟷螂かな
蟷螂や五分の魂これ見よと
有明や蟲も寝あきて茶をたてる
螽
人の世も我もよしとやとふ螽

螽々とふを世かよい世かよいと
八朔の觸に逢しいなこかな
一日つゝ螽の朝もなくなりぬ
とふいなこ柳も年のよりにけり
代官の扇のうへのいなこかな
鼻唄にとつといなこのきけん哉
したゝかに人を蹴て飛ぶいなこ哉
御祝儀に螽とぶなり馳走かな
蚯蚓
古犬やみゝつの唄にかんじ顔
出るやいな蚯蚓は蟻にひかれけり
蛇穴入
普陀落や蛇も御法の窩に入る
蛇も入る穴は持つぞよ鈍太郎
今穴にいるなり蛇も夫婦づれ
との蛇も穴なくしたか秋の水
蛇の穴阿房鼠か入にけり
蛇嫌たか塞いてやるぞ穴の口
蛇も入るや德本様の杖の穴
蛇の責ものかれぬ上に夜寒哉

鮎
終るとも櫻の蔭そ吉野鮎
秋の蟬
仰向けに落て啼けり秋の蟬
絡緯虫
機織るやこの世は蟲にいたるまて
一葉
ふは／＼としていく日たつ一葉哉
懐の猫も見て居る一葉か那
あんかんと二人寝て見る一葉哉
涼しさの足らぬ處へひと葉哉
駒迎
逢坂や手馴し駒にいとま乞ひ
草くれてさらは／＼や駒の主
駒引や駒の威をかる咳拂ひ
駒牽よ蕎麥の世並はとのくらゐ
餞別に草花添へて駒迎
朝夕に手馴れし駒を今や引
一袋蕎麥も添へけり駒迎
人去つて行燈消えて桐一葉
桐一葉
白露の置ところなり桐一葉
三日月の御若い顔や桐一葉
桐の木や散らぬ一葉は蟲の穴

むつかしや桐の一葉のふかれやう
起々にかた膝抱けばひと葉哉
夕暮や膝を抱けば又ひと葉
槿
洪水の泥に一花木槿かな
うか／＼と出水にあひし木槿哉
紅葉
仲のよい畑三ツ四ツ柿紅葉
戻る時人の少なき紅葉かな
月影のさゝぬ方よりひと葉哉
刈豆をぶらさげながら紅葉哉
龍田姫尿かけ玉ふ紅葉かな
鶯のさく／＼歩行く紅葉かな
來るも／＼待人てなし夕紅葉
一時の雨待傘の紅葉かな
川上も秋になしたり蔦紅葉
塗樽にさつと散りくる紅葉哉
霧雨や日々に梢の薄明り
御神馬の涕へげにけり散紅葉
棹鹿の水涕拭ふ紅葉かな

垣の蔦紅葉しながら伐られける
大寺の片戸さしけり夕紅葉
散紅葉焚か小鍋にかゝる哉
砂よけのきのふは見えず柿紅葉
一つかみ塗樽拭ふ紅葉かな
念佛の指南ところや庵の蔦
門の蔦嵯峨念佛の指南かな
蔦紅葉も一ッ家をほしけなり
時代にも沙汰せぬ草の紅葉かな
我が秋蔦は紅葉の時もある
今時の人とは見えず窓の蔦
山主がにくまれ蔦と紅葉かな
ともし積む夕山畑や散紅葉
二軒して作る薮や柿紅葉
日の暮の背中淋しき紅葉かな
ふまぬ地をふむ心地なり夕紅葉
小一升紅葉あけけり水車

名所紅葉

欠鍋も同じ流れや立田川
蜻蛉も紅葉の真似や立田川
膝先へのさはり出たり蔦紅葉
　戸隠山

梨子

はつ梨子の天から降た肚違かな

柿

柿の木であいと答ふる小僧かな
湯上の拍子に涼む熟柿哉
澁い處母が喰ひけり山の柿
澁柿と鳥も知つて通りけり
京の見柿の澁さをかくし好り
澁柿をこらへて喰ふや京の見物
隣の坊は山へ童子は柿の木へ
甘いぞよ豆粒程も柿の數
山柿も佛の目には甘からん
數入の柿の澁さをかくしけり
ことしは母かよくて蒔晴行脚
の降る時
又來たか木末の柿の蒔時に

栗

落る葉もちらりほらりやすがれ栗
鞠へ二子なりけりすたれくり
いか栗も花の都へ出たりな
くりくりと栗もふりゆく流れ哉
焼栗もひとりはちけて居たりけり
焼栗の笑むといふ目もなかりけり
鼠迄も好き事するか杓子栗
　藥師
大栗は猿の薬種と見えにけり
跡の人三ッ栗三ッ拾ひけり
流るゝに苦はなかりけり實なし栗
大きさや人の拾ひし栗の毬
杓子事様して栗の鼠とも
柴栗のゑむといふ日のなかりけり
大眛のなとゝ大栗撰られけり
今の世や山の栗にも夜番小屋
蓑栗や夜番の小屋の饑客
あくせくも起せば殺よ栗のいか

　小布施
拾はれぬ栗の見事よ大きさよ
闇栗の年々ころり〳〵かな
　甲州

葡萄

一番の不二見ところか葡萄棚

柘

柘の實の幾日ころけて實まで
　文化十とせの頃ことやうなる
　くさ〳〵のみ世にめでけるに

朝顔

朝顔のうへにもあるやはやり花
朝顔やしたたかぬれし通り雨
朝顔やきた精進の十五日
朝顔やたまつて居たら天窓まで
　下谷
朝々は葬町にしたりけり
朝顔の濃く咲きにけり餘所の家
朝顔や女車の毛唐人
朝顔やけさも雀に起されし
朝顔や花見るうちもいく度立つ

朝顔や水切町もおもはれず
朝顔にとつてのけたる障子哉
朝顔の花やさら〳〵せはしなき
朝顔や人の顔にはそつがある
いそがしや晝朝顔の咲いそぎ
朝顔に涼しく喰ふや一人飯
朝顔でふいたやうなる庵かな
朝顔やうつとしければ晝も咲く
行て来て朝顔見るやゆる〳〵と
あら寒むや大寺のとぼけ咲
朝顔や大吹降もあがり口
朝顔の上からとるや経山寺
朝顔の大花小花さは〳〵し
朝顔やひと霜そうてばつと咲く
朝顔にかまけて咲せし庇かな
朝顔やいつをいつまですがれ花
朝顔やさいとりさしの竿の先
むだ花はけがにもないぞ朝顔に

萩

朝顔の花てふいたる庵かな
萩もちりぬ祭もすぎぬ立佛
糸染よ〳〵かし萩の花
鹿垣に結ひこまるゝ萩の花
小男鹿の喰ひこぼしけり萩の花
萩咲くや常盤御前か尻の跡
痩萩や松の陰から咲初る
逢ばたへ亂れくせつく萩の花
鹿の子の横に喰ひし萩の花
萩寺や鹿の氣どりて犬は寝る
山萩の咲かくしけり還入口
雨の萩鹿の眞萩をゆふべ哉
萩の戸や日暮てしばし君の見えず
みだれ萩門の番におとらじと
萩の花ふんどし染て吹かせけり

萩寺

存の外俗な茶屋あり萩の花
咲日から足にからまる萩の花

女郎花

女郎花あつけらこんと立りけり
しやりつくや誰待宵の女郎花
何事のかぶり〳〵ぞ女郎花
まぎれぬや折れて立ても女郎花
松の木にすこしかくれて女郎花
女郎花一夜の風に衰ふる

菫蒲公などおのが様々咲誇るを日影長閑に隅田川流れてしづ心なく花のぼろ〳〵散る春色なるべし

女郎花けふの日和はどちら向く
穂芒やほそきこゝろのさはがしき
穂芒やおのが小鬢もともそよぎ
手のとゞく松に入日や花すゝき
散るすゝき寒くなるのが目に見ゆる

文政弐年七月墓参

一人念佛申たけしくすゝき哉
萩の末芒のもとや喰まつり

七月七日墓詣

一念佛申程して芒かな
花なくばなほ引立ん縞芒
祭禮の間に合にけり縞すゝき
ゆら〳〵と大名縞のすゝきかな
向躍さふと切たるすゝき哉
世を捨てぬ人の庇も芒かな
子供等は狐の眞似をすゝき哉
幽霊と人の見るらんすゝき原
古郷や近よる人を切る芒
穂芒に下手念佛のかくれけり
すゞしさは神代のさまの芒箸

桔梗

きり〳〵しやんとして咲く桔梗哉

草の花

昔し〳〵妻こもりしも草の花
耳に珠數かけて祈なり草の花
草花をかこつけにして里居哉
人の世や先ぐりにちる草の花
入相の聞ところなり草の花
やけ山の石の下より草の花

蚤放つほどは草花咲にけり
溲水を事ともせぬや草の花

辭世

入らはけふ草葉の蔭ぞ花に花
けふも死にちかき入日や草の花

素丸逝去（七月廿日なり）

あつしかや南無廿日月草の花

鶏頭

一本の鶏頭ぶつり折れにけり

芭蕉

野鶏の上手にとまるはせを哉

鬼灯

ほゝつきをとつてつぶすや背中の子
ほゝつきの口つきを姉の指南かな
弟子尼のほゝつきを植て置にけり
ほゝつきと隣の小猫にとられけり
ほゝつきや七つぐらゐの小順禮

蟷螂

待ちうけたやうな蟷上戸かた

草の實

草の實も人にとひつく夜冷かな

糸瓜

はづかしや糸瓜は糸瓜の役に立つ
古きこそ庇はよけれからす瓜

青瓢

むだ花にけしきとられて青瓢
小菊なら鶏目の耻はなかるべし

菊

鉄柄に小僧の名あり菊の花
我やうにどつさり寢たる菊の花
菊ぬしや火鉢の隅の素湯土瓶
大菊や今度長崎よりなどゝ
ろく〱に露もまさす菊の花
勝た菊大名小路通りけり
掘くさき黄昏ころや菊の花
幸にさく〱咲ややくざ菊
負け菊をひとり見直す夕べかな
源村や菊の中なる朝茶湯
一畠喰て仕舞けり菊のはな
叢菊や畑の縁りに茶飯連
山里や小便所さへ菊の花
樂々と寢て咲にけり名なし菊
酒臭き紙屏風や菊の花
殿よりも少し上坐は菊の花

向たい方へつん向いて菊の花
菊造り木戸より白きつむりかな
開山は芭蕉様とや菊の花
小座敷や袖て掛たる菊の酒
小ふりなは小僧の鉢や菊の花
寢るつれに瓢もころり菊の花
京都は菊もかふるや綿帽子
山菊の直なりけらしおのづから
山の菊曲るなんとは知らぬなり
人里に植れば曲る野菊哉
人鬼にけふ折らるゝ野菊哉
山菊の生れたまゝや直に咲く
横槌に尻つゝかけて菊の花
菊の日や呑人を雇ふもらひ酒
綿きせて十程わかし菊の花
江戸の末又其末の菊のはな
人間がなくば曲らじ菊のはな
はつかしや勝氣のぬけぬ菊の花

まけたとてしたゝか菊を叱りけり
去年勝た〱と菊の披露なか
大菊や去年は勝た菊ながら
わが宿や植しまんまの菊の花
椽の猫勿體顏やきくの花
山寺や糧のうちなる菊の花

小人閑居成不善

茶代とる迚ならふなり菊の花
菊の花都の鬼が是を喰ふ
咲直し〱けり名なし菊
素通りをさせぬしるしや菊の花

菊月七日近山白く見ゆれば

きく咲くや山はほんまの雪の花
きく咲くや二夜泊りし下々の客
猿の目も見る貌つきや菊の花
大名と肩ならべけり菊の花
菊園や歩行ながらの小酒盛
枝先て齒解するなり菊の花

入道の大鉢巻て菊のはな
下戸庵が挑なりこんな菊の花
九月十六日正風院菊會
鍬さけて神農顏や菊のはな
こゝに正風院此奥に百花あり
門にたつ菊や下戸なら通さじと
九日
われ〳〵はのぼらすとても山家哉
早稻の香　早稻の香や東上總の仲一里
今年米　今年米親といふ字を拜みけり
ことし米飯にまでして貰ひけり
ことし米我等が小菜も育みけり
稻　西風や畑の稻の五六尺
夕月や大々として稻の花
有明や親持つ人の稻の花
むだな身も今年の米を減らしけり
常留主の堂の小滯と稻穗哉
二三本涼しき足しや稻の花
みすしほと犬に負せる稻穗哉
稻の花大の男のかくれけり
新米の相伴したり無緣塚
刀根川や稻から出て稻に入る
ばら〳〵と汗の玉ちる稻葉哉
蜻蛉も拜む手眞似や稻の花
狗のはらつゝみ打て稻の露
半分は人の油が稻のつゆ
燒米　燒米を粉にしてすゝる果報哉
落穗　旅人の垣根にはさむ落穗かな
米穀下直にて下々なんぎなるべしとはこと國の人うらやましからん
日本の外が落まで落穗かな
老の身は今から寒さも苦になりて
蕎麥　山畑や蕎麥の白さもぞつとする
茸狩　茸狩のから手て戻る騷ぎ哉
茸狩の女に勝をとられけり
茸　餘處並に面ならべけり馬糞茸

茸とり刀てわけて芒かな
猿の子に酒くれるなり茸狩
木末から猿がをしへる茸かな
小坊主が高名されし茸かな
五六人只一なり茸狩
そろ〳〵と鼠の穴も木の子哉
大茸馬糞も時も得たりけり
松茸や犬のだくなも嗅歩行く
毒茸
人をとる茸はたしてうつくしき
末枯　末枯や諸勸化入れぬ小制札
二葉三葉根はりつよさや枯木立
人脚も末枯にけり王子道
唐がらし　唐からし惡魔拂ふといふ山家
人は武士君小粒ても唐がらし
居酒屋やあいそに植し唐がらし
豆引　菜も靑し庵の味噌豆今や引
鶉　深草の鶉なきけりはゝが糊
秋の蟬　秋の蟬啼ほど啼て打ばしる
御旅所を我物顏や蝸牛
吹消したやうに日暮る花野哉
朔日は迹になり行く瓢哉
糸瓜つる切てしまへばもとの水

冬の部

冬日和　家一つ畑一枚冬日和
前住し門も見えけり冬日向
乙松も繩をたくるや冬日向
冬日向松を持たさる家もなし
小春　十日ほとおいて一日小春かな
麥ぬれて小春月夜の草家かな
芝原や小春仕事にぬる鳥居
杖ほく〳〵ひろひ日和の小春哉
穀留のつく棒さす又小春かな
棒先の紙もひら〳〵小春かな
くり〳〵と笹湯の笹も小春かな

一人居る丈の小春や窓の前
降雨も小春なりけり智恩院
小男鹿の撞木に寢たる小春哉
冬構
例年の雁も來て啼く冬構
目出度しと雀も啼くか冬構
水田あり麦畑ありて冬構
神送
嶌ひよろひゝよろ神の御立けな
神留守
我宿の貧乏神も御供せよ
神々の留守洗濯やけふの雨
神迎
流し椽讃岐へ着て神迎へ
大黒の俵つくりて神迎ひ
鐘開
鐘開やあつらひ通り夜の雨
芭蕉忌
はせを忌やことしもまめて旅鳳
法華経と鳥もはせをの法事かな
はせを忌やわれも今様の頭陀袋
芭蕉忌や晝から錠の明く庵

乙二なとは彼の地にあれは

はせを忌や夷蝦にもこんな松の月
はせを忌に丸い天窓の披露哉
十夜
田から田へ眞一文字や十夜道
菜畑を通しはくれる十夜哉
かまくらや十夜くつれの明からす
お十夜は巾着切も月夜哉
堺合を通してくれる十夜かな
もろ〳〵の愚者も月夜の十夜哉
藪寺の人氣の見えぬ十夜かな
夷講
大黒もつれに坐するや夷講

夷　賛

願へたゝ空直のうそは守るへし
玄猪
ゐの子の日治世の雨のかゝる也
穢多村の御講幟や御霜月
御取越
おと[illegible]こし飴て餅喰ふ咄し哉
手序に烟管みがくや御と[illegible]こし
里神楽
山本や小禰宜一人の里神樂
翌日は又どこの月夜の里神樂
吹革祭
里並に藪の鍛冶屋も祭かな

麦蒔
一握の麦を蒔そよ門すゝめ
けふからは正月分そ麦のいろ
冬至
雪ちらり〳〵冬至の祝儀かな
粥喰ふも物知らしき冬至かな
藪こしに福々しさよおこり炭
炭
待つときは犬も來ぬそよおこり炭
二三俵粉炭になるもはやさかな
普陀落や岸打波を走り炭
起てから鴉聞なりおこり炭
老僧の炭の折れたを手柄哉
鳴鴉のはら〳〵時の炭火哉
炭の火や朝の祝儀の咳はらひ
けつそりとほし減り立ちぬ炭俵
炭の火や飴のへるもあの通り
炭もはや俵の底そ三日の月
ひとりふへ〳〵けりはかり炭
けふ〳〵といのちもへるや炭俵
場ふたけと思ふ間もなし炭俵
忽に淋しくなりぬすみ俵
赤い實もはかり込たる粉炭哉
朝晴にばち〳〵炭のきけん哉
昔人の雨夜に似たりはかり炭
分て遣る隣もあれなおこり炭
炭くたく腕にかゝる夜雨かな
炭の火に峯の松風通ひけり
くわん〳〵と炭のおこりし夜明哉
炭の火に月落鴉啼にけり
はち〳〵と椿咲けり炭けふり
深川や一升炭と船さわき

「ゆたし舟ともあり」

擂盃の上手にかけておこり炭
炭までも鋸ひきや京住居
京住や五文の炭も目にかける
炭の火も貧乏くさいとゆふへ哉
炭もはや俵たく夜となりにけり
榾
ひえおろし脛吹越る榾火かな
榾の火にうしろむけけり最明寺

雨の日や榾をふまへて夕なかめ
榾の日や目出度御代の顔と顔
うれしさは暁方の榾火かな
子寶かきやら／＼わらふ榾火哉

炭竈

炭竈やしはし里ある並やう
炭かまの空の小隅も憂世哉
淺茅生は晝も寢よけよ土火鉢

火鉢

ほんのくほ夕日にむけて火鉢哉
あのか身になれは火のない火鉢哉
大火鉢またぎなからや茶碗酒
町内の一番起のひはちかな
酒五文つかせてまたく火鉢哉
南天と並ひか岡の火桶かな

火桶

貧乏らしといひ／＼火桶抱にけり
御目さめの前や火桶に朝茶碗
暮るまて日のさしにけり土火鉢
松風の吹き直したる火鉢かな
二日ほと居りこんたる火鉢哉

川風の眞西になりし火鉢かな
山風をしはし見よとて火鉢哉
草の戸も貧乏めかす火鉢かな

炬燵

朝戸出や炬燵と松と筑波山
つふ濡の大名を見るこたつ哉
こたつから大名見るや本通り
唐まてと鵜呑顔してこたつ哉
川縁や炬燵の酔をさます人
湯に入るとこたつに入るか仕事哉
若役に窓あけにたつ炬燵かな

旅情

うき旅も炬燵て年をとりにけり
斯う寢るも我炬燵てはなかりけり

東海道

大名をなかめなからにこたつかな
負闘の衝かはなさぬ湯婆哉

埋火

埋火をはねとはしけり盗み栗
埋火をおほろ／＼と老こゝろ

榿木に泊りて

埋火に桂の鴎聞えけり
埋火の餅をなかむる鳥かな

冬籠

雀ふむほと畑あり冬籠
冬籠その夜見えけり竹の月
御迎ひの鐘か鳴るなりふゆ籠
水清き江戸のはつれや冬籠
太刀疵をひとり咄しや冬籠
冬籠其夜に聞くや山の雨
柿の木に叉罪つくる冬こもり
さし捨し柳の陰を冬こもり
おれにつく能なし猿や冬籠
人そしろ合かたつなり冬籠
江戸も江戸江戸眞中の冬籠
眠りやう窓にならはん冬籠
西の木と聞て頼むや冬籠
能なしは罪も叉なし冬籠
辻君と雙の岡や冬こもり

嵯峨山

はや／＼と誰冬籠る細煙り

歸庵

留守札もそれなりにして冬籠

小人閑居成不善

冬籠わるもの喰ひのつのりけり
古反古つゝり合せて羽折哉
紙子似合といはれしも昔なり

紙衣

負ぬ氣も紙衣にあふと云はれけり
はせを塚先拜むなりはつ紙子
加茂の水吉野紙子とほたへたり
もろこしの吉野へいさと紙子哉
燒穴の口に／＼ふえる紙子かな
千代ふへき木の實を植る紙子哉
つぎませの美をつくしたる紙子哉
明神の御祖と遊ふ紙衣かな
こゝからは都か紙子着るをんな
菊かつくうしろ見よとの紙子哉

頭巾

ほか來てもどなたそよいふ紙衣哉
横吹や猪首に着なす蒲頭巾

樏

樏や凡人わさに雪舟をひく
樏や人の眞似して犬およぐ
樏を子等に習てはきにけり
樏や庵の前をふみ序
雪車ひくやそろひの蓑着初
雪車ひくや屋根から呼る屆狀

蒲團

小ふとんや猫にもたるゝ足のうら
阿房猫おのか蒲團は知りにけり
百敷の都は猫もふとんかな
祐成かふとん引はくわらひ哉
飯櫃にませればふとんなかりけり
今少し雁を聞くとてふとん哉
童頭にもとりてたゝむふとん哉
三ッ五ッ星見てたゝむふとん哉

大阪八軒家

船か着て候とはくふとん哉

足袋

朔日の拇出る足袋て候

衾

ぶつ〱と衾の中の小言かな
とり犬をどなたそといふ衾哉
漏どのか恐しといふふすま哉

鼾

鼾をかくして母の夜伽かな

大根引

丘の馬待ち倦く顔や大根引
野大根大髭とのに引れけり
野大根引すてられもせさりけり
大根ひく拍子にころり小僧哉
大根や一ッ拔ても筑波山

信濃ふり

わか門や只四五本の大根藏
大根引大根て道ををしへけり
一本は翌日の夕飯大根かな
雉子なともほぼ鳴きにけり大根引
むら雨にすつくり立し大根哉
鳴すゝめその大根も今引くそ
我庵の冬は來にけり疲大根

馬道へ葛飾大根今やひく
尼寺や二人かゝつて大根引

干菜

二軒前干菜も掛し小藪かな
うつるへと雨吹かゝる掛菜哉

掛菜

留守事や庵のくるりの釣干菜
御迎ひの鐘待つ軒に掛菜かな
かけそめし日からおとろふ掛菜哉
出初めを祝ふてたゝく瓢かな

鉢叩

殊勝さやおなし瓢のたゝきやう

網代守

網代守年に不足はなかりけり
親の世に生し蔦かよ網代小屋
三日月と肩をならべて網代守
網代守こゝにとえへん〱哉
網代守天窓て梢をとりにけり
德利を蔦につるすや網代守
猪ねらふ腕にすかる胡蝶かな

納豆

納豆とおなし枕に寢る夜かな

藥食

行人を皿て招くや藥喰

寒

皆ござれ猪煮る宿の角田川
鳥の羽のひさしにさはる寒さ哉
風寒し不二にもそむく小窓哉
虱寒し〱と死癈し哉
井戸にさへ錠のかゝりし寒さ哉
空桶を又ふつて見る寒さかな
年かさをうらやまれたる寒さ哉
狽は糞ばかりても寒さかな

堂前乞食

一文にひとつ鉦打つ寒さかな
手のひらに酒飯けふる寒さ哉
寒さにも馴れて歩行くや信濃山
子供等をこゝろて拜む寒さかな
生殘り〱たる寒さ哉
極樂の道が近よる寒さかな
あゝ寒し寒しといふも榮耀かな
合點して居ても寒いぞ貧しいぞ
明はなれ〱て衛士の寒さ哉

あはら骨撫しとすれど寒さ哉
しん〱としん底寒し小行燈
　ゐのか妾にいふ
ひろき目に見てさへ寒さぞふり哉
　一人旅
一人と帳面につく寒さかな
次の間の燈で膳につく寒さ哉
　東に下らんとして途中まで出たるに
椋鳥と人に言はるゝ寒さかな
　箱根六道の辻
寒そらにはなれ〱や菩薩達
　戸迷ひせし折柄に
小便所こゝと馬呼ふ寒さかな

下冷

下冷の子と寝代りて添乳かな
寝ころへはなほ下冷の夜舟哉

鐘冴

今夜から世か直るやら鐘冴る

鐘氷

門口に來て氷るなり三井の鐘
下町や曲らんとして鐘氷る

寒入

駕籠脇の高股立や寒の入
今時分寒の入るらん夜念佛
赤坂や奴のしりに寒の入り
はなれ家やすん〱別の寒の入
降る雨の中にも寒の入にけり
うしろから寒の入なり壁の穴
棒突や石垣たゝく寒の入り

寒月

寒月の眞正面なり寒山寺
大寒や入月ほしき松に月
寒月に立つや仁王のからつ臑
手足まて寒晒なる下部かな

寒聲

寒聲や乞食小屋より娘の子

寒垢離

寒垢離に脊中の龍の披露かな
寒行や誰もたのまぬ御名代

寒念佛

寒念佛さては貴殿てありしよな
一夜さは出來ごゝろなり寒念佛
何果か腰のかゞんだ寒念佛

寒聲につかはれ玉ふ念佛かな
雨の夜やしかも女の寒念佛
聲札首にかけつゝ寒念佛
そつくりと大津の鬼や寒念佛
一夜ても寒念佛のつもりかな
みよし野や櫻の下に納札
梅の木や御秡箱を負ひながら
其迹は新寒念佛と見えにけり
梅見るもむづかしき夜を寒念佛
つき合や不性〱に寒念佛
死處は何處の櫻ぞ寒念佛
垢つかぬ内が殊勝の寒念佛
ふつゝかな我家へもむく寒念佛
着ふくれて新寒念佛通りけり
寒聲と名乘かけけり常念佛
かゝる夜に富士もとしよれ寒念佛
寒聲といふ南無阿彌陀佛かな
木母寺や常念佛も寒の聲
妹が子と寒念佛のもやうかな

寒水

見るにさへぞつとするなり寒の水
朝風にあの年をして寒の水

寒雀

脇へ行な鬼が見るぞよ寒雀
風の子や裸て逃る寒の灸

年木

三四本流れ寄たる年木かな
直なるは隠居の分の年木かな
流れ木のあちこちとして年暮ぬ

煤

浴るともあなたの煤ぞ本願寺
夕月や御煤のすみし善光寺
庵の煤風か拂てくれにけり
うかりける人をいて〱煤はらひ
かくれ家や松の天窓の煤もはく
煤はきの世話のなき身の泪かな
煤拂て長閑に暮るゝ茶畑かな
長閑さや煤拂た夜の小行燈
煤竹にころ〱猫のざれにけり
猫つれて松へ同居や煤拂

梅の木や都のすゝの捨どころ
都鳥それにも煤をあひせけり
身一つを邪魔にされけり煤拂
すゝ竹や馬の首も其序て
煤はきも惡日なんとのむつかしや
すゝはきやけろ〳〵門の梅の花
山里や四五年ぶりの煤拂
煤はきや藪の社もひと社
煤はいた形て出歩行小野郎哉

　坊守り朝とく起きて飯を焚ける折から東隣の園右衛門といふ者の餅搗なれば例の通り來たるべし冷てはあしかりなんほか〳〵湯けふりのたつうち賞翫せよといふからに今や今やと待にまちて飯は氷のごとく冷えて餅はつひに來らずなりぬ

餅

我門へ來さうにしたり配り餅
かくれ家や猫か三匹餅の番
君が代と雉も諷ふや餅の臼
袖に餅秤にかゝる浮世かな
餅つきのうしろになりぬ隅田川
のし餅や鍛手のあとのあり〳〵と
神の燈や餅を定木に餅を切る
ぶつつけて餅にかくなり何貫目
餅つきが隣へ來たといふ子かな
草の戸ものかしはせぬや餅の札
餅つきや今それかしも古郷入
餅つきと闇をならべる榎かな
木陰やあみた如來の餅をつく
餅つきや都の鶴もみな目覺
あてにした餅か二所はつれけり
松ありて又松ありて餅の音
犬の餅からすの餅も搗れけり
あわか餅〳〵とてならへけり

もち搗や棚の大黑にこ〳〵と
妹か子は餅負ふほとになりにけり
門並やたゝ一臼も餅のうた
母人か丸めて投る手本もち
お袋か御福手ちきる指南かな
はね餅の丁度入けり犬の口
山本や狐の穴もくはりもち

餅花

餅花の木蔭にてうちあはゝ哉
かまけるな柳の枝に餅かなる
木に餅の花咲く世にと逢にけり

節季候

節季候や七尺去って小節候
下京や夜は素人の節季候
節季候やはる〳〵歸る寺の門
頭から湯けふり立て節季候
節季候になけぬや門のむら雀
節季候やさゝらて撫る梅の花
大藪の人も節季候〳〵よ
引風よせきから直に節季候
節季候や小錢も羽か生て飛ぶ
子の眞似を親もするなり節季候
町中をよい年をして節季候

年市

山里や藪の中にも年の市
皮羽織見せに出るなり年の市
雪散るや錢はかりこむ大叺

古暦

善惡もまた一日や古こよみ

師走

旅からす師走も二十九日かな
山もとや師走日向のこほれ村
京の師走高みにわらふ佛かな

節分

隱れ家や歯のない聲て福は内
福豆やふく梅干や歯にあはぬ
三ッさへからり〳〵や鬼の豆
豆打や鼠の分もひとつかな
我家の子供も鬼は追にけり
其跡は子供の聲や鬼やらひ
高砂鬼や追出すも歯ぬけ聲
鬼の出た跡掃出して安座かな

門にさして拜まるゝや赤いはし
一聲にこの夜の鬼はにくるよな
さし柊　鬼よけよ浪人よけよさし柊

年内立春

柊にちよつと春たつ月夜かな

身貧にして樂む心樂む

年忘　家なしも今夜も人の年わすれ
わんといへさあいへ犬も年忘れ
人立や庵も夜さらば年わすれ
都かな橋の下にも年わすれ
さか山や十所はかり年わすれ
つき合や今夜も人の年わすれ
いくつやら覺えぬ上に年わすれ
御仲間に猫も坐とるや年忘れ
老松も相手に年をわすれけり
我庵やたつた一人も年わすれ

念々相續

彌陀佛のみやけに年を拾ふ哉

厄おとし　君か代や厄をおとしにお伊勢迄
厄はらひ　我宿に呼損したり厄はらひ

舊巣を賣りて

年の暮　けふになつて家とられけり年の暮
行としを元の家なしとなりにけり
鉦打つや年の仕舞の穴かして
影法師も祝へ只今年くるゝ
斧の柄の白きを見れば年の暮
湯に入て我身となるや年の暮
待つものはさらになけれど年の暮
年すてに暮んとすらん旅の空
叱らるゝ人うらやまし年のくれ
梟よほゝんところか年のくれ
ともかくもあなた任せの年の暮
傾城も山かつらせり年のくれ

兩國橋

年の暮船はいつ迄つるさるゝ
念佛のはかをやるなり年の暮

年取　鴉さへ年とる松は持にけり
年とりに鶴も下りたる畑かな
おさな子やたつた三ツでも年のとる
あなた任せなる世そ年は犬もとる
寒空やどこで年とる旅乞食
憂き旅も炬燵て年を取にけり
年用意　一袋猫もこまめの年用意
直き世や雀は竹に年用意

鴨川渡らしと誓ひし人さへあるに一度こもりし深山を下りて白髮つむりを吹かれつゝ名利の地に交る

衣配　耻かしやまかり出てとる江戸の年
馬にまて正月衣配りけり
藪村も正月着物配りけり
君が代や厩の馬へも衣配
山寺や子に迷ふ親の衣配
山寺の忘れかたみへ衣配
又の世は人の配らんはれ衣
大三十日　大三十日梅見て居てもそしらるゝ
みそさゝい大晦日そ合點か
まつよしと大晦日の寢酒哉
阿字の子の大晦日の夕木魚
梅一技やる人を待つ夕へ哉
霞そや大晦日の寛永寺
春を待つ見識もなき葎か那

紅毛渡り鳩馬

日本の年をとるのからくだ哉

商萬錢者日有苦商一錢者日有樂

大年　笛吹て大晦日を飴の鳥
大年や二番寢過きの人通り
大年の日向に立る榎か那
大年や雀は藪の大日本
年籠　君か代やから人も來て年籠
行年　行年やかふつて寢たき峯の雲

時雨

初時雨松笠なんと拾をふよ
有様は寒いはかりそはつ時雨
十月の御十二日ぞはつしくれ
こんにやくも御十二日そ初時雨
はつしくれ鈴ふりにけり今日は
俳諧の法恩講やはつしくれ

湯田中

座敷から湯へ飛込や初時雨
湯けふりやそよとあしろふ初時雨
犢にもれし鹿かよ夕しくれ
七歳の順禮ぶしや夕しくれ
この便りきくとてある夜一ト時雨
やあしはらく蜂たまれ初時雨
椋鳥の仲間に入るや夕しくれ
古郷に古い杉ありはつしくれ
小座頭の追つめられししくれ哉
牡丹餅の來へき空なり初時雨
山人の火を焚立る時雨か那

おいとしや僧を目さして行く時雨
夜時雨の顔を見せたり親の門
番町や最合番屋の小夜時雨
夕しくれ馬も古郷へ向て嘶く
裸虫さし出てしくれ〱けり
初しくれ夕飯買に出たりけり
目さす敵は鷄頭よはつしくれ
遠山に野火かついたそ初しくれ
雀ふむほとは栗もありはつ時雨
しくるゝや煙草法度の小金原
しくれねは夜も明ぬなり片山家
壁に耳藪も物をや夕しくれ
茶の水の川もそこなりはつ時雨
義仲寺へ急き候はつしくれ
俗につく鐘としくるゝ嵯峨野哉
影法師は翁に似たり初しくれ
山寺の豆いる日なりむらしくれ
これしきの竹にもかゝる初時雨

古郷は小意地のわるいしくれ哉
一日の御祝儀としてしくれか那
泣な子等しくれ空から鬼が出る
かりそめの雨もしくれと名乗けり
ふかれ〱時雨來にけり疲男
下手しくれてきはき降もせさりけり
嫁入の謠ひさかりや小夜しくれ
しくれ雲かゝるも早き木曾路哉
三越路や秋立ッ日より村時雨
行く人はこの灯も見なん夕時雨
青柴や秤にかゝるはししくれ
子を負ふて川越す狙や一ト時雨
一時に二ッしくるゝ山家か那
しくるゝや親椀たゝく唖乞食
山の家にたかひちかひに時雨けり
三介かたゝく木魚もしくれけり
けふり立つ隣の家を時雨かな
しくるゝや叺ふり〱馬の首

しくるゝや人を身にする野への馬
北しくれ火を焚く顔のきたなさよ
夜しくれやから呼されし按摩坊
しくれよと取殘されし大根か那

ぬれ佛

人のためしくれておはす佛か邦
しくるゝや牛にひかれて善光寺

桃靑靈社

御寳前にかけ峯る初しくれ

昔化忌

口笛も御意にかなふか初時雨

旅

しくるゝや家にしあらは初時雨

長崎

もろこしはふるかも雲の時雨口

桑名

蛤の終のけふりや夕しくれ

途中にて素玩に逢ふ

しくれこめ角から二軒目の庵

悼

啼鳥てんなしくれのあらんとて

盗人おのか古郷にかくれて縛られしに

業の鳥罠をめくるやむらしくれ

善光寺門前乞食

重箱の銭四五文や夕しくれ

木枯

木からしの吹行くうしろ姿か那
木枯や隣といふは淡路島
木からしや折介蹄る寒さ橋
木枯はしく〱腹の工合か那
木枯や人なき家の角大師
木枯や畔に迷ふ夕からす
木枯や行ぬけ路次の上總山
木枯や隣といふも越後山
木枯や二十四文の遊女小屋
木枯や門の板のあたり瘤

木からしや縄ひつはりし御成道
木からしや鋸屑のけふる家
木からしや風に乗り行く火けし馬
木枯や深く戸さして夕木魚
木枯や吹くたひ連し山の風
木枯やあみ笠もとる寒さ橋
木枯や夫婦六部か捨念佛
木からしや何を鳥の親にあたふ
木からしや壁の際なる馬の桶
身一ッあらし木枯すへり道
木からしや門に見えたる小行燈
けふも〱只木からしの楽屑哉
木からしや雀も口につかはるゝ
木枯や甕にくるんて捨庵

賀畜家大川氏

木枯や千代に八千代の門榎

吉備八十八坂

木枯や二の坂過る今の人

霜

露霜や丘の雀もちゝと呼ふ
乞食子や膝の上なる夜の霜
一人前菜も青みけり今朝の霜
はつ霜や笑顔見せたる茶の聖
置霜にびと味つけし蕪か那
起くに喉の音や草の霜

善光寺

朝霜やしかも子供の御花賣
霜の夜や人待顔の素湯土瓶
蜂か霜夜の聲を自慢か那
露霜や呼へは近つく小鳥供
茶畑はひと霜つゝの元氣か那
知己のけふも減りけり門の霜
はつ霜やから衣かけてさす小舟
そら色の山は上總の霜日和
宿銭におく浄瑠璃や夜の霜
手のひらに酒飯けふる朝の霜。
霰まて生やうものか霜の鉦

小松菜の一文把やけさの霜
年寄の高股立やけさの霜
霜の夜や横町曲る迷子鉦
霜解やとらまる枝は茨なり

橋上乞食

母親を霜除にして寝た子哉

善光寺堂前

乞食子や膝の上までけさの霜

强盗はやりけれは

張番に庵とられけり夜の霜

春日山

小男鹿やえひしてなむるけさの霜

霜柱

家こけて霜の柱となりにけり
霜柱下手か踏んても見事なり
一方は霜柱なり野雪隠

初雪

はつ雪や垣の鶯小うくひす
はつ雪のふは〱かゝる小鬢哉
はつ雪や誰來よかしに素湯土瓶

雪

初雪の降り捨てゝある家尻か那
初雪やあしたの原の吹とまり
初雪や俵の上の小行燈
はつ雪や今行く里の見えて降
はつ雪や縁から落し上草履
はつ雪や古郷見ゆる壁の穴
はつ雪やこきつかはるゝ立佛
はつ雪は竹に降るなり疲竈
はつ雪や一の寶の古尿瓶
はつ雪や歷を吹れし御侍ひ
はつ雪や鳥も構はぬ女郎花
はつ雪のかゝる梢も田舍哉
はつ雪や門の栗塚大根塚
はつ雪や何を願ひのきり〳〵す
はつ雪を着て戻りけり秘藏猫
大家の夜なへさかりや夜の雪
うす壁にしかみ付けり貧乏雪
雪ちるや軒のあやめのから〳〵と

窓の雪積んでこそ〳〵博奕哉
曲者を人なとかめそ笠の雪
はつ雪やおしかけ客の夜番小屋
道灌の御覽の雪や三の丸
雪ふれや貧乏德利こけぬうち
かりそめの雪も佛となりにけり
はつものゝうちになくなれ門の雪
雪の風呂南無あみた佛としつみけり
雪ちりて人の大門通りけり
重荷負ふ牛や頭に積る雪
里の子や雪待兼し杵角力

雪丸

雪丸に丸めこむなよおれか家
わか家は丸めた雪のうしろ哉

雪礫

頼てもおれにも打たす雪礫

靑樓曲

三昧線のばちてうけたる雪礫

吹雪

垂菰を天窓て別る吹雪か那
菱形に雪か吹入る疊か那

雪

窓の穴壁の割れより吹雪哉
舁先の掃溜塚もけさの雪
雪丸となりおふすれは捨るなり
眞直な小便穴や門の雪
はつ雪を煮て喰ひけり奥の庵
松の奥又其奥や雪手洗
江戸まてはまた八日路よ雪の山
雪國の雪祝ふ日や淺黃空
役馬の重荷に雪の小附かな
夜な〳〵の雪を友なり菜雜水
まゝつ子をかくす地藏や雪礫
來る人か道つくるなり門の雪

湯田中

はたか湯にふるやはつ雪たひら雪
眞晝の草に降るなりたひら雪
男なき寺や立派に雪をはく
雪菰や投こんで行く屆狀
海音は塀の北なり夜の雪

旅人や人に見らるゝ笠の雪

留別

古郷の袖引雪の降にけり
火燵も親ゆつりなり門の雪
ちと足らぬ僕や隣の雪もはく
隣からわろく言はれし松の雪
かれこれといふも當坐そ雪佛
雪の戶や推せはひらくと寢てゝいふ
明日はなき月の名所を夜の雪
うしろから雪のふれかし小風呂敷
かりそめの雪も佛となりにけり
うまさうな雪かふうはり〳〵と
雪の原道は自然とまかりけり
ほちや〳〵と雪にくるまる在所哉
風陰に雪の積むなりうら畑
いぬともかよけてくれけり雪の道
橋の下の乞食かいふや乞食雪
雪散るや脇から見たら榮耀駕籠

山里や風呂にうめたる門の雪
降雪や湧すてゝある湯のけふり
雪ちるや銭幣利をよる時に
雪ちるやおとけも言へぬ信濃山
　田中河原
雪ちるやわき捨てゝある湯のけふり
　石の上の住居のせわしさに
雪散るや昨日は見えぬ借家札
　古郷に歸りて
是がまあ終の栖の雪五尺
　一茶病中の體たらく
狂なりに吹こむ雪やまくら元
　長沼相の島久しく日を費して
　論し損ひける河原を通る師走
　二日なりけり
降る雪のはりあひもなし貧境
　涼睒舎主人手かゆきゝに茶を
　もてなされしもはやみとせ
杖かりし夜はおとゝしか門の雪

五日月この世の雪も見備てか
宵〳〵の雪に明るき栖かな
善人の葬の首途を雪吹かな

霙

菰汁のけふる垣根やみそれふる
酒盃の戸日明りやみそれふる
夕みぞれ竹一本もむつましき
けしからぬ月夜となりしみそれ哉
みそれはたく小尻の先の月夜哉
乗かけへ汁さし出すや降霙

霰

霰ちれ霰ちれ耳か斬耳に
壁任かしやつらたゝくあられ哉
　板橋
雪あられちしろ追れて六千里
一散に飛て火に入るあられ哉
朝市の火入にたまるあられ哉
玉霰ふれとは植ぬ柏かな
一あられはらり江戸氣の霰か哉
衛士の火のます〳〵もゆるあられ哉

冬月

冬の月さしかゝりけりうしろ窓
片壁は海手の風や冬の月
冬の月膝元へ出る山家かな

薄氷

有明の月より丸き薄こほり
猫の目や氷の下に狂ふ魚

氷柱

野佛の鼻の先よりつらゝかな
かた〳〵は氷柱をたのむ屑屋哉
世渡りのつらゝ下るや天窓から

氷

堅氷見る斗りても祝ひなり
面白く煤のしたゝるこほりかな
夕やけやから紅のはつ氷
うつくしく油の氷るともしかな
氷るなよ歯のない母へ手向水
氷ともしらて渡りし湖水かな
縄かけて子に引せけり丸氷

枯野

棹鹿の重りふせる枯野かな
雉子立て人驚かす枯野かな
鳥を捕る鳥も枯野のけふり哉
蕣苞の豆腐かついて枯野かな
馬市の日の暮かゝる枯野かな
六道の辻に立けり枯野原
近道はきらひな人や枯野原
西方の極樂道よ枯野原
枯野原あちな方から夜の明る
子七人さわぐ枯野の小家哉
さふり〳〵〳〵雨ふる枯野哉

枯芒

ゝ賣家の長閑なりけり枯すゝき

冬枯

忍草忍ばぬ草も枯にけり
冬枯や富綿まくれは裸蟲
尋常に枯て立たる柳かな
枯芒むかし婆々鬼あつたとさ
枯荻をよけてくれけり先の人
立枯のとく〳〵折れよ女郎花
女郎花何の因果て枯かねる
枯芒人に賣られし一ツ家
引足は水田なりけり枯荻

寒

枯薊かなくり捨もせざりけり
枯萩に口淋しかる二人かな

千鳥

人鬼の里へもとるやぬくめ鳥
関守か吒ていはく馬鹿千鳥
夕やけの鍋のうへより千鳥哉
鳴千鳥小まんか柳老にけり
片袖は山手の風や啼千鳥
下手蒔の麥を何やら夕千鳥
行くとして何をいちむち夕衛
御地藏と日向ほこして鳴千鳥
むら千鳥そつと申せばぱつと立
三味線に鳴つくばかり千鳥哉

さきのとしの大なゐに鳥海山はくつれて海を埋め甘満寺はゆりこみ沼とかはりぬさすがの名ところもまことにうらむが如くなりけり

象潟の缺をつかんで啼千鳥

鴫

鷹それし木のつんとして月夜哉
雁鴨や御成とならて安堵顔

水鳥

落着にちつと寢て見る小鴨哉
水鳥のあなた任せの雨夜かな

浮寝鳥

汝等も顔は待つかよ浮寝鳥
三十日頓着もなし浮寝鳥
水鳥のとちへも行なず暮にけり
我家を風よけにして浮寝鳥

御成場

江戸川や人よけさせて浮寝鳥

鷺子

鷺や貴いろな聲て親を呼ぶ

三十三歳みそささい遲々といふても日が暮る
山風をふみこたへたりみそささい
みそさゝいきよろ〱何ぞ落したか
こつそりとしてかせくなりみそさゝい
今しがた氷たよこしやくなみそさゝい

馬光塚

あら淋し塚はいつものみそさゝい

鰒汁

浸ましと鰒や見ならん人の顔
つたなしと鰒や見ならん人の顔
とこを風が吹かとひとり鰒汁
蕗の葉に顔つん出す鰒か那
汝等が親分いくらふくと汁
京も京京の珠數屋も鰒汁
はら〱と紅葉ちりけり鰒汁
鰒くふてしはらく扇つかひ哉
鰒汁くひさうもなきつふりか那
鰒汁やもやい世帯の惣軒
鰒喰はぬ奴には見せなふしの山
もゝしきや大宮人もふくと汁
肩越に馬の覗くや鰒汁
鰒好に仕こなされし借家哉
五十にて鰒の味を知る夜か那
親分と家向あふてふくと汁
とら鰒の顔をつん出す葉陰哉

海鼠

我朝のものとは見えぬ海鼠哉

冬の蠅

北國は十分の世ぞ冬の蠅

落葉

落葉して日向に酔し小僧か那
やよ實にも昔よ落葉焚く女
落葉して佛法流布の在所か那
落葉して三月頃の垣根か那
人ちらり木の葉もちらりほろりか那
門畑や猫をちやらして飛木葉
黒塗の馬のはけけりちる木の葉
鷲の口すきに來るおち葉か那
猫の子のちよいとおさへる木の葉哉
夕暮や土と語れは散る木葉
掛かねのさても淋しき散木葉
地爐口へ風の寄たる木の葉か那
榾の葉の朝から散るや豆腐桶

冬椿

世にあはぬ家つんとして冬椿
日の目見ぬ冬の椿の咲にけり

立樹叟十三回忌

冬木立

冬木立昔々の音すなり

赤い實は何の實かそも枯木立

武藏は去年冬つひに不言人と
なりしとなん鷺笠のもとより
この頃申おこせたり

津の國の何を申すも枯木立

枇杷花

誓願寺と名乘顔なり枇杷の花

霜枯

霜枯やとなたの顔も思案橋
霜枯や庵の門へも夜番札

かさもり社

霜枯や胡粉のはけし土團子
人足も霜枯時や王子道
街道や人の通りも霜かるゝ
霜枯や新吉原も小藪並
人顔も霜枯るゝなり巣鴨道
霜枯や番屋にしらみうせ藥
霜枯やなくなりもせもいろは茶屋

追分

霜枯や鍋の墨かく小傾城

中仙道

霜枯やおれを見かけて鉦叩く
霜枯や東海道の這入口

歸花

木瓜の株苅つくされて歸花
山木瓜や實をとりまいて歸花
へし折ていよ〳〵寒し歸り花
あたら日のつゝと入けり歸り花
可愛さやかはら撫子かへり花
畑人の思ひの外や歸り花
北窓や人侮れはかへり花

水仙

水仙やめのとはしり日にいく度
水仙や女きれなき御いほり
水仙や大仕合せのきう〳〵す
水仙や垣に結ひ込む筑波山

蕪

蕪芽生は蕪つくめのまつり哉
雪國や土間の小隅の蕪はたけ

雜の部

佛ともならてうか〳〵老の松
掃初ていく代になりぬ青松葉
おのつから頭のさかる神路山
掃溜へ鶴の下りけり和歌の浦
來て見れはこちか鬼なり蝦夷が島
眞直に人のさしたる檣か那
頼母しや西紅の雲の島

牧人七十賀

きゝ玉へ竹の雀もちよ〳〵と
日よ月よ殖るものには白髮か那

題猫 小判

小けふりも小判のはしそ江戸の空
三日して忘られぬのか野らの猫
君か代は猫も杓子も夫婦かな

題鶴龜松竹

鶴の子の千代も一日なくなりぬ
龜とのゝいくつの年そふしの山
松蔭に寢て喰ふ六十餘州哉
竹にさへ丸に丸きはなかりけり

不二の山

我國はけふりも千代のためし哉

修羅といふ題をとりて

腹中は誰も淺間のけふり哉
御免なり將棊の駒も箱の内
茶むしろに句もあるぞ都人
松島や右の通に御座候

辭世

あゝまゝよ生ても龜の百分一

俳諧歌

春

呼聲に鳴聲すれは古郷は
　あとへこゝろを引くかすみかな
降なから水となりゆくあわ雪の
　あかれぬ前に流れゆくかな
梅の花ちらぬさきにと鶯の
　かはりに來鳴くむら雀かな
世の中はかくてもへけれぬる蝶の
　ゆめ見てはかり身をすぐす哉
みよし野の吉野の山に寢る蝶の
　からのさくらやゆめに見るらん
　かつしかの栖立退く日さし木
　の芽ふきたるに
古庵に後すむ人よ花さかは
　こゝろさし木のさくらとをしれ

腹の中にさくらの花の咲きぬらん
　夜こと〳〵のゆめにし見ゆる
山人の生柴けふらすこゝろせよ
　軒端の梅のすゝけもやせん
いさましの老木さくらや聖の日に
　たほるゝ（よともあり）までも花はさきぬる
後の世にもしや住てふ人しあらば
　つき穗の梅の花もさかなん
難波江のよしもあしくは足元の
　あかるいうちと雁やいぬなん
若草のもえ黄淺黄とまさ〳〵に
　いらさる世話をやく野原哉
花山も住にくしとや夕雉子
　もとの燒野になき戻るらん
　士爽子か妻かりそめの風邪のこ
　ゝちに打ふしねおもひはかりて
　そこ〳〵に別れたるをあとにて
　ほとなく身まかりしとなんあは

れかゝらましかはしはしもとゝ
まりて夜伽し壷の勞の手かはり
もせんに今更くやしく
娑婆の縁うす花櫻けふちると
　しらは木陰をいかてはなれん
　　正月十六日布川閻魔堂に參りて
ちる花の影がちら〳〵淨破利の
　かゝみの中もはる風そふく
御日様に願ひのこしてあるかして
　ふたゝひ上るゆふひはり哉
かつしかや眞間の河原に立雁の
　あとをにこさぬ水の月哉
手をそらし手をそらしつゝ活花の
　花の身ふりをつかまつるかな
きつの火の夜たゞ〳〵にもえかゝる
　草葉〳〵もはるにそありける
あらはるゝことのうしとや春霞
　たちかくすらん山さくら花

　六十一の春
さなきたになみ〳〵ならぬ愚さに
　なほ愚さをましかゝみかな
　陸奥へたつとて
なからへて歸らんこともも白河の
　關をこえ行く老の〇〇〇
古郷に花もあらねとふむ足の
　あとにこゝろをひくかすみ哉
山さくら咲くと思へはちりぬるを
　わがよはひとは思はさりけり
　花法師十日はかり歸らさりけれ
ば
鶯もかきへたつればひとしほに
　しほらしき音の聞えつる哉
春風にうしろつんむく梟の
　ちりとふ花をいきとほる哉
　文化九年正月十六日下總市川の
　閻魔堂に詣て

ちる梅のかけかさら〳〵浄破利の
　かゞみの中もはるかぜそふく
はつゆめに見へし日の出の朝やけは
　此夕けふりあらんさとしか
山畑やまもる人なきうめか枝を
　をらんとすればいぬかとかむる
やよ雀軒に小首をかたふけて
　わなのありかを考て見る
ふりながら水となり行淡雪の
　あは〳〵しさの世をたのむ哉
赤々と日の入そめて早蕨の
　もえきにかすむ山の裾か那
　　さるへき因縁ならんとおもへ
　はくるしみも平生とはなりぬ
朝夕におひかふさりし目のうへの
　こふしの花の盛りなりけり
とね川の西のひかしになく猫の
　及ばぬ戀をよひくらすか那

浅芽生に妻慕歩行野良猫の
　なけども〳〵戀はかりなり
大空に妻いのるらんのらねこの
　月を見つめて夜すら鳴なり
朝夕に竈はなれぬ老ねこの
　戀にもあらて身をこかす哉
君が代のなかれにすめばたつとりの
　あとはいよ〳〵すみ田川か那
かたくなの片山きゝす妻しあらば
　けんもほろゝにたちやしなまし
山雉子のなくねのほねや高砂の
　をのへのはなのゆるきつるかな
花山も住なれぬとや夕きゝす
　なく〳〵もとるもとの焼野に
咲かゝる花や心におくやまの
　かすみはつれに残るかり金
足もとのあかるいうちは雁金の
　たちいそきして歸る夕くれ

一さんに落るひばりや寐せし子の
　鳴聲空に通したりけん
子を捨る藪を見まはし〳〵て
　つゐにのぼらぬ夕ひばり哉
月代の中すり程のくさ焼て
　やまのひたひのうつくしきかな
　乞食題
さくら咲木の下かげに乞食して
　袋にあまる花の雪かな
さゝ浪よ志賀のさくらの咲からに
　龍の都も花やふるらん
ちる花をこゝこゝとめん鶏の
　呼りよりたる垣のもと哉
ちる花の枝にもとらぬなけきとは
　思ひきれども〳〵
風袋ほそめたまへよさくら木の
　としにふたゝび咲花なくに
よは〳〵し老木さくらを山風の

　むつよくも吹倒すかな
老の身のあすの夕部をしら桃の
　ふた葉みつ葉を植てける哉
山ふきのこかねあさむく小流れを
　うしとや牛にのませさらなん
何さくらかさくらさくらもくり〳〵に
　はな〳〵しくも春は行哉
玉たすきがけかひもなき一本の
　はなをさそひて春の行哉
世の中はあなたまかせのなゝころひ
　やおきのはるに逢にける哉
肌衣幾目かくれのふるしらみ
　さし出て人に耻をかゝすな
ぬき捨にけふやしらみのふる衣
　かへす〳〵も耻辱をかく哉
ほとゝきすもてなすとてや山さくら
　一木おくれて花の咲かな
身をつみてしれや焼野に鳴雉は

　親や呼らん子や捜すらん
淺ましの老木さくらや曇か日に
　たそるゝ迄も花の咲けり

夏

うつ波の千たひしつみて浮草の
　うき世なしとて花やさくらん
夕立のまたはれやらぬ木の間より
　しづくなからに出る月かげ
　　功成身退くといふことを
里〳〵を涼しくなして夕立の
　光り退く山の外かな
ほとゝぎすさのみな鳴きそ作るべき
　田はさら〳〵に持たぬ庵そ
　　古鄕夘花
むら雨のふるの垣根や野鼠の
　あなうの花のさくばかりなり
ほとゝぎすかへすましとや夕暮の
　蚊遣も雲をこしらへるかな
にはたつみにはくなふりのいとまなみ
　たつと思へばまたあさる見ゆ
　　讃佛
千代〳〵と祝ひはやして御佛の
　うふ屋にそとるむら雀かな
今更にとふへき人もおもほへす
　八重葎して門させりては
金が降る〳〵てふ夕立を
　そら〳〵海へ捨るむら雲
　　雷山小達
いかつちのとゝろく山のほとゝぎす
　ひと聲ことに雨はふり來ぬ
人は人我は我家の凉しさは
　虻も通らず蝿も通らず
ほとゝぎすまち遠しどや夕月の
　小倉の山にかくれたまひぬ
黒燒のけふりを巡るほとゝぎす

　妻にやあらん子にやあるらん
ほとゝぎすかゝる庵のうの花の
　雪たはなくば見おとしやせん
うのはなの雪を似せるもほとゝぎす
　本草かけて何にたのむらん
夘の花の軒も葎もおしなへて
　唯一聲のほとゝぎすか那
夘の花の軒も葎もほと〳〵に
　なのりてそゆく郭公かな
夘の花の雪にまかへるしら髮を
　また剃ぬとや鳴ほとゝぎす
早稲苗ののひよ〳〵と叱りつけ
　あさねをさせぬほとゝぎす哉
あまひらを態かさしと青麥に
　程よきかせの吹すくるかな
邪摩になる處々へ竹の子の
　よりによりてそはい出る哉
大藪のすみの小隅のたけの子の
　にけてかくれて身をかはふ哉
門口にふきならへるをまち兼て
　あやめの先へ下る蛛かな
いたづらにのきはにふける草菖蒲
　あやしとけふもくれんとすらん
柴門もけふのあやめを福原や
　ふるき藪蚊のさはぐ夕暮
錐ほとの見へし實生もいつの間に
　雲をつらぬく青によろり哉
小雨ふる柴の扉をしい〳〵と
　とものふものは螢なりけり
とふほたる〳〵とてまとひ來て
　闇の莢をつかみつる哉
いのる聲届きやすらん水無月の
　雨をおしまぬ雲は八重雲

秋

星合のそらをはやして撫子の

花〱しくもそろひつる哉

走井

御馬草に今や苅てふ白露の
　芒苅萱花さきにけり
七夕の人見たまはゝむさし野の
　草葉のむしとおほしめすらん
いたつらに過さはつひに露の身の
　おきところなくなりぬへらなり
露霜はいたくおけとも山柿の
　澁のぬけさるわかてゝろ哉
思ひきや雲井の秋の空ならて
　竹あむ窓の月を見むとは
夜もすからなきてとゝめよきり〱す
　秋のわかれはあはれにやあらん

念彼觀音

稲の穂よ南無稲の穂よ〱
　かゝるみのりの秋はあらしな
からそめの咄しも人をゑりもとの

うき世の中も住なるゝかな
木枯にばた〱煤のふる家は
　見かけの外の暖氣なりけり
俳諧のてに葉もしけきこのにはは
　上手にうそをつき山の月
老の身はあの世へちかの汐竈の
　うらのけふりになるはかり哉
世にあれは手をすり足をすりこきに
　してかけ回る年のくれかな

兒童の戯をか

かち〱と勝をあらそふ石なこの
　たま〱とるもやるせなの世や
蜻蛉のきよろ〱眼するかなる
　不二に入る日を追かける哉
西東わかれし藪に啼むしの
　まけし〱とはりあける哉
夜半衣打里さへもきれ〱に
　聞えて寒く吹く嵐哉

白露に味のなきこそうれしけれ
　卄くは人の奪りやはせん
風寒き世を秋の蟬いつまても
　うき世を見ん〱〱と鳴らん
山川に流れをいそくうき栗の
　行衞もしらぬ此身なりけり
はつかしや翌日をも知らぬ此身そと
　しりつゝ栗を奪ひあふかな
足元の明るいうちにかりかねの
　立急して歸る夕暮
希ひ奉らねと月影は
　迷ふ山路を照し給ひぬ
小山田の道しる駒や稲の穂を
　おろせはひとり又通ふなり
秋風のいとゝあはれを三栗の
　はなれ〱に落る夕暮
けふもはやうき世の中に秋の野の
　草葉の陰に這入る三日月

しはらくはまねきとゝめよむさし野の
　尾花か花のくれいそくかけ
有明の月もこの世を秋の野の
　尾花か末に入たまふかな
三日月も汐の峯にかくろひて

念佛門に入相の鐘

紅葉はのちりし山にまろねして
　我もにしきを身にまとふかな
樂とうれひもともに三日月の
　そりのあふたる𨫼をも哉
毒々と落した瓜を馬にして
　たまむかひするけふの夕くれ
露の間のさかりをたにもあさかほの
　はなのいろ〱けはひつる哉
すり鉢の音にあさ〱あさかほの
　みそか〱もしらぬ花哉
あさかほもつふりのいろにあやかりて
　この秋よりも白く咲けり

傍のかはらぬうちに朝顔の
　はな〳〵しくも世をしぼむ哉
夕されは馬屋の草になく蟲の
　おのか野原と思ひけるかな
にし東別れし藪や鳴蟲の
　まけし〳〵とはり上る哉
一寸のこの身も五分のたましゐと
　かまふり上て向ふ蟲かな
鳴むしよそなたも五分の魂は
　きいつと〳〵あり明の月
小車の花の下枝に住むしの
　きつち〳〵と鳴にける哉
世の中はへちまの皮よ白露の
　落るところは谷川の水
明日もあり翌々日もありと露の世の
　露を露とも思はさりけり
　　十五夜雨夜半晴光
空くせの雨さからへと月かけそ
　ますかに秋の最中なりけり
希たてまつらねよやみの夜は
　ひとみちひきに出る月かな
寝てまたん福かくるよそ飯團餅は
　たなの小隅にあり明の月
との島も一こふしつゝあり明の
　月に別るゝ海士の釣ふね
一寸のくさにも五分のたましゐの
　あれはこそ花の立派なりけり
盗喰まわれる猫に赤耻辱を
　かき核なりの目に泪哉
夜は寒くうつ音さへもきれ〳〵に
　きえても寒く吹嵐かな
もみち葉のからくれなゐに辻風の
　吹てくる〳〵巡る猫かな
目出度さはかくの通りと行秋に
　栗のしら露稈の村雨
行秋をそこき直して夕くれは

　稲穂のあらし粟の有明
　　刈穂をあらそひておほやけにう
　　たへんといふをなためける
吹風も身にしみ〳〵と秋の田の
　かりの此世にいつ迄あらん

冬

借金の淵におのれとしつみつゝ
　うき世をうらむ年のくれ哉
　　雪の降る日例の汁の實とりにい
　　つるをりから
あさ菜つみ夕菜つみつゝ積年の
　つむりの雪の野らにまかへる
老の身は寒さまけして何事も
　學はぬ窓にゆきはふりつゝ
ふる雪の山觀出してこゝもとの
　こゝろ皆火のたのもしきかな
降つみし雪の外山も里ありと
　柴折〳〵にたつけふりかな
行雲のあとからはける青そらへ
　うそを月夜のむら時雨かな
夕されは時雨のみしてかたそかの
　里の火かけの見えみ見えすみ
しくれつゝ日影さしつゝいとまなみ
　よるへなき身の行衛なりけり
むら時雨ふるのとまやの夕暮に
　遠かた人の柴はこふなり
木からしもしつこゝろなく呉竹の
　世にこのましき窓の有明
夜もすから人もなきさの柴舟に
　しは〳〵なれて千鳥啼らん
小夜更けて月はかりなる荒磯の
　波のいつみに千鳥鳴らん
あら玉の年のくれ行くおく山に
　木を伐るしづかしつかなりけり
さかさまに着しや衣の年もへぬ

つかふる道にいそぐならひは
二葉三葉四つは頃より置露の
世話甲斐もなく枯る草哉
山おろし吹井の湍に居る鷺の
みの毛よたちて冴る月哉
あへこへに時雨〳〵てふしつけの
ふ仕合なる丘のつふれ家
雨もふれ風もふけとて世の中を
まゝの川原のうきね鳥哉
梟のふるの羽衣あらふらん
のりつけおけと宵〳〵に鳴
榾の火の燃行先に蟻のみの
ほとをもしらてあそひつる哉
ふる雪にきのふもけふもくれ竹の
世にうとましき山住居哉
大雪のふるの山松なゝころひ
やをら入起のけふに逢哉
かくれみのよしきるとても老樂の
かしらの雪のかくれやはする
白雪のほとけ〳〵とつち鳩の
珠數をかけつゝ廢ける哉
世の中はかくの通りとしら雪の
佛はふつと消たまへけり
書出しを紙屋川原の川風に
てん〳〵舞をしたる借金
けふ〳〵とうき世の中をふる家の
曲り形なる年の暮かな
世に住は手をすり足を擂小木に
してかけまはる年の暮哉

雑

逢かたき人に生れてなよ竹の
直なるこゝろしたはるゝ哉
山川もこゝろあれはそわたつみの
神の都に流れ入るかな
かくはかり重きやまひや小車の

私のみのなやみなるらん
くるしさよ又もきのふの今ころや
廻り車のわかなやみかな
けふも又きのふの頃よ足引の
やまひのせめやあはれいつ迄
我書物を人に掠められて
皆ものも殘らず棒にふる里の
人は紙魚〳〵にくきつら哉
利休賛
茶をたてゝ其名をたてゝ家たてゝ
たてる茶せんの利休居士これ
門雀折々小首かたむけて
罠のありかを考るかな
おのか音につらき別れのありとたに
しらでやひとり鳥の鳴らん
田沼氏の築ける遠州相良の城
見にまはりて
石はこひなけきこりつむしめし野の
人の油に光る城かな
むら鳥さわくや人を鳥邊野の
けふりのたつ日近よりぬらん
明專寺に於て酒飲みなから下女に
戯れて
つきかねて破れ衣となりにけり
さして下されつきて下され
ものいはぬをさなの口を赤澁の
みづのせめとは鬼もしらしな
乳戀しちゝこひしとやみのむしの
なきあかしけむ泣きくらしけむ
かりかたに取られし家を眺むれは
あわれ〳〵と啼く鴉かな
我庵は火うち袋にさも似たり
頭かつちり目から火が出る
大あらしふきにけらしな風の神
堪忍袋きれやしぬらん
松の吹折たるに

千代八千代あた欲としき松の木を
　やにはにおりし大嵐かな
まいの世にまきてしたねかはゝききの
　あるにもあらぬ我身なりけり
　　なかくわつらひけるときからすな
　　きよからす心にかゝりて
むらからすさはくや我をとりへ野の
　けふりのたち日ちかつきぬらん
御佛の太山は鳩も珠數かけて
　としより來よと啼まはるなり
つひの世の煙（ほとゝぎす）のたねとなら柴の
　まからぬ枝をたき殘しつゝ
しら髪をそり捨し身はうは玉の
　夜のころもを被りてそ寝る
慾垢も芥のたしになれころも
　膝のあたりに光りさすのは
　　本他力
追風にうしろ任せてあみた笠

おのれと西へふかれ行くなり
あくる夜はとてもかくても呉竹の
　よいはよいにもならぬ世の中
まつしさをうき世のとかにぬり枕
　ぬらりくらりと寝てくらす哉
千代八千代あた慾をしき松の木を
　やにはに折て行くあらしかな
こちあちの風の間に〳〵吹けは飛ふ
　蘆の身にさへ世話しなの世や
いくはくのなけきこりつむ小車の
　下り坂なる我かよはひかな
木曾おろし雲吹つくす青空の
　はつれに烟る淺間山かな
日々になくからすはわれを鳥部野の
　けふりのたつ日まちかぬるらん
あはぬ夜のけふる思ひにくらふれは
　伊豫の湯桁の數はものかは
老樂のゆく末たのむ細杖の

　つく〳〵寒きわかれ道かな
飛上り飛下りつゝ舞鳥の
　つかのまもなき世にそありける
月のことと日ののほることと松の葉の
　さかへるかことと大宮所
手にむすふ水にやとれる月影の
　あるかなきかの世にもすむ哉
これやこの里のならひか門ことに
　葛てふ布をかけ川の里
こゝろなしと人はの給へと耳あれは
　鼬待ふそ庭のまつ風
かりそめのはなしも人を襟もとの
　うき世の中に住なるゝかな
心をはさらり〳〵とさゝたけの
　世をまからすにすくささらなん
石なこの落くる玉のたま〳〵に
　とるとおもへはやるせなの世や
かち〳〵とかちをあらそふ石なこの

　たま〳〵とるもやるせなの世や
けふはけふあすはあすとてたく柴の
　ほそきけふりのたのもしき哉
生て居る〳〵とてほそけふり
　たつたの奥の〳〵の庵かな
つゐの世のけふりのたねになら柴の
　まからぬ枝をたきのこしつゝ
老の身はあの世へちかのしほかまの
　うらのけふりになるはかりなり
　　みちのくへたつとて
なからへてかへらん事もしら川の
　關を越行老の身なれは
老の坂のほりつめたる小車の
　あとへもとれる月日をもかな
いけるものころすな五分のたましゐの
　蟻の思ひや天に通せん
十重二十重繩をはるともあかねさる
　ひま行駒のとまるものかは

かくれみのかくれぬものは世の中の
　人の心の鬼にそ有ける
まいの世の命かりてや狩人の
　罠をまはれる兼の鳥哉
大わらひひとつ〳〵とはら筋を
　よるの咄しもかたみとそなる
　　愛子さと女を悼
俤のてふちあはゝをおもひねの
　ねふるひまさへゆめに見る哉
　　兼の里ちかきあたりとある門に
　　炭團程なる黒き巣鳥をとりて籠
　　伏にしてありけるに其夜親鳥ら
　　しく夜すから其家の上に鳴ける
　　あはれさに
子をおもふやみや可愛〳〵と
　聲をからすの鳴あかすらん
赤鬼のこゝろかくして呉竹の
　世にうつくしく墨衣かな

信濃路や太山の坂の馬さくり
　さくり〳〵と木の實ふひなり
　　仲石太郎死初七日
ひこらしや可愛やとのみおもひ寝の
　ねむるひけさへゆめに見えつゝ

文章

(一)

上野の圃きりふの里なみより一町はかり引入りて何かしの長者と見ゆる構ありてそこのすこし人離れたるあさら井のかたはらに髪つやゝかなる女の紅のたすき今様にかけなして、さそふみづあらはとはかり打けはひつゝたゝひとり絲を染侍りき、かしこに咲る杜若のたくひ折からの風情を添へ雲井をかける時鳥も是かためにや繫わたるかとおもはれて又なくあだ〳〵しき面さしにそありける又けしの今かたほぞおちたらんやうなるえせ法師かやけ野の雉子のぬす立足してとあるもの陰に忍ひよりてひたすらそなたをかいまみけりやかて女もうなづきつゝそこら見廻して口をむく〳〵して淡めくものを掌にはきて卯の花咲る垣の間よりさし出しぬ法師その淡めくものをぺろ〳〵舌先のあるゝはかりなめづりつゝ、日頃のねかひかなひたるけしきしておのれもかたのことくしてさし出しぬ、女も法師か手のひらのあはをおいらかにすゝりけるうちに主の聲のほのかにしけれは、女のめくばせに法師はひそ〳〵逬てけり、あはれ今しばらくあるしの聲なからましかは、垣をやぶりていかなるたはれをかしいてん、おもふにかれら垣へたてゝのふるまひは、あの世までもひとつ臺に居らんといふ、いもせのしるしにしかなせるならん、何にまれはじめ終りさらにものいふことなく、とさまかうさまのけじめさへ白地にしられぬ、なべてこのほとりのてぶりにやいときたなきちかひにそありける

(二)

文化三年九月九日空寒からす熱からすすゝむ足おのつから輕く心の霧も晴るこゝちして先小梅堤にかゝる苅れる小田ありいまたからざるあり作らぬ

菊も折し顔にさきてさすかに暮秋のおもむきを殘す

風吹てそれから雁の啼にけり

同行もおなし優婆塞にて八十の婆なれは物のわきまひもひとかたならす秋の草木のあはれをもたゝにやは見過すべき我は常々行かふ道にしあれとけふは格別の風情を添ふ

たやすくも菊の咲たる川邊哉

午の刻はかりに金町に至るこゝの祭りは必ことさまのてふりもやあらんと久しくこゝろにかけて漸ことし見る日を得るは今日なりけりと老ほこりにほこり來ぬるにさいなくて世間にありふるゝ操狂言といふものにぞありける二人は興さめて再たび見るべくもあらす只松の小陰によりて疲歴の労れをさする

草花に汁鍋けふる祭かな

秋の日の袖にかたふけはかへる期のせかれてもと來し道をいそく

日短は蜻蛉の身にもありけり

又人にかけ稼れけり秋の暮

灯のとぼる家とぼらさる家のあちこち見ゆる頃庵にかへる

雁下りてついと夜に入る小家哉

廿四日晴此夜酉の下刻はかりおのれ住る相生町五丁目にて按摩ひねりの盲人を何者ともしらす鎗もてしたゝかに突通して逃さるあはやと町の人々打よりていつこの者そと問へは息の下より僅に横網の者そと言ふもあへす息絶へたり抑この春の頃よりかゝる稀有の事まれ〳〵あるよし風の吹くやうに聞待りしに今目前に見ることのおそろしくいとおしくかなしくにが〳〵しくあはれなみ〳〵の人ならましかは曲者引とらへもすべきに其身の眼さへくらければ闇の鳥の網に入り覚の魚の毒に逢へることく思ひかけぬ命失ひけるよと見知らぬ人までも袂をしぼりぬこれ實をうはふ盗人にもあらず又遺恨をふくみて人を害するにもあらすかゝる災ひの起りけるは魔王のたくひの今の世亂らんとするふるまひかともおぼへて今このめでたき御代に住るこゝちもせすかく見る〳〵わがたくひも翌の日この難に逢はんことはかりしるべからすとうしろ寒き夜にそありける

冬枯にとれが先たつ草の花

（三）

下總國布川の鄕來見寺のかたはら田中の塚に蓏四五枚引張て酒しる叟あり味噌するわらはありあやしと木かくれてうかゝひ侍るに初孫まうけしなと笑ふ聲していとゆうにこゝろさしもやさしけなる青女の麻といふもの髭にまきそへ花なてしこの雨をおひたるさまにすこしうちしほれてなやめる容のあからさまに見ゆかゝるいふせき藪原にあるへき體とはおぼへずまさしく百鬼のふしぎをなすか狐狸の人の目くらますかとある人に問へは是は此ほとりの門にたつて壹文半錢の憐みをうけて世をすくす古乞食となん誠にそのたのしむ所王公といふとも此外やはあるべき財たくはへねはぬす人のうれひなく家つらくねは火災のおそれなし幸にしてこゝろをやしなふことはなか〳〵祿ある人にも過たりといふべし綾羅錦繡のうつくしきも彼等か目には雀蚊虻の前を過るとや見んいてこのうちの趣は離妻か目にもいかて見分くべき今宵は嫡子初七夜の祝ひに其黨を集めて子孫長久いのるなるべし

赤子からうけならはすや夜の露

（四）

朋友に信をもつて交るといへるはかしこき人の上にして我々ことき塵の身は風のふくに任せて東し西して行衛もしらすなりぬる境界さうに人數にいりぬへしとはおもはねどかりそめにも諾したる詞のうち捨かたく八月四日いまた炎天のあゆみくるしきさへ首途して船竹むらにかゝる

越後山背筋あたりを冷つきぬ

毛野むら瀧澤氏に泊る

六日今井むらを過る此里に普賢寺とて堂額おこそかに建てうしろは千山重りて嚴冬氷雪のあらしを防き前は萬木茂りて九夏三伏のあつさを凄くかぐ萬世不易の佛地なるに去六月五日となん僅の限より火起りて世にしられたる伽盛もめろ〳〵と燃へて皆一時の烟とはなれりけりあはれ人家幽に遊て火災のおそれなく水音近くに廻りて火除のそなへありといへとも回祿遁れかたくや

碇によりて

涼風に吹かれちからゝなかりけり

今井の渡りをわたりて安源寺に入る大木牛をかくして隣ゆく駒のかけも、やとらぬ程なる森あり小内八幡宮といふけふは年毎の祭なりとて遠近こそりて群集す

花草をよけて居るや勝角力

この森を東へ下れは渺々と土地開てこの國第一の田所といふ抑鶯のはつ音を告るあしたより手足を空にして耕を深くし雨風にこゝろを配りて苗代をやしない漸時鳥の啼渡るころそれ〳〵に植並へてつちかひ草きり禾下の土も汗に潤ふかりそめの一葉すら皆々辛苦ならざるはなきに五月廿三日となん洪水のために堤破れて百日の丹誠も只一夜の沼とはなりけらしさてしもかへらぬ災なれはとて其跡に稗なと蒔て今秋風祝ふ夕暮も只薄墨の穂なみとはなりぬ

風吹て草の穂にさへ祭か那

湓村わくや市左衛門に含るかねて約束なれは先づ湖光完技に逢て歌仙なとす

即　興

せい出して山路のけふる野分か那

小男鹿の水鼻ぬくふ紅葉か那

七日湖光とおなしくきのふの道をもとる二十塚といふところより二人の在所見ゆ

けふり見え戸隠見えて肌寒き

（五）

時鳥しは〳〵啼て花たちは那の香にふるゝころ昔の人のしきりにしたはしく信濃なる古郷に首途するとて日吉太兵衛といふ者に跡のことこまかに頼みてこゝろ輕く笠打かふりて上野やはるなの山の神とかめもなく草津の湯に炎暑を避て秋風冷々おとづるゝ日かねてねがひなる生れ國柏原にやとりてなき鬼祭る灯にみそはきの雫を添へ又生殘る友とちに松の齡を延て打かたりて二百日あまりとゞまりて漸暮なんとする日かつしかの舊巢にもとれは留主もる人もいつち行きけん葎の枯莖おのがまゝにはびこりひとむら竹はあらしに折れたり壁おちひさし破れて試に秋の野らに立かごとしかくあれまさりたる家をさへこのもしく思ふ人ありてや柱ともたれたる隣翁のこゝろたよ〳〵とくじけていつ〳〵の日こと人にゆづりしとなんしらぬけふりのむく〳〵と立けるあはれながらく空地の價つくのひおきけるもはる〳〵歸りてわらちの緒とく〳〵枕して煙めつらしく長途の瘦れ補はんれうなりけるにおもひきやこの後雪のみ山に啼鳥の夜々寢所に迷んとはしらるに日頃培ひたる庭木の主まち貌につほみ常々來馴れし雀の我聲聞しりてむらかるに今更こゝろ引るゝ門なりけり

跡々の人にあかれな梅の花

文化五年十二月十七日一茶認

（六）

文化六年正月元日夜酉の刻の頃火もとは左内町とかや折から風はげしく烟四方にひろがりて三ケ日のはれにあらためたる蔀たゝみのたぐひ千代をこめてかざりなせる松竹にいたるまで皆一時の灰燼とはなれりけりされは人に家とられしおのれも火に栖燒れし人もともにこの世のありさまなるべし

碇や元日しまの巢なし鳥

家なしのこのみも春に逢ふ日哉

随齋のもとにありて乞食客一茶

（七）耕舜先生挽歌

柳澤勇藏といへる人は吹風の跡かたもなき朧にあひて武門を放たれふたゝひ君に仕ふるもものうしとやおもひけんかつしか竪川のほとりにかりそめの栖をむすび名を瀧耕舜とよびなにはつあさか山のかなもじをわらはへに教るを常の產としてみつから菜つみ水くみつゝ筆の命毛の細けふりをそ立ける我またこの川遠く住居して三つ四つ二つ橋をへだてぬれとそのしたしみは隣よりも近く花にうかるゝ春の日もかならず杖をともにひき月にかなしむ秋の夜と倩一枚の筵にはらはひ或はおなし蚊屋にをとり入あるはひとつ衾に足をくるみ一日あはざれは百日のおもひをなし星霜十とせあまりのむつみ淺からず深からす石川の水のさら〳〵と流れそゝくかことく日々夜々の物かたり倦時なく樂しも共にたのしみなけきもおなじくなけきけるしかるに二月中ころとよふと病に伏してきのふよりけふと頭おもたげになり行けは枕もとによりて神にいのり佛にちかひてはやくもとのことくならは眞間江の螢角田川の涼み誘引はんなとちからをそへ待りけるに倚玄か藥も日增にたのみうすく四月十六日といふ日常よりもこゝちよげに後のことまてしか言終りて眠れるやうに息たへたりあはれ此人とはすくせいかなるちきりやありやん彼は我をちからに思ひ我は彼をたよりにしたひて田舍修行のかへるさにも十度か十度立よりてはゝきゞのあるにもあらぬ噺さへ隙行く駒のかけ見えぬ程に居過しつゝ旅のうさをもなくさめしが思ひきやけふこの人を夢になして殘る淋しさをなからへ見んとはまことに沖の船のかぢをうしなひ老の波のよるべしられぬこゝろし侍るあぢきなき世のならはしにこそ

　この文は我身の上か皆からす

十七日朝㒵

其跡に殘る物なと忌〳〵しとて前なる川へ捨るもありけり

　短夜やけさは枕も草の露

十八日雨

机の上なと守りけるに雪をつみ股に錐して書かけしものさへ今は記念となりぬ

　風そよ〳〵空しき窓を飛螢

一七日寺參

　ほとゝきすさそふはつなる木間より

三七日

　夕月や門の涼みも昔沙汰

（八）

三月廿八日流山田川かけて杖向んとす折から春の氣しき捨かゝく三巡り堤にかゝるにそこの長命寺といふ寺にさまて古くもあらぬ碑有西行に雨の宿かせ時鳥亡夫左著妻妙龍建之と記せり女は髮のかざり衣の粧ひに心を勞するは常々あるべきわざなりけるに葬のことはいふもさらなり亡き夫の名をさへ長くこの土に殘さんとは世にあるうちはかはらす松柏の操破らずをしの衾のむつましからんと思ひやられてかすみかくれの櫻闇にまかふ梅のそれとはなくなつかしく覺え侍る

　はつかしや蝶は暮行く春もなき

木母寺の花は青葉にうつりて念佛の聲もなくゆききの人も稀々也茶店の箍木陰に雨されて僅に春の趣きを殘せり

　後れ花其連是にまかり有

川の東にすこし曲りたる處を鐘か淵といふ昔普門院の釣鐘舟より落てぬしとなりけるよりかくいひ傳へるとなんかたるあはれならくの底に生を受し畫女さへ御法りにあふて法土におもむくとあるに佛緣にひかるゝ梵鐘のなしかは蛇身となりて今の世まて浮まざらん鐘成佛の御經は如來もとき玉はぬにや

新宿より泣堀傳へ二里谷中村より左の橋渡りて流

山に泊

昨鳥、蓬風、木之、

二十九日晴布川に泊

君か代の木蔭を鹿の親子かな

六日曇田川に入る

いつこより來りけん年四十くらゐなる男郷の背戸かどひそ〳〵さまよひけるかある垣根に古衣ほしてありけるを盜のひとさらひに袂にかくして迯去りけりやらしと畠の人々はせよりてつひに引とらへつゝ二つの手に五尺はかりの竹を結ひ添え棒縛といふものにして彼の法師か鳩をとりしさまに作りなして道くだりとりためたる帚あるは鐵槌なとあるかぎり腕にくゝり首にさけさせて主あらはとりてんやと飄ひつゝ疫神送るやうに鉦鼓打ならして村はづれの川原に追放ちぬその罪にくきはさらに忘れていと興ある見ものにそ

行々し下手盜人をはやすらん

（九）

去年の冬になんありし上總國小南の里にちかひてしことのこゝろにかゝりて柳橋やけ跡なる舊巢もそこ〳〵にして二月十一日といふに旅笠かふりて其日は馬橋に泊る折から北風木を倒し石を飛して夜のごとくなりはるか江戸の方にあたりて帚を引たらんことく西南に燄ゆあはれ雉子の子をうしなひ鶴の妻に別れて泣さけふありさま正しく見るやうに思はれてあはれ也ところの人いふやう巣鴨或は四つ谷あたり又千住なとゝ五里の行程見てもとりしやうにのゝしりあへりけふ申刻はかりに見え始りて夜丑の時頃しつまりぬ十二日朝とくはや走りの人にとへは火本は市谷たに町とやらん芝赤羽根にやけ止るとかや長さ五十町あまりの間大名小名多少樓臺神社佛閣のたくひたちまち灰塵の原とはなれりけるとなんおのれしれる人李嘉白基のともから、とはまほしくも今さらつばさあらねはそなたの空をながむるのみ

百雨の松もころりとやけ野かな

（一〇）

下總あたり草枕せんとして松井に立よりけるにけふは雜司谷の會式参りすといふ我三十年あまり逗留するうち一度も足をはこびたることなければ幸に打つれて行く

御茶水にて

筏士やそなた許りに散紅葉

護國寺に元善光寺如來の開帳あれは序に拜まんとするに公のさはりありて錦帳おろして物さびしくたゝ太山木のはら〳〵ちるのみなり長々の日數に足をかはひかゝる折からまゐりあふこと佛緣うすき我々なりけり

しくるゝや小藪の中の芭蕉塚

入つ時ころ雜司谷に参る寺々に張子の山をいろとりて深林のおもむきをなし染紙の波を作りて蒼海のありさまを寫すみな〳〵聖人奇瑞のふることを眼前に見るか如しされとあまりにかざり過たれは戲場のやふに思はれて隨喜の泪は出ざりけり

門前に乳代りの飴とてあり松井家つとにとゝのふ

九日晴小梅通り

枯々の中に戀する螽かな

馬橋に泊十日布川に泊十一日雨

木枯や雀も口につかはるゝ

雉なども粗啼にけり大根引

十二日小雨芭蕉忌

けふの日や鳩も珠數かけて初時雨

十三日晴田川に入十四日曇

紅葉いろ〳〵いつ古郷の冬籠

十五日風吹雨

高岡の北通り金江津を川北にしてゆく日ころのしぐれに道ぬかりて人足しげきところは帚の廣さ程にかた道つきぬしかるに口とりなき馬のしたゝかに稻を負ひたるが三疋ばかりとろ〳〵と來かゝり

たればせんかたなくためらひけるにやがて先に立たる馬の泥の中へづぶ／＼とふみこみ行くに跡の馬もかたのごとくして我にあゆみよき道ゆづりて急ぎ行きぬ彼は重荷負たれば身しろきさへ自由なるまじおのれ片脇によりてこそ本意なるべけれ馬のこゝろに無法者とや思ふらん

口すぎの念佛通る小春かな

大貫村に藤堂家の御陣屋あり過ぎし寅のとし冬ころより古狸いろ／＼の怪異をなしけるか日増に增長して一寺をめろ／＼と燒き又在家三軒ばかり灰となしたる物から江戸武林よりあまた人をこして終に代官の弟を罪なひけるより漸あやしきわざやみしとぞ其やけ柱は今畠縁なとにあり

是より雨にふられて佐原葛齋を宿とすこの主この九月十四日に身まかりぬと太節のもとより告來したれば先々とて寺參りす

十六日風申刻雨兄直參あひて逗留す主植殘されし木々は折しり顏に紅葉して鶯の子のちゝ／＼と飛廻る女主のいはく佛のふかくめでられし鳥のことしも來ぬとて泪もろきもことはりなりけり

並嗜も手もちぶさたの垣根哉

此日歌仙有

十七日晴兄直同道かとりの社に參てゝ五里程樹林寺夕顏觀音を拜む境内に老木の櫻あり

角力見物して飯田泊

衾張て腰て見たりけり角田川

鵆の山となしたるおち葉かな

十九日小雨に入

吉原のうしろ見らるゝおち葉哉

鵆や黄いろな聲で親をよぶ

(一一一)句勸進序

五老井が申せしとほり四十後の月日はかならずちか道を行くと見えて今の我等が一とせの暮ることまことに履をぬくよりもやすし是大切につかふべき第一也ことしの目のあたり佐原の恒丸なごやの

臥央など打つゝきてもとの雫と先立ぬ其門葉又親しき友などもこゝろのとけく思ひをりてかたみになるべきひと筆をさへも得ざるものおほかりけりましてきのふは西に食しけふは東にやとる旅人の月に花にこゝろをこらして作り出せることの葉どものむなしく筑波山のあらしに散りかとりの浦の雨に朽なんことをおもふ物から如翠子が工みにこの一帖をまうけたりとなり遠近の風狂人御油斷なくとく／＼墨をほとこし玉へかくいふうちも無常のおにおそひ來たらんことのおそろしさにしなのゝ一茶はしめに書

文化七年十月廿日

(一一二)

正月元日の夜丑の刻より始りて打つゝき八日目八日目に天に音樂あるといふ事誰いふともなくいひふらしていつ／＼の夜そんじよそこにてしかときゝしといふ人も有りまたふく風の跡なしことゝけなすものもありその噂東西南北にぱつとひろまりぬつら／＼思ふに全くありと信じがたく又ひたすらなしとかたつけがたし天地ふしぎのなせるわざにていにしへ甘露をふらせ乙女の天降りて舞したりしなきにしもあらず今この天下泰平に感じて天上の人もはら鼓うち俳優してたのしむならめそれをきゝ得ざるは其身の罪のほどによるべし何にまれ惡からぬとりさたなりと三月十九日夕すきより誰かれ我庵につとひつゝおの／＼息をこらして今や／＼とまつうち夜はしら／＼と明けて窓の梅の木に一聲あり

今の世も鳥は法華經啼にけり

(一一三)

ことしみちのくのかた修行せんと乞食袋首にかけて小風呂敷背中に負ひたれば影法師はさながら西行らしく見えて殊勝なるにこゝろは雪と墨染の袖とおもへば／＼入梅晴のそらはづかしきに今さら

すかた替るもむつかしく卯花月十六日といふ日久しく寝なれたる庵をうしろになして二三里も歩みし頃細杖をつく〳〵思ふにおのれすでに六十の坂登りつめたれば一期の月も西山にかたふく命又ながらへて歸らんことも白河の關をはる〳〵越る身なれば十符の菅菰の十に一つも覺束なしと案じつゝくるほどにほとんどこゝろ細くて家々の鶏の時を告る聲もとつてかへせとよぶやうに聞え畑々の麥に風のそよふくもたれぞ招くことく覺えて行道もしきりにすゝまざればとある木陰にやすらへて痩歴さすりつゝ詠るに柏原はあの山の外雲のかゝれる下あたりなどおしはかられて何となく名殘おしきに

思ふまし見ましとすれと我家かな

おなしこゝろを

古さとに花もあらねとひくあしの
跡えこゝろをひくかすみかな

（一四）

わか友魚淵といふ人のところに天が下にたぐひなき牡丹咲たりとていひつき聞つたへて界隈はさらなりよそ國の人と足を勞してわざ〳〵見に來るもの日々おほかりきおのれもけふ通りかけに立寄侍りて見けるに五間ばかりに花園をしつらへ雨覆ひの葭など今やうめかしてりゝしくしろくれないむらさき花のさま透間もなくひらきそろひたり其中に黒と黄はいひしにたがはず目をおどろかす程めづらしく妙なるかこゝろをしつめてふたゝび花のありさまをおもふにはさ〳〵として何となく見すぼらしく外の花にたくらぶれば今をさかりのたをやめの側にむなしき屍を粧ひ立てならへおきたるやうにてさら〳〵いろつやなし是主人のわさくれに紙もて作りて葉かくれにくゝりつけて人を化かすにぞ有けるされど腰かけ臺の價をむさほるためにもあらずたゞ日ゝの群集に酒茶つひやしてたのしむ主のこゝろ思ひやられてしきりにおかしくなん

紙屑も牡丹顔そよ葉隠れに

（一五）

信濃國墨坂といふところに中村何がしといふ醫師ありけりその父のわざくれに蛇のつるみたるを打殺したりけるが其夜かくれ所のものづき〳〵痛み出して終にくされてころりとおちて死けるとかやもとり替え引かえ妾をかゝえぬれどみな〳〵前の通りなれば狂氣のごとくたゞいらちにいらちて今は獨身にてくらしけりかゝる事宇治拾遺物語其外昔双紙なとにはかりと思ひ捨侍りけるを今目の前に見んとは是かの蛇の執念に其家の血筋たやすならんと人々ひそかに噂しけりされば生とし活るものの蚤虱にいたるまで命をしきは人におなしからんましてつるみたるを殺すは罪深きわざなるべし

魚ともや桶ともしらで門涼み　一茶
とくかすめとく〳〵かすめ放ち鳥
彼岸の蚊釋迦のまねして喰れけり　大江丸
水ふねにうきてひれなす生け鯉の
命まつまもせはしなの世や　光俊卿
ふしつけしおどろか下に住むはへの
心おさなき身をいかにせん　俊頼卿

（一六）

昔丹後國普甲寺といふ所に深く淨土をねかふ上人ありけり年のはじめは世間祝ひことしてさゝめけば我もせんとて大三十日の夜ひとりつかふ小法師に手紙したゝめ渡して翌の曉にしか〳〵せよとときいひをしへて本堂へとまりにやりぬ小法師は元日の旦いまだ隅々は小闇きにはつ鴉の聲とおなしくがばと起きて教の如く表門を丁々と叩けば内よりいづこよりと問ふ時西方彌陀佛より年始の使僧に候と答るよりはやく上人跣足にておどり出て門

の扉を左右へさつと開て小法師を上坐に稱してきの文の手紙をとりてうや／＼しくいたゞきて讀て曰く其世界は衣苦充滿に候間吾國へ來るべし聖衆出むかひしてまち入候とよみ終りておゝ／＼と泣れけるとかやこの上人みづからたくみ拵へたるかなしふにみづからなげきつゝはつ春の淨衣を絞りづつしたゝる涙を見て祝ふとは物に狂ふさまながら俗人に對して無常を演るを趣とするときくからに佛門においてはいはひの骨張なるべけれそれとはいさゝかかはりておのれらは俗塵に埋れて世渡る境界ながら鶴龜にたくへての祝ひつくしも厄拂ひの口上めきてそら／＼しくおもふからにから風のふけばとぶ屑家は屑家のあるべきやうに門松たてす煤はかず雪の山路の回り形りにことしの春もあなた任せになんむかへける

　目出たさも中位なりおらか春

(一七)

妙專寺のあこ法師たか丸とてことし十一になりけるが三月七日の天うら／＼とかすめるにめてゝ觀了といふふとくたくましき荒法師を供してあら井坂といふところにまかりて芹薺など摘みてあそぶ折から飯綱おろしの雪解水黑煙たてゝどう／＼と鳴り渡りておしきたりしにいかゞしたりけん橋をふみはづしてだぶりと落たりやあれ觀了たのむ／＼と呼はり／＼沒に頭いつると見れはかしこに手を出しつゝたちまち其聲も蚊のなくやうに遠さかると見るをこの世の名殘としていたましいかな逆卷波にまきこまれてかけもかたちも見えさりけりあはやと村の人々打群りて炬をかゝけてあちこち搜しけるに一里ばかり川下の岩にはさまりてありけるをとりあげてさま／＼介抱しけるにむなしき袂より蕗の薹三つ四つこほれ出たるを見るにつけてもいつもの如くいそ／＼歸りて家內へのみやげの料にとりしものならんと思ひやられて鬼をひしく山人もみな／＼袖をそ絞りけるとみに怨

にのせて初夜過るころ寺にかき入れぬちゝはゝは今やおそしとかけ寄りてひと目見るよりよゝ／＼ど人目もはぢず大聲に泣ころびぬ日ころ人に無常をすゝむる境界も其身になりてはさすが恩愛のきづなにこゝろのむすびめほどけぬはことはりなりけり且にはわらひはやして門出したるを夕にはものいはぬ屍となりてもどる目もあてられぬありさまにそありけるしかるに九日野邊送りなれはおのれも棺の供につらなりぬ

　おもひきや下萌いそくわか草を
　　野邊のけふりになして見んとは　一茶

長々の月日雪の下に忍ひたる蕗たんほゝのたぐひやをら春吹風の時を得て雪間／＼をうれしけに首さしのべてこの世の明り見るやいなやほつりと摘きらるゝ草の身になりなは鷹丸法師の親のごとくかなしまさらめや草木國土悉皆成佛とかやかれ等も佛生得たるものになん

(一八)蛙の野送

こゝらの子供のたはむれに蛙を生なから土に埋めて諷ふて曰くひきどのゝお死なつたおんばくもつてとぶらひに／＼と口々にはやして芣苢の葉を彼の埋めたる上に打かふせて歸りぬしかるに本草綱目車前草の異名を蝦蟇衣といふこの國の俗がいろつ葉とよふおのづからに和漢こゝろをおなしくすといふべしむかしはかはかりのされことさへいはれあるにや

　卯の花とほろり／＼や蟇の塚　一茶

このもの諸越の仙人に飛行自在の術ををしへ我朝天王寺には大たゝかひに由々しき武名を殘しきそれは昔々のことにして今この治れる御代に隨ひともに和らきつゝ夏の夕暮せどに莚を廣げて福よ／＼／＼と呼べはやがて隈の藪よりのさ／＼這ひよりて人とおなじく凉む其つら魂ひ一句いひたけにぞありけるさるものから長嘯子の虫合に歌の判

者にゑられしは汝が生涯のほまれなるべし

悠然として山を見る蛙かな　一茶
鶯にまかり出たよ蝦蟇　其角
思ふことだまつて居るか蟾　曲翠
一雫天窓なでけりひきかへる

（一九）

高井郡六川郷六川の里山の神の森にて栗三つ拾ひ來りて庭の小隅に埋み置たりしにつや／＼と芽を出して嬉しげなりけるを東隣にも家に家をつくり足しぬるから月日の恵みとゞかず雨露の潤ひうとければ其年やをら一尺許伸ひけりしかるをこの國のならひ冬になれは東より西より南より北より家の大雪をひた落しに落しこむからに恰も越の白山一夜に兀と湧出たるに等しく其山に薪水を運ぶ道つくるに愛宕山の石壇のぼるごとし漸く二三月ころおしなべて長閑なるに隣／＼の背戸畠は草木青みわたりて花もまれ／＼咲けるに彼の山はいまだ眞白妙に風冴えて嚴寒を欺くけしきにてやゝ卯月八日髪さけ虫の歌を厠に張るころ山鶯の折しり顔になけは雪の消口より見るに哀れなるかな、栗の梢は根際よりほきりと折れてしまひぬ人ならは直に無常の煙と立昇るべきを古根よりそろ／＼青葉ふいてからうして一尺ばかり伸けるを又前の如く家の雪をおとしこまれてほきりと折れ年々折れ／＼てことし七年の星霜を累ぬれど花咲き實入るちからもなくされどこの世の縁つきざれば枯も果ずして生涯一尺許にて生きて居るといふばかりなるべし我又さの通り梅の魁に生れながら炎の遲生に地をせばめられつゝ鬼ばゝ山の山おろしに吹折／＼晴々しき世界に芽を出す日は一日もなくことし五十七年露の玉の緒の今まで切れざるも不思議なりしかるにおのれが不運を科なき草木に及ぼすことの不便なりけり

なでしこやまゝはゝ木々の日陰花　一茶

さるべき因縁ならんと思へば苦しみも平生とはなりぬ

朝夕に覆かふさりし目の上の
辛夷も花の盛りなりけり　一茶

其引

子はかりの蒲團に蘆の穂綿哉　山崎宗鑑
竹の雪はらふは風のまゝ子かな　正勝
うつくしきまゝ子の顔の蠅打ん　江雪

貞享四年卯歌仙

蔦の細目をゆるされし文
まゝ子をもいたはる嫁の名をとげて　芭蕉

祇園拾遺

下部ひそかに首埋めける
繼母の叉口はしる夜の雨　未達

おく五歌仙

山木かくれて草に血をぬる　芭蕉
わつかなる世をまゝ母に僞られ　風流

小さき土鍋のありけるを我腹の子にとらせてとらせざりければ鶯の鳴くを聞てよめるとなん

鶯よなとさはなきそちやほしき
小鍋やほしき母や戀しき　貫之娘

親のない子はどこでもしれる爪を咥へて門にたつと子供らに唄はるゝも心細く大かたの人交りもせずしてうらの畠に木萱など積たる片陰に蹲りて長の日をくらしぬ我身ながらも哀れなりけり

我と來て遊へや親のない雀　六歳彌太郎

昔大和國立田村にむくつけき女ありてまゝ子の咽を十日ほどほしてより飯を一椀見せびらかしていふやう是をあの石地藏のたべたらんには汝にもとらせんとあるにまゝ子はひだるさたへがたく石佛の袖にすがりてしか／＼ねがひけるにふしぎやな石佛大口明てむし／＼喰ひたまふにさすがのまゝ母の角もほつきり折てそれより我うめる子とへだてなくはこくみけるとなん其地藏ぼさつ今にありて折々の供物たえざりけり

ほた餅や藪の佛も春の風　一茶

（二〇）

こぞの夏竹植る日のころうき節しげきうき世に生れたる娘おろかにしてものにさとかれとて名をさとゝよぶことし誕生日祝ふころほひよりてうち〳〵あはゝ天窓てん〳〵かぶり〳〵ふりながらおなじき子供の風車といふものをもてるをしきりにほしがりてむづかりければとみにとらせけるやがてむしや〳〵しやぶつて捨て露ほどの執念なく直に外のものにこゝろうつりてそこらにある茶碗を打破りつゝそれもたゝちに倦て障子のうす紙をめり〳〵むしるによくした〳〵とほむれば誠と思ひきやら〳〵笑ひてひたむしりにむしりぬこゝろのうち一點の塵もなく名月のきら〳〵しく清く見ゆれば迹なき俳優を見るやうになか〳〵こゝろの皺を伸しぬ又人の來りてわん〳〵はどこにといへば犬に指しかあ〳〵はどこにといへば鴉に指さすさまロもとより爪先まで愛敬こぼれてあいらしくいはゝ春のはつ草に胡蝶のたはむるゝよりもやさしくなん覚え侍るこのおさな佛の守りし給ひけん迨夜の夕暮に持佛堂に蠟燭てらして鈴打ならせばどこに居てもいそがはしく這よりてさわらびのちいさき手を合せてなんむ〳〵と唱ふ聲しほらしくゆかしくなつかしく殊勝なりそれにつけてもおのれ頭にはいくらの霜をいたゝきひたひにはしは〳〵波の寄せて來る齢にて彌陀たのむすへもしらでうか〳〵月日を費すこそふたつ子の手前もはづかしけれとおもふと其坐を退けばはや地獄の種を蒔てひざにむらがる蠅をにくみ膳を巡る蚊をそしりつゝあまつさへ佛のいましめし酒をのむ折から門に月さしていと涼しく外にわらべの踊の聲のすればたゝちに小碗なげ捨てかたいざりにいざりいで聲をあげ手眞似してうれしげなるをみるにつけつゝいつしか彼れをもふりわけ髪のたけになしてをどらせて見たらんには二十五菩薩の管絃よりもはるかにまさりて興あるわざならんと我身につもる老をわすれてうさをなんはらしけるかく日すがらをしかの角のつかのまも手足をうごかさすといふことなくてあそびつかれるものから朝は日のたけるまでねふるその中はかり母は正月と思ひ飯焚そこらかたづけて團扇ひら〳〵汗をさまして閨に泣聲のするを目のさめる相圖とさだめ手かしこく抱き起してうらの畠に尿やりて乳房あてがへばすは〳〵吸ながら胸板のあたりを打たゝきてにこ〳〵わらひ顔をつくるに母は長く胎内の苦も日々襁褓の穢らしきもほと〳〵わすれて衣のうらの玉を得たるやうになでさすりてひとしほよろこぶありさまなりけらし

蚤の跡かぞへながらに添乳かな

よりより思ひよせたる小兒をも遊びつれにもとてこゝに集りぬ

柳からももんぐあと出る子哉

蓬萊になんむ〳〵といふ子かな

年問へば片手出す子や更衣

小兒の行衛を祝して

たのもしやてんつるてんのはつ袷

名月をとつてくれろと泣子かな

子寳かきやら〳〵わらふ榾火哉

あこか餅〳〵とて並べけり

妹が子の脊負たなりや配餅

餅花の木蔭にてうちあはゝ哉

涼風のふく木え縛るわか子哉

わんはくや縛られなから呼螢

其引

あゝ立たひとり立たることし哉　貞徳

子にあくと申人には花もなし　芭蕉

袴着や子の草履とる親心　子堂

花といへもひとついへやちいさい子　羅香

春雨や格子より出す童の手　東來

早乙女や子の泣く方え植て行く　薬捨

折とても花の木の間のせかれ哉　其角

箸とり初めたる日

雞啼くや赤子の頬をすふ時に　同

男にきらはれて親のもとに住けるにおのか子のはつ節句見たくも晝は人目もしけければ

去られたる門を夜見る幟かな　よみ女しれす

子を思ふ實情さもと聞えて哀なり猛きものゝふのこゝろをやはらくるとはかゝる與こゝろをいふなるべしいかなる鬼男なりとも風の便りにもきゝなはいかてかふたたび呼びかへさゞらめや

所有畜類是世々親族となん

親をしたひ子を慈む情何そへだてのあるべきや

人の親のからす追けり雀の子　鬼貫

夏山や子にあらはれで鹿の啼く　五明

負て出て子にも鳴する蛙哉　東陽

鹿の親笹吹風にもとりけり　一茶

小夜しくれなくは子のない鹿に哉

子をかくす藪の通りや啼雲雀

(一一一)

樂み極りて愁起るはうき世のならひなればまたたのしみと半ばならざる千代の小松の葉ばかりの笑ひさかりなるみどり子を寢耳に水のおしくる如きあら／＼しき痘の神に見こまれて今水膿のさなかなれはやそら咲けるはつ花の泥雨にしほれたるにひとしく側に見る目さへくるしげにぞありけることれも二三日經たれば痘はかせ口にて雪解の峡土のほろ／＼落るやうに瘡蓋といふものとれば祝ひはやしてさん俵法師といふものを作りて笹湯浴せる眞似して神は送り出したれどます／＼よはりてきのふよりけふは頼み少なく終に六月廿一日の蕣の花と共にこの世をしほみぬ母は死顔にすがりてよゝ／＼と泣もむべなるかなこの期に及んでは行く水のふたゝび歸らす散花の梢にもどらぬくひことなどゝあきらめ顏してもおもひきりかたきは恩愛のきづななりけり

露の世は露の世ながらさりながら　一茶

去四月十六日みちのくにまからんと善光寺まで歩

みけるをさはることありてやみぬるもかゝる不幸あらんとて道祖神のとゞめたまふならん

其引

子におくれたる頃

似た顔のあらは出て見んひと踊　落梧

はゝにおくれたる子の哀さに

おさな子やひとり飯くふ秋の暮　尙白

娘を葬りける夜

夜の鶴土に蒲團も着せられず　其角

孫娘におくれて三月三日野外にあそふ

宿を出て雛わするればもゝの花　猿雖

娘身まかりけるに

十六夜やわか身にしれと月の缺　杉風

猶子母に放れしころ

柄をなめて母尋ぬるや塗うちは　來山

愛子を失ひて

春のゆめ氣のちかはぬもうらめしい　同

子をうしなひて

蜻蛉つりけふはどこまで行たやら　千代

やんごとなき人々の歌もこゝろに浮ぶまゝにふとしるし侍りぬ

哀なり夜半に捨子の泣聲は
はゝに添乳のゆめや見つらん　よみ人しれず

捨て行く親したふ子のかたいさり
世に立かねて音こそなかなれ　爲家卿

人の親のこゝろの闇にあらねとも
子を思ふ道に迷ひぬるかな　兼輔卿

むらさきの里ちかきあたりとある門に炭團ほどなる黑き巣鳥を捕りて籠ふせしてありけるにその夜親鳥らしく夜すからその家の上に鳴ける哀さに

子を思ふ闇やかあいい／＼と
聲をからすの鳴あかすらん　一茶

盜人己か古郷にかくれて縛られしに

業の鳥罠を巡るやむら時雨

御成場所に鳥ともの餌蒔をしたふ不便さに

人睨き鶴よどちらに節が當る

節の下に母の乳を呑む鹿の子哉　立志

さすかのさつ男も髻きりしはかゝる折になんありける

（二一二）

おのれ住る郷はおく信濃黒姫山のたら〳〵落しの小隅なれか雪は夏消て霜は秋降る物から橘のからたちとなるのみならず萬木千草上々國より移し植るにこと〳〵く變せざるはなかりけり

九輪草四五輪草で仕舞なり　一茶

（二一三）

他力信心〳〵と一向に他力にちからをいれて頼みこみ候輩はつひに他力繩に縛られて自力地獄の炎の中へぼたんと落入候其次にかゝるきたなき土凡夫をうつくしき黄金のはだへになし下されと阿彌陀佛におしあつらへに誂はなしにしておゐてはや五體は佛染し成りたるやうに惡すましたるも自力の張本たるへく候間て曰くいかさまにこゝろ得たらんには御流義に叶ひ侍りなん答て曰へ別に小むつかしき子細は不存候たゞ自力他力何のかのいふあくたもくたをさらりとちくらか沖へ流してさて後生の一大事は其身を如來の御前に投出して地獄なりとも極樂なりともあなた樣のおはからひ次第あそばされくださりませと御頼み申すばかりなりかくの如く決定しての上には南無阿彌陀佛といふ口の下より慾網をはるの野に手長蜘蛛のおこなひして人の目を霞め世渡る雁のかりそめにもわか田へ水をひく盗みこゝろをゆめ〳〵持べからずしかるときはあなかち作り聲して念佛申すに及ばずねかはずとも佛は守りたまふべし是即ち當流の安心とは申なり穴かしこ

ともかくもあなた任せの年の暮　五十七歳　一茶

文政二年十二月二十九日

（二一四）

むかし清き泉のむく〳〵と涌出る別莊を持ちたるものありけりたやすく人の汲みほさん事を恐れて井筒のめぐりに覆におほひを作りて僣年を經たりけるにいつしか垣も朽ち水も惡くなりて茨おどろおのかさま〳〵に茂りあひ蛭子子ところ得顏にをどりつゝ遂に人しらぬ野中のうもれ井とぞなれりけるこの道にこゝろさすも又さの通りよく〳〵魂の膜を洗ひつとめて心の古みを汲ほさゞれは彼の腐れ俳諧となりて果は犬さへも喰はす成ぬべしされどおのれが水の臭きはしらで世をうらみ人をそしりてゆく〳〵理屈地獄の苦ひまぬかれざらんとするをなげきて籠山の上人年かしこくこの俳諧をいとなみ日夜そこにこぞりておの〳〵練出せる句〻の決斷所とす春の始より入來る人人相かまへて其場のかれの正月言葉なとかならずのたまふまじきものなり

文化七年十二月日

しなのゝ國乞食首領　一茶書

（二一五）

一日の夜のことかとよ小古間坂といふさかのかたはらにいつくの人にかありれん榛の木のやうに幾ところもきられて芒を終の敷寢としてもとの雫と消え果てぬあはれ此者あたはぬ財をかすめて神のとかめかうむりしか又えならぬ色に迷ひて人のうらみ重なりしか目もあてられぬありさまになん

毒蟲もいつか一度は草の露　一茶

文化五年八月二日

（二一六）

上野なる清水の糸櫻はいつか青葉となりて隙明き顏に打戰く散るこそ花のめでたけれといへるもさることなからまたしたに來る人も多かるべきに氣短なる花のちりやうかなとつふやきつゝ舞臺にそ

ふて名殘を惜む

今日は町隣なる麻美と前日より約し置きけるに彼れさはりありて止みぬさはとて翌日の命まつものかはとたゞ一人來りしに幸ふところに五元集といふものゝあれはこれ究竟の句相手なり

小坊主や松にかくれて山さくら　其角

小坊主や親の供して山さくら　一茶

見ぬ世の人を友とすといふ吉田の法師がかけるに倣ひて今日は晋子か櫻を見んとして酩酊せは今日一日の一興なるべし秋色か櫻余所に見てやみなんも殺風景なればとて其邊りに吟ふ落花片々としてひたすら春の有樣を見する夫さへ悲しきに木の間の鐘は無常と告げてしきりにうしろ寒く覺えて懐舊の片言をなして過る折から何處よりか來りけん頭は灯心を束ねたらんやうにていろは橋木の吹だされしごとくなる老女が頤に杖して今年を花の見おさめなどゝ話して樂しげに何か謳ふ口つき江口の君がなれの果が姥が再來かとも怪しみけるにやがて我ずし捨てたる句に脇したりといふ

古櫻花の咲とて咲にけり　一茶

いたゞく謡のはるの夕暮　老女

足引の山鶯に宿かして　供ノ女

かく言ひ終りて角田川にて逢んなどゝ二人ともに歸りぬおのれ男には生れたれとかゝる馴々しき業はおもひもよらずまことに彼の長松下に世上の人を看他すといふ有樣句の善悪は時によるべし其氣象をめてゝ爰にしるしぬ

上行堂は去年鎚もて人を害ひの曲物の住しところと思へばさすがの碧殿と恐しき樣に覺えてそこ〳〵に拜みて過ぬ

柵結廻して人を禁する老木あり

夜々天狗のをとるところといふ

祟りなす杉はふとりてちる櫻

咽禰さんと藤棚の下に便る安房上總一目に霞みて山第一の奇絕なり下なる町處々事はしめに立たり古賀の竿の先に吹るゝは其儘に時雨まつかと覺えてをかしく家々相風は春風に飄りて多少の樓臺雲に聳えて又なく賑ふ趣長安の春といふとも御代の豊饒なるにはやはか勝るへきとおの〳〵口々にのゝしる

ちる花を脇になしてや江戸最負

こゝろを轉して淺草待乳山に登るこゝに隠家の茂睡か礎はかれあくまて閑に住なしたらんは歌のさまにしられて昔したはしく

庵崎や古き夕をはるの雨

橋場の渡に至る山を押出したるやうなるものあり是おほやけの御船といふ隨齋召殘されし木陰と見えてさひしけなる女と清右衛門といへる人とから破籠なと守りてありけるに

牡丹餅やあとの祭りに櫻哉

さく花にあとの祭の木陰哉

角田堤

櫻木や花の威をかる里の人

里人の花の威をかる櫻哉

三つはかりなる兒の母の懐にありけるが損ンしてはよゝと泣ぬおのれ傍の叢陰にあれは我形のことやうなるに恐るゝにやさあらは爰を退かんと云ふに何さまさせる物おとろきならはまたしもなるにあの花折りてのゝ樣に奉れとて今朝から願ふて泣つかれにすや〳〵と寢たりしに今覺めて又むつかるなりされど爰はおほやけの櫻木一枝ををらば一指を切るの刑に行はれんことの恐ろしくはや〳〵歸らんといふ實に〳〵蘭は二葉より芳しく未だ黒白のけちめも分ぬむつきの上にありてかゝるやさしきねきことこそ彼の貌につけたき櫻の花との給ひしにたくひられて尊くありかたく末たのもしきまこゝろにぞ有けるこれをおもへはおのれ半死白頭の齢ふるに朝々の茶の手向さへ怠りかちにして貪瞋癡の病は目はさかしく翌の父の逮夜さへ忘るゝていたらく阿鼻大城の苦もうす氣味惡く又は嬰兒のこゝろさしもはつかしく佛前に灯をとほし侍るこれをさへ長く修せんとはおもはれさりけり

白露にお花の種を蒔はやな

(一一七)

國原やそのはゝならぬはゝきゝに住馴し伏家を掃出されしは十四のとしにこそありしが巣なし鳥のかなしみはたゝちに塒にまよひそこの軒下に露をしのきかしこの家陰に霜をふせきあるは覺束なき山に迷ひ聲をかきりに呼子鳥答ふる松風さへものさびしく木の葉をしき寢に夢をむすひ又あやしの濱邊にくれは鳥人もなきさの汐風にからき命を拾ひつゝくるしき月日をおくるうちにふと諸々しき夷振の俳諧を囀り覺ゆ折から敷島の道の盛なる時に大木の陰頼母しく立寄て十日廿日の勞を休むるに至れとこれもおのが家にあらねはよきに惡きに心をつかふものから今まてに兎も角もなるべき身を不思議に今年六十一の春を迎ひぬるとは實に〳〵盲龜の浮木にあひたる喜ひにまさりなんされは無能無才も中々齢を延る藥になんありける

春たつや愚の上に又愚にかくる

(一一八)

上總國百首の郷は東南に山連なり西北に海ひらけて防人の備へに究竟の地なりとてこの度陣屋いとなむ繩張といふことあり其畠の瘤のやうにさしいてゝ妨なる小家あり主と見えし翌日をもしらぬ老婆ひとり麻をうみて居たりけるを奉行人深く憐みて汝子ありやといへは老婆いふをのこひとりもちたりけるがいつのとし古郷をよそにふりすてゝ今は江戸の本所とやらんに人の髪結ふわさをなすよし風の便りにきゝ侍るとはかり泪はらひ〳〵答ふさあらばその男には永く髪結司のゆるし文とらせん汝には生涯二人扶持といふを申下して身をやすくすくさせんあさ糸の細き稼をやめて遲々たる春の日にはちりかふ花に無常を觀し寥々たる秋の夜にはかたふく月に西方をねかひ明暮こゝろ任せに菩提の種を蒔なはなんぼうたのしからん汝かこの家このかまへのさはりになることそ天より汝に幸下し給ふなれと〳〵爰をしりそきあしこにうつれよといふに老婆むく〳〵とはらたゝしきそふりして灯心つかねたらんやうなる首打ふり〳〵いふやうよくもあさむきたまふものかな是はわらはが先祖よりいく世ともなく住ふるして大事の〳〵栖なれはたとへ黄金星にとゝく程な給はるとも我目には一椀の麥飯にしかすとこそ思ひ候へたゝ〳〵このはにふの小屋こそさうなき寶なれよしや命斷るとも外へは行らしと手すり貝をつくりてなかねはかりに申せは奉行人の慈悲も今はほとこすへきよすかなく老婆のちになくいそとふたゝひ繩はりしてつひにその家をよきて地とりなりぬあはれ月日のてらすかきり露霜のおつるところに生とし活るものたれか國命そむきたてまつらんしふときそこの者にぞありける

月さへもそしられたまふ夕涼

(一一九)

上野の麓の蝸牛のから家かりて露の間の夢のむすひどころとすきのふあたり住侘たる人のなせるわさにや垣の蕣のそれなりに枯れてその實はほろほろ落たりいく人の泪をかけし種果とも思はれて秋に立まさりて哀なり門には土をならして菜のやうなるもの蒔置けるが雪の片隅にほや〳〵と青みぬこれ必愛度はるをむかへ餅祝ふべき旦の料ならんか壁には七福即生の守り張重ねて盗人の難を防ぎ竈は大根注連といふものを引はへて回祿を逃れんとす荒神松はいまた野のいろなから横さまにこけたりみなたゝ行末いつまてか住果んあらましぞと見ゆるも今は雲にや跡をくらましけん山にや影を隱しけんすへていつこかつひの栖ならんかくいふ我もしばしが程に又人にかくいはれんこと思ふのみ

身に添ふや前の主の寒さまて

（三〇）

閏二月二十九日といふ日雨も漸怠ぬれは朝とく頭陀袋くびにかけて足ついて例の角田堤にかゝる東はほの／＼しらみたれど小薮小家はいまだ暗かりきしかるに上のならせたまふにや川のおもてに天地丸赤々とうかめて田中は新に道をつくりみそ塀はこと／＼く板を渡しておの／＼御遊びを待つと見えたり誠に無心の草木にいたるまで春風にふしつゝめてたき御代をあふくとぞ覚え侍る

五百崎や御船をがんてかへる雁

（三一）

立よらは大木の下とて大家には貧しき者の腰をかゝめておはむきいふもことはりになん爰の諏訪宮に大きさ牛をかくす栗の古木ありてうち見たるところは葉一つもあらさりけるに其下をゆききする人日にとり得さるはなかりけり

（三二）

十六日の晝頃きせるの中塞りてければ麥藁のやうに竹を削りてさし入おきたりけるに中につまりてふつに抜けす竹爪の先僅にのかるゝ程なれはせんすへきやうなく欠殘りたる奥歯にてしかと匡て引たりけるに竹はぬけずして歯はめり／＼と抜け落ちぬあはれあか佛と頼みたる歯なりけるにさうなきあやまちせしものかなかの釘ぬくものもてせは力もいらずすら／＼とぬけぬべきを人の手かるごとのむつかしくしかなせるなりこの寺は廿年あまり折ふしに宿りて物事よそ／＼しくはあらねど夫さへこゝろのまゝならぬ物からかゝる憂目に逢ぬまして四十餘年の草枕猶のふす草をかたしきて夜通し魂消るおそれをしのひ嵐ふく舟を宿として庇の濱厨に身を浸すうさを凌ぎたま／＼花さく春にあへはいさゝか憂を忘るゝに似たれどほと／＼露ちる秋の行末をかなしむ重荷負ひて休らふごとく

樂のうちに苦み先だつ其折々は齢のひたものちゞまり行く事を今かたわれの歯を見るにつけて思ひしられぬいつの日むしろ二枚も我家といひて人に一領ほどこさるゝ身となりなは是即ち客樂世界なるべし

（三三）

山下常樂院に人々こぞりて尊む佛おはしけるがことし千百年の供養なりとて讀經いと殊勝なりかくふつゝかなるおのれさへすくせの結縁うすからざるにやかゝる時に生れ逢ふことのうれしくしばらく隨喜の泪をはらひぬ其かみ其角六あみだかけて鳴くらんほとゝぎすとありしも今日のやうなる折にやあらん是さへ今は百とせのかたみとなりぬかくいふ今日もいつか又むかしとならんされど我後の世をたのみおく軒端の梅さへ持たぬ境界御佛かならず見捨たまふなよ

花桶に蝶も聞かよ一大事

（三四）

本堂の柱に長崎の舊友たれかれ八月二十八日詣るとしるしてありけるに今は三十年あまりのものならんおのれ彼の地にとゞまりて一ッ鍋の物くひて笑ひのゝしりむつまじき人達なりあはれきのふ參りたらんには面會して越方語りてこゝろなくさまんものを互ひに四百里の道程へだゝりぬればふたゝびこの世には逢ひがたき齢にしあればしきりにしたはしくなつかしくなん

近づきの樂書見えて秋の暮

（三五）

木母の鐘曉を告げて老法師が手爐の灰うつくしくなしつゝ淋しさに堪たる人ならば烟草の火ほどこさん面つきしてあたら櫻を誰にか見すべきと一人言いふさへいかにもたゞ人とは見えざりけり其處に暫時やすらひけるうち又寢亂髪の塵もはらはて

やうじといふものに歯をすりつゝ塗下駄から〳〵ならしてあちこちさまよふさま男十人持たらんやうにいろ〳〵しくぞ思はれける又坂の下より男五六人嚢たどといふものを拐のあとさきに結びつけて萬西鳥の啼くやうにはなしても来りけるが程なく木蔭に立ちかゝりて女のかたはらすきがてに山の神けしかる朝起よな雨もやふらんなどゝさゝやきけるを女はやくも聞とがめておのれいしくもいひつのるものかな今一度さなのゝじりぞ遮首捻ちふせ遮足ねぢ折らんなど女に似気なき悪口も花の雪のちり〳〵にふきちりて心にとめるけはひもなく是等も木の間の春景しきとはなりぬ

　下々に生れてさくら〳〵かな

(三六)株番序

文化九年正月十五日下總國相馬郡布川の郷なる月船亭に日待といふことをして人々こぞりて夜の明るをなん待ける折からさる生かしこき人のいふことしいなりの祭は丙午といふにて大火地火にあたれり六十年に大凶日なれば其日晩より火起りて其けぶり大きくなりてその災野邊の駒に及ぶおそろしき日なりつゝしむべしと事觸が告たりしとかたりぬ又隅の方より白雪の土に汚れしやうなるかしらつきしておこつきたる叟のやをらよろほひ出ていふやう雲をつかむやうなる根なしことをゆめゆめまことゝしたまふなそれは事觸等がそらよみと覺ゆ大火には侍らじ天火なるべしことしの初午は天火ことの外あたゝかになりてかすみかくれの桃柳おのがさま〳〵いろをあらそひそのたのしひ野邊の春駒におよぼしゆめに見てさへよい氣色ぞとわれ〳〵ごとき老かゞまりたる身もめでたき時ながらへてうどんげの花まつやうに今からたのもしく思ふなりそこ逢も火の用心はしかるべしさらにおそれはあらじといふにあるし手ばやく暦投出して是見られよといふ叟目しるふき〳〵いく度もすかし見るにしかいふごとく大火なりしばらく小首

かたぶけていふやう昔長頭丸の句に螢もや暦にはなき天火地火とこそつゞけ是はいせ人のひかもしなめりかくては上下とゝのはずと暦をたゝめば人々同じ聲にてまさしく栗の花が咲ても木は楢の木としひことのみいひぞ上萬乘の君より下乞食に至る今天下の規矩となすもの露おろかやあらんましてそなたのやうに衣のきたなげなるものゝ及ぶことにやはときやら〳〵と笑ひわら〳〵とのゝしりあへり程なく来見寺の鐘曉を告げて布佐臺の鳥かは〳〵と啼渡るおの〳〵ばら〳〵歸りけり是萬人の定めたる大火によらんや一人の極めたる天火にしたがはんや思ふにふたつながら非なるべし前の日しか〳〵のことあればかならずあらんと思ひこみて空しき株を守る證にぞありけるされば我〳〵がたま〳〵練出せる發句といふものもみづから新らしきとほこれは人は古しとあざけるふたたびよく〳〵見れは人の沙汰する通りいかにも古くほと〳〵おのが心にもうんじ果三日ばかりも口を閉れば是又木偶人のごとくへんてつもなくよし〳〵汝はなんじをせよ我はもとの株番

(三七)憐狂人

十二日まれの晴天なれば籠山を出てあたご町といふところを過るにいまだはたちに足らぬと見ゆる女の荒布のやうなるものを身にまとひ古わらぢ馬のくつのたぐいいくつともなく腰にゆひつけつゝ黒髪に箸あるひはきせるなどさしてかくすところもかくさずあらぬさましてさまよふものあり人に問へばおすは氣違ひとてこの里のものなるとぞ何として佛神に見はなされたるや盛なる菖蒲の泥をかぶりて折人さへもなく思はれてあはれなり汝父やあらん母やあらん

(三八)

布施東海寺に詣けるに鶏ともの跡をひたひぬることの不便さに門前の家によりて米壹合ばかり買ひ

て蒲たんぽゝのほとりにちらしけるをやがて仲間喧嘩をいくところにもはじめたり其うち梢より鳩すゞめばら／＼と飛來りてこゝろしづかにくらひつゝ鶏の來るとき小ばやくもとの梢へ逃去りぬ鳩雀は賦合の長かれかしとや思ふらん士農工商その外さま／＼のなりはひみなかくの通り

米蒔も罪ぞよ鶏は賦合ぞよ　一茶

(三九)跡祭序

ひかし／＼むつまじき兄弟ありけり親のわかれいたくかなしみて一人の塚の前に萱草を植いまひとりは紫菀を植たりけりしかるに萱草を植たるものは切墓のぶつゝりと忘れてふたゝび足を運ぶわざもせざりけるとぞ紫菀を植たる者はます／＼いますときのやうに朝夕かゝさずしんじちにまつりければおのづから塚のこゝろにかなひけんほしきとおもふ黄金しろかねなど風の木の葉を吹つけるごとくざく／＼たまりつゝのち／＼はかぎりなく家さかへけるとかやかばかりの草さへ人のこゝろを狂はするものからよく／＼目利して植へきものになんありけるされば我友魚淵筑紫高良山なる桃青靈社を勸請して歌うに任せてみすかきに木槿を植まはしけるを神慮にやかなひけんぼちや／＼としけりてまたその花にひとしく日々にあらたに蕉風吹きおこりぬれば主はます／＼月々のまつりかゝさずしんじちにとりおこなふもけふもその祭日なりけり

法楽
御寶前に掛たてまつるはつしぐれ

(四〇)俳諧寺の記

沓芳しき楚地の雪といひ木ことに花ぞ咲にけるなどゝほんさうめさるゝは錢金ほどきたなきものあらじと手にさへふれざる雲の上人のことにして雲の下に又其下の下下の下國の信濃も信濃おくしなのゝ片隅黒姫山のふもとなるおのれ住る里は木の

葉パラ／＼と峯のあらしの音ばかりしてさびしく人めも草も枯果て霜降月のはじめより白きものがちら／＼すれば悪いものがふる寒いものがふるとロ／＼にのゝしりて

はつ雪をいま／＼しいといふべ哉

三四尺も積りぬれば牛馬の往來はたりと止りて雪車のはや橇の手はやく年もくれば鳥あやしき菰にて家の四方をくるみまはせばたちまち常闇の世界とはなれりけり晝も灯にて糸とり縄なひ老たるは日夜榾火にかぢりつくからに手足はけむり黒み髭はとがり眼は光りてさながら阿修羅の體相にひとしく餓貌したる物貰ひ蚤とりまなこの掛乞のたぐひ草鞋ながらいろりにふみこみ金は歯にあてゝ眞僞をさとり葱は竈に植りて青葉をふく都て暖國の手ぶりとは事かはりて更に化物小屋のありさまなりけり

羽生て錢が飛ぶなり年の暮
未だ半出來ながら御許可被下候

春甫様
掬斗様
素鏡様
雲士様
　一茶

(四一)

昔うつくしき鳥のありけるこれを養ふに酒食の美味をあてがふ鳥は食も呑もせずして三日にして死にきとかやこれ全く人をもてなすやうに愛せばなりと南花老人もいへりされば事／＼好き／＼ありて心ひとしからず我友桂國ひとつの猫をめでゝ夜は脇にあたゝめ晝はふすまの上に撫る然るにひたすら啼て止まずともすれば逃げかへらむとす或時鰯もてあやしげなるつぐらといふものを作りてあてがふに漸／＼氣にやかなへけんいとこゝろよげにすや／＼と寢入りぬ

早稲藁や猫から先づは安堵顔

(四二)

信州善光寺の商人の曰く今日は越後今町の沖にて漁あらんといへば三日ばかりを經て必ず魚荷所せき迄につゞきて來ぬ今日はなしといへばはたしてさなりこれ其道に志深きものから二十里を隔たりたる彼の地に魂もや通ふなめりと友人柳齋常に語られ侍りきされば立砂翁と今は此世を隔てたれど我志の彼の土に往來して知りけるにや又た佛の呼寄せ玉ふにや十三回忌といふ今日はからすも巡りあひぬることの不思議さにそゞろに袖を絞りぬ

何として忘れませうぞ枯芒

(四三)

上總國富津の浦にみゝつ貝といふかひありけり日々幾船ともなく取りて老若男女群りて小刀やうのものにて中の實をほり出しつゝ石などの玉のやうに乾かためて唐の問屋とやらんに送るとて其殼そこら散りはひありけり赤きはつゝじの咲亂れたるが如く白きは梅の咲ちるにひとしくほと／＼かすみ棚引く春の山邊に似たりこのものたま／＼木曾山の片邊りなどに持ちつたへたるを見るにひとつ／＼綿につゝみ深く秘めおきてかりそめの戲に箱開くことなく雛の日又は晴／＼しき祭やうのときいざと取出して賓客もてなす第一の實とす然るに此處にては此殼のせんすべなく境目／＼の垣隙に富士のやうに積み累ねてをり／＼あらしの吹き減らすときをまちあるひは大道にしきちらして牛馬の蹄にふみくだかしむ是れ全く一ッのものながら山奥にては寶と尊み海邊にて芥といやしむ實に崑山の麓にては玉をもて鳥になげうち彭蠡の濱にては魚をもて犬を養ふとかや是をおもへば三千世界の中には黃金の捨場にもちあぐむ國もなどかあらざらん

貝がふる／＼てふ白雨を
ぱら／＼海へ捨るむら雲

(四四)

下總の國相馬郡藤代の里に百姓忠藏といふものあり朝夕のけぶりも糸筋のかすかにくらして夫婦人に雇はれて老母のこゝろをなぐさめける其中に娘ひとり持たりけり貧の家のならひ子守りといふものもなければ土べたに這ひ廻りて草花をとらへてあはゝをならひ鳴子のうごきにてうち／＼を眞似つゝそよ吹く風の草木を友に育ちけるが今年八ッになんなりける何にあやかりけん其娘たゞならぬ身となりてかりそめのなやみもなく九月三日といふに彼の桃太郎のやうなるくり／＼したる男をなんうみたりける其日より乳の出ること犀口の栓ぬきたらんやうに筵の外までとばしるものから父母のよろこびはさらなり界隈のものも打むらがりていまだ井筒のたけにも足らでかゝる目出度きためしは今世にくらぶるものあらじ永祿のむかしを目前に見るこゝちすとてとりはやしつゝ村より村へ咄しつぎ言ひふらしければやがて領主聞しめしてその男子の名をつけ下さるゝとなん沙汰しはべるかゝりしものから野もせ山もせ其うはさひろごりて誰しらぬといふものもなくて人に人かさなりてその家を尋ね訪ふものから祝ひにてせる產衣又は百文あるは五十ばかりのおひねりといふもの雪の降りたるやうに積み累ねてところ／＼に山をなせり二親久しき貧の病も忽ちに忘れて今は心のまゝに老母をやしないけりげに／＼この家の老母を救はんとて救世觀音かれが子と現し玉ふにや是を思へば切る竹の節ごとに黃金のこぼれ出てしといふ古きものがたりもさら／＼いつはりにはあらざるべし是れうきたる說にあらず市川の月船といふもののふわざ／＼見にまかりけるにその娘露ほどもはづかしき氣色なく手あそびの偶人などうみたるやうに人々に見せけるとぞ

下總國相馬郡常州土浦

土屋治三郎殿領
藤代驛
百姓　久右衛門
忰申三十九　忠藏
同三十妻　よの
同五十七母　かな
同八歳娘　とや
九月三日生男子　久太郎

（四五）

貧しきものゝ子をやしなふには湯の湧く所しにくはあらし夜のほの〳〵明けて鳥の聲と等しくかば起きて十はかりなる兒の兄は弟を負ひ姉の妹を抱きつゝ素足にて門を出れはそれに引き續きて迹からも其迹からも走り〳〵て湯桁にとひ入りつゝ今も冬素雪のころさへ丸裸にて狂ひ育ちに育つものからおのづから病なくふとりたくましく見ゆさるからに其親〳〵の衣着せる思ひもうすかるべし

　子供等か雪食ひなから湯治かな

（四六）

柳藏といへる曳は又たなく俳諧を好みて昔ねく人にも知られておのれもよそしき交りならざりしか白露のほろりと消てより三とせはかりもすきぬ其子今井磯右衛門と名乘りておほやけの政たゝしく松柏の末頼母しくよろづ親におとらさりければ獅子の威風凛々としてこの地には向ふ擊もなく御前のきりものなりしが何の故ありしやらむことし八月廿九日といふに數代の代官職削られてたゝ人とはなり下りぬきのふまては飛ふ鳥おそれて落ちし勢もけふは追鳥あなどりて通けぬ衰ひとはなりし一盛一衰これ春秋のならいおどろくは愚なれと虎嘯きて風起りしも見たりしものから鼠の穴うき世の中のありさまいたはしくそ覺え侍る

　鳴立つや門の家鴨も貰ひ啼

（四七）

女子と小人は養ひかたく遠さくれは妬み近つくれは不遜と溜息つきて聖人すらあくみ玉ふと見えたりまして末世に於てをや老妻菊女といふものは片葉のあしの片意地强く身の覺悟になるべきことを人の敎ふれはうはの空吹風に聞きなして露ほとも守らさる物から小兒二人ともは非業の命うしないぬこの度は三度目に當れは又前の通りならんといとゞ不便さに磐石の立てるにひとしく雨風さへ事ともせすして母に押つぶさるゝことなくうか〳〵長壽せよとてさゝれ石の石太郎となん呼ひける母に示していふ此さゝれ石百日餘りも過きて巖となるまては必よ背負ふことなかれと深くいましめけるをいかにしたりけん生れて九十六日といふ今日朝とく背に負ひて負ひころしぬあはれ今まて嬉しけに笑ひたるも手のひらかへさぬうちに苦々しき死顏を見るとは思へは石と祝したるはあたし野の墓印にそありけるかく災ひにわさわい累るはいかなる過世の業因にや

　あら玉の春の始の惡日かな

かゝみ開きの餅祝ひして居ゑたるか未た烟りのたちけるを

　最う一度せめて目を明け雜煮餅

一七日墓參

　湯炎や目につきまとふわらひ顏

正月十七日　　九十九齡　一茶

　むごらしやかはいやとのみ思ひねの
　眠る隙さへ夢に見るかな

（四八）

今年八月十四日老婆三十三回忌なれは露を分けて遙々來る其甲斐ありて七月九日取り越して勤むとなむ沙汰しけるおのれ三歳のとき母の親は身まかりぬ老婆不便かりて襁褓の汚らはしきもいとはすあけくれ背に負ひ懐に抱きて人に腰を曲けて乳を

貰ひ又首を下けて薬を乞ひつゝ育てけるに竹の子の憂き節しげき世の中も知らてつか〱と伸ひける然るに八歳といふ時後の母來りぬ其母荚のいらいらしき行跡山おろしの烈しき怒りをも老婆袖となり垣となりて助けましませはこそ頭に雪をいたゝくまて露の命消え殘りて古郷の空の月をも見め誠に今日の法筵に逢ふことのうれしく有難くかくいふ今日をさへ老婆の守り玉ふかや

秋風や佛に近き年の程

苦の娑婆と艸さへ伏すか秋の暮

苦の娑婆をつく〱法師〱哉

（四九）勸農詞

風流を樂む花園ならて後の畑前の田の物作りに志し自から鍬を採て耕し先祖の賜と命の親に懇を盡し吉野の櫻更級の月よりもおのか業こそ樂けれ朝夕心をとゝめて打むかふ菜種の花は井出の山吹より好しく麥の穗の色は牡丹芍薬より勝こたへありと覺ゆ朝顔より夕顔こそよけれ萩きくよりも芋牛蒡に味あり澤て花紅葉より栗柿は實の植木なり稻の穂並みの賑はしく菊の花より馥薫るこゝちして粟穗の莠野邊の虫の音聞くか面白く遠き名所舊跡より近き田圃の見廻りか飽かす松島鹽竈の美景より飯竃の下肝要なり上作の名劒より鎌鍬は調法也書畫の掛物より掛けて見る作物の肥を油斷せす投入立花の工みより茄子大角豆の正風なるか見處多く茶湯蹴鞠の遊より澁茶を呑んてむかしがたりこそおかしけれ玉の臺より茅葺の家居心易く高きに居らねは落るあふなけなく迷はねは悟らす念佛のかはりに業を怠らす實義をつくすは神詣に比し仁者にならうて山には木を植え智者のこゝろを汲て田の水加減を專にし珍肴鮮肉の料理より蔬いちすの雜炊か後腹病る氣つかへなしすべて世の中は飛鳥の川の流れきのふの淵はけふの瀬となるごとし唐の咸陽宮萬里の長城も終には亡ひ平相國の奢も一世のみ鎌倉の將軍も三代を過ぎす北條足利の武威盡き織田豐臣の榮も終に一代なり時過き世變れは誠に夢のごとし世に稀なる珍味も舌の上に有るうち伽羅蘭麝の薫りもかぐ中のみ樂は苦の基財寶は後世の障遊興はしばしの夢他の富もうらやます身の貧も歎かす只慎むべきは貪慾恐るへきは奢なり抑田地は萬物の根元にて國家の主寶なれは父母の如く敬ひ主君の如く尊うとみ妻子の如くいつくしみ寸地をも捨す何處にても鍬先の天下泰平五穀成就願ふより外更になし

今年米親といふ字を拜みけり

（五〇）

爰に宇達と聞えし者幼きより俳諧の興句をこのんて心を苦しめ晝夜のへたてなく凝りかたまりける世界の俳諧師の司とならんと幾年となく辛苦しける今は我につゝくもの娑婆にはあるまじと高慢の心起り都に出てゝ世界の人を驚かさんと大江戸のかたはらへ草菴を結び偶居して日々たかふりける餘りの高言に人々迷ひ彼の先生の許に隨身者十を餘りて出來ける宇達申けるは草庵を開いて今宵は初の月見なれは各集りて興句を樂しむべしとて何れもたそかれ頃より庵りにつどひける先生團窓の許に燈火をかゝけて文臺に向ひ控えたりいさ各とて筆をてんして折しも日は暗々と冴へ渡り各々今宵の月いかにとて

三日月の頃より待し今宵哉　宇達

姨捨はあれにて候とかゝしかな　楚仁

ありあひの山てすますやけふの月　南親

名月をとつてくれろといふ子哉　嘉南

蚤蝿にあなとられつゝけふも暮ぬ　羅堂

是路

風登

雅遠

宇達文臺にもたれしはしまとろみしか柴の折戸に音するものあり宇達飛石つたいに誰よと問ふに少

しく遠方よりと答ふ柴の戸をひらき見れは道はいかに面色朱をそゝきたる如く両眼は日月の光りをなし鼻はすりこ木をたてたるか如し背には羽根を負ひ團扇を持ち我は喜撰か嶽に住む二郎坊かつかひなり少しくたつねたき子細ありて我をつれ行く也と言ふかと思へは肩をつかみ虚空くわう／＼たる月を目あてに飛ひ去りたり如何の事かなと今はせんかたなく心のうちに思ふやう我俳諧道に天狗になりたる故くたんの便りをうくること今更くやんてせんなし凡そ地を去ると幾ばくといふ事知らずあたかも水晶をつらねたる如きの山に打おろして手足ふるひおのゝきこゝはいつくと申す山に候や又地を去ること幾ばくに候やと問へば彼の天狗こゝにあたり須彌山といふ月と日の出る處也いさ一句聞んまた地を去る事十六萬八千里なりいさいさとありける

月と日を常磐の菊の山路かな

さあらは進行かんとてまたも空中をゆくやゝしばしはるか向をのぞめは巍々たる山そびへたり杉の林のうちには火焔たちのほり光々たるありさま左右には數多の天狗ならひ居て今俳諧の高言せよ聞かんとて娑婆にて天狗道をそしりし罪すくなからず棚の藥罐は天狗獄門なとゝ與句にことよせ天狗をそしりおのれ天狗なり罪すてがたし與句の罪耳に入りし取捌きなりとありて大將の天狗碁を打ち居たり其儘を題として

碁を打ちくらす杉の山里

是に前句を百付くべし宇達頭をあけて

頭にも雪たくはへて氷室守
碁を打ちくらす杉の山里
木食の馳走に梯子持歩行き
碁を打ちくらす杉の山里
源平の軍とやらかあるさうな
碁を打ちくらす杉の山里
女房に綿入る日はせばめられ
碁を打ちくらす杉の山里

この頃の餅はと母にさゝやいて
碁を打ちくらす杉の山里

吹く風の耳に入りて一睡の夢は覺にける

蘇生坊　一茶

（五一）獅子老人三顆圖の贊

あふむくもうつ向もさひし百合の花

其頃の古老達も年來の自負を荷にして正統となのり嫡傳と稱しておのれに勝て道をば信せすおのれに負けて嫉妬を起す尾の越人か不猫蛇の如き難破四方に蜂起せしは古文眞寶の師の説をさへいまた讀まさるやと七十年の今から見るさへ扨てもとばかり不便のことなり去來許六其角嵐雪の如き古老をおいて昨今の東花坊ひとり以心傳心いかんといはゝ古翁の門人九百九十九人は俳諧をする故に東花坊一人は俳諧をせさる故にと答へん是たゞ僅かに信の萬卷の表よりも得かたき處あれはなりこのところに此信を爲たらん人はたとへ一字のよめさるも一理萬通の眼を得て七十年の世はへたてとも芭蕉翁二と一座に遊ぶ事うたかひなし壹分の金のいやしうして上下萬民東西八方縱横自在に通達するか如く正風といふ一風ありと思ふは邪風なり其内心の正風なる人何そ家業に邪をなさんや藝能に邪を好まむや家業に正中を好み藝能に正中を好む人なんそ内心に邪を好まんや禮式といひ法格といひまの當り見るところなれは學問とて書物をさかすは他の鼻の穴をかりて息せんと思ふ也されは僧俗四民のうへとても鐘を鑄て鑄型の土をとり捨てたるが如く又とて仕直すこともならねは生れつきたる目鼻の如く面／＼それ／＼この身この儘の自然に遊ふへき事なるを心に下卑あれは利欲にはしり心にぬめりあれは名聞にたかふり佛法を行するといへは出家のまねして座禪に媚ひ儒學といへは唐人になりたかる皆これおのれか平生をうしなふ病人にして修行とは思ふべからす

二刀は自殺他殺を表はしてその元服の始めにまづ

樂二汝幼志一介レ修二男之事一とそしかるを臆病に隱居をこしらえ身に八德とやらいふ物を着し二字に添えたる大小を忘れて頭陀袋に張笠とは汚名を子孫にかふらせておのか心にかつことならぬ卑怯未練は是非もなしそれを風雅の名に着せられて吾祖も近ごろ迷惑になるべし

風雅の寂といへは貧學の洒落を本據と思ひ祿にはなれ世に捨られしも本意として耻とせす是全く金と眞鍮の取違ひ也むかし賢者の隱遁多かりしは戰國の事なり又たすへて官を辭して氣儘に遊ぶなと唐には耻とせさる故ある事を知るべし晉王沈か釋時論に衰龍出二於福禍一卿相起二於汎夫一といへり日本は開闢以來君臣の道歴々として異國の世法とは雲泥の違ひあり今萬世家系をいふに皇別神別蕃別の三を出てす只隱者の皆捨てし反古に魂を奪はれて其取違の害の輕き分か朝寢夜遊ひを是と思ひ家の爲の立身を俗なりと卑しみ又其害の大なるは家祿をすて身代を投けやりて不喰貧樂を最上と思ふ爰によく思ふべし是は風雅を信するに以て風雅を誹るにも劣れり世にかゝる佛法さへ出家よりは俗家のための法なるを况して風雅を億萬の中の五三人なる隱者の爲めの道ならはさりとはせまきよ圍棊にも博奕にも劣りたるいたつらことなるべし佛法も風雅も形にもとめてするものゝためにはあらす心に信して其本德を得させんか爲なり一切萬物本源は寂しきか體也寂は靜の事也人も若き心は靜かならす四序も春夏は靜ならす藝能も下手の間は靜ならす碁將棊も俳諧も向ふと滅多に忙かしく騷らしき心にある間は上手にあらす國家の法も治れは靜なり年々月々の新法あらは心靜かなるまし假令へは行燈一ッ置とても其毎夜置處の定りたるは靜なり横竪に置たるは騷し寂しみは風雅の體其體を心とせは何そ思ひ邪あらんや佛法世に盛んなれとも釋迦の如く悉く出家さよといふにあらす况して俳諧の世法たるや芭蕉の境界を眞似るに及ふへきや

十論を讀み古今抄を見て多才に驚き博覧を譽めて爰にこの道ありなんとひたすら信仰顏なる人々とてもかの糟粕に糞を呑みて祖翁を尊とみ二祖をあかまうも必竟遊藝の勝負とはいふへく全く信するといふものにはあたらじ漢語不得手の國に生れていはれぬ餘所の詞に巧拙を探さんより生れたまゝに持まへの俗談平話の雅俗を辨へてかゝる不思議の妙道學ひても學ふべし

そも本來の面目とは釋迦孔子にも一分一點違ひのなき目鼻に何の不足やあらんたゞ言行の取違ひより地獄におとされ極樂にほれまとふはた談笑といふ詞も史記よりかりたる名目にして爰に談笑を我門の要語なることは一向宗門に倣へる家風をわきまふべしすへて諸宗の說法には獅子座を飾り威儀を莊嚴するに彼の親鸞は愚禿と名のり我れ行んそ珍らしき法を發して人を救はば弟子といふべし如來の本願を我も信し人にも信しさすることなれは御同朋御同行なりとて我は弟子一人も持たずの下品は下りて自信敎人信の內祕より我も悅ひ其悅ひを人にも聞かす事なれはとて談議といはす讃談と名つけて平座にありて横向に談し示しゝなりこれにならひて談笑とは學問くさき沙汰なしに朝夕の茶のみ噺なから四時を友とし造化にしたかふ虛實自在の爲人なれは彼の念佛の大俗と稱するよりもなほ俗中の俗に下りていさゝか言語の雅俗より口業の病を先として玄々妙々の道あることを心は向上の一路といへり

此書は素堂隱士より北窓翁に傳ふ翁は堂の三世なり予又翁に從ひ俳諧を學ぶ故に秘藏となす今謹んて之を鋻るに悉く皆天地自然の道理なり此道を學ぶもの信せずはあるべからず聞說く人は鬼神と酙酌すといへども豈智慮分別を以てのみならんや唯先哲の手を借るべきのみ之を學ばずして何を以てか其域に至らん然りといへどもこの書僅に寸紙を越えず玆によつて予註釋を加へもつて小卷となす吾黨讀易からしめんと欲してなり慢りに漏脫すべ